

ずっこけバックパッカー、人民元投資の旅

ずっこけバックパッカー、人民元投資の旅

（貧乏旅行人的人民元投資）



ずっこけ元バックパッカーが、投資の世界へ初挑戦

株？ 先物？ いやいや、ターゲットは中国のお金、人民元

元放浪の旅人が意地とプライドをかけて中国へ

勝負は1日、まさにワンチャンス。悪戦苦闘の真実のストーリー

旅と投資の奇妙なコラボレーション

旅に出たい方、投資って何なの？と思われる方、必読の1冊

ZBP たっちゃん 著

この話は、2005 年 4 月に私が実際に行ない、2007 年 7 月現在も継続している投資の記録です。

2005 年 7 月 21 日、中国の中央銀行は人民元の切り上げを行ないました。それ以降、人民元を取り巻く環境は、めまぐるしく変化しています。

ですから、現在と当時では状況がまったく異なることを最初にお断りしておきます。

人民元や、他の外貨のレートも当時のものを採用しております。

2005 年 4 月に戻ったつもりで読んで頂きたいと思います。

さらに私の示す数字やその他のデータ、また年代など、きちんと調べているつもりですが、古いものや、間違いがあるかもしれません。あくまでも参考として捉えてくださるようお願いいたします。

CONTENTS

1.	はじめに	P5
2.	解説 1 中国人民元投資とは？	P9
3.	解説 2 バックパッカーとは？	P21
4.	雲の上で	P27
5.	香港	P45
6.	いざHSBCシンセン支店へ	P63
7.	アジアンビューティー	P70
8.	口座開設	P78
9.	チョットまってよ	P83
10.	中国脱出	P93
11.	香港最後の夜	P96
12.	帰国したのはいいものの	P119
13.	一難去ってまた一難	P128
14.	大いなる勘違い	P136
15.	待てど暮せど	P146
16.	口座開設ついに完了	P151
17.	中国への送金	P156

18.	ファイナルミッション	P165
19.	ついに動いた大巨人	P171
20.	それから現在、そして未来は？	P176
21.	リスクはないの？ いや、あるでしょ！	P183
22.	あとがき	P191

はじめに

はじめまして。この本を手にとって頂きまして、ありがとうございます。最初にお礼を申し上げます。

私が貧乏旅行と投資というまったく関係のなさそうな、2つのテーマで本を書こうと思ったのには理由があります。

まず貧乏旅行についての理由は簡単です。私は旅が大好きで、過去にいろんな国々をリュックを背負って旅して回った経験があるので、その時に見たり感じたりしたことを書いてみたかったのです。ツアーの旅行ではなく、貧乏旅行とはどんなものなのかをお伝えできればと思います。

貧乏旅行はツアーの旅行とは違い、訪れた地域の人々とも深く触れ合うことができ、その国についてより深く知ることができるディープな旅だと思います。現地の人と友達になって家に泊めてもらったり、ツアーでは絶対に行けないようなところに行けたり、その分、変なことに巻き込まれたり、日本では絶対に会わないような変な人に会えたり、とにかく日本の常識では考えられないようなことが海外、特に発展途上国では日常的に起こります。私はその非常識さが楽しくて仕方ありません。もちろん安全あってのことですが。

お金はあまり無いけど時間だけはある方、日常に疲れていて何かを

変えたい方、思い切って旅に出たい方、そんな方にこの本をお勧めします。少しの時間でも構いません。思い切ってリュックを担いで海外へ行ってみれば、今までと違う自分に気付くかもしれません。

次に投資についてですが、私は投資に関しては今まで経験もなく、とにかく難しいものだと思っていました。しかし私も家庭を持ち、子供ができて、将来について考えると不安になることがたくさんあるのに気付きました。やはり第一に経済的なことです。ひとりの子供を育てあげるのに何千万円もかかるという話はよく聞きます。それに最近の世の中の情勢を見れば分かると思いますが、日本の年金制度や会社の終身雇用制度の事実的な破綻などです。昔のように、ひとつの会社に定年まで勤め上げて、年金をもらって生活すれば残りの人生は安心だという時代は、もう終わってしまったのではないのでしょうか。大手企業に勤めているから大丈夫とも言えません。リストラの危険性も大いにあります。定年後の年金も暮らしていけるだけの十分な額がもらえるとも言いきれません。年金支給額は、今後もさらに減額される方向にあります。私たちの世代は将来、年金を本当にもらえるのでしょうか？

このように考えると、私たちのような現役世代でも、収入源を会社からもらう給料のひとつだけに限定する必要は無いのです。別のところからも収入を得て、生活を安定させるということも考えるべき時代

ではないでしょうか。そのひとつとして投資という手段もあるのです。

投資は、お金持ちで資金が余っている方やプロの投資家、仕事をリタイアして時間とお金に余裕のある方などのためだけにあるものではありません。私たち一般の人にもできることです。ただ、とっつきにくい面があることは確かです。それに投資には、もちろんリスクが伴いますが、完全に納得するまで自分なりに調べれば、リスクは軽減できると思います。ペイオフの解禁により、現在では銀行に預けておいても、リスクがまったくのゼロではないのですから。

投資といえば、今流行のわりと堅実な投資信託、国債、そして株に始まり先物取引、不動産投資、FX、外貨預金など挙げればきりがありませんが、もちろんそのすべてを覚える必要など無いのです。まず何か自分が興味のあることから、調べ始めればよいのです。何かを始めると言うことが大切だと思います。

何かを始めるきっかけとして、私が実際に行なった人民元投資を例に取り、それをこの場で紹介することで、投資は必ずしも難しい訳ではない、興味を持って調べてみれば私みたいな一般人でも始められるということを知ってほしいと思ったのです。

特に私と同世代の方や、投資に興味はあるけど何からやればよいか分からない方、投資ってそもそも何なの？と思われる方にこの本を読んでもらいたいと思います。こんなちょっと変わったやり方もある

のです。

投資の本となると難しくて敬遠したくなる気持ちも十分に理解できます。私自身も投資については、よく分からないことばかりです。もちろん今回の人民元投資については自分なりに調べましたし、勉強もしました。それで納得できたからこそ、この投資に踏み切れたのです。ですからこの本は私自身の簡単な言葉で分かりやすく、今までの旅のエピソードなどを折り込んで読みやすく書いています。堅苦しいことを書く気なんてさらさらありません。投資の本？ と構えて読まれる方にとっては、おそらく拍子抜けするくらい簡単に読める本だと思います。

この本が、投資の世界へ入門する前の案内役にでもなればよいのですが。ぜひ最後までお付き合いください。この本を読むことで旅と投資に何らかの興味を持って頂ければ幸いです。

では、出発の準備はよろしいですか？ 人民元投資の旅へご案内いたします。それでは、一緒に旅に出かけましょう。

解説 1 中国人民幣元投資とは？

中国人民幣元、つまり中国のお金、人民幣元。これの投資って一体なんだろう？ と思われる方もいらっしゃるかもしれません。そこでまず、簡単に分かりやすく中国人民幣元投資とは何かを説明いたします。

数年前より人民幣元の外国の通貨に対する為替レート（外貨との交換比率）が低すぎると言われ続けています。外国の通貨に対する為替レートが低いということは、外国に物を売る輸出に有利なのです。しかし逆に外国から物を買う輸入は不利になります。

このことをもっと分かりやすく、最も身近なところで日本とアメリカの例を取ってみましょう。

- ① 1 ドル = 200 円の円安ドル高の時と、
- ② 1 ドル = 100 円の円高ドル安の時を考えてみましょう。

まず、① 1 ドル = 200 円の場合、
アメリカ人が日本で買い物をする時、日本で 200 円の価値のある物が 1 ドルで買えるのです。ですから日本の会社は、アメリカ人に対して物を売りやすいのです。

しかし、逆に日本人がアメリカで買い物をする場合は、アメリカで 1 ドルの物に 200 円も払わなくてはなりません。

では、② 1 ドル = 100 円の場合、

すべてが逆になります。アメリカ人は1ドル払っても、日本で100円の物しか買えません。ですから日本の会社は、アメリカ人に対して物を売りにくいのです。

しかし日本人は、アメリカで1ドルの物が100円で買えるのです。このような理由から、我々日本人からすれば、次のように言えます。

- ① 円安の時には輸出に有利。
- ② 円高の時には輸入に有利。

上記に述べた①と同じ理由で、中国は人民元安をよいことに、輸出を増やし続けています。

私たち一般人に最も身近で分かりやすいのは100円ショップです。現在100円ショップでは、日本で造ると400円～500円くらいしそうな物も100円で買うことができます。それらのほとんどが【MADE IN CHINA】中国製です。日本で造っては、とても採算が合わないのです。採算が合わないので、日本の会社は中国に工場を作って賃金の安い労働力で対抗するか、その事業を辞めてしまうなどの苦しい選択を迫られています。これが人民元の為替レートが低すぎると諸外国から叩かれる理由のひとつです。

中国はこの低すぎる為替レートに、ものをいわせて輸出大国になりました。昔の【MADE IN CHINA】といえ、安かろう悪かろうの

代名詞だったような気がするのですが、今ではどうでしょうか？ そんなことはないのではありませんか？

この低すぎる為替レートを武器にアジアはもちろん、アメリカやヨーロッパにまで輸出を増やし、外貨を稼ぎまくっているのが今の中国の現状です。

それに加えて、中国はこの低い人民元の為替レートが上がらないように外貨、特に米ドルを買い続けているのです。需要と供給のバランスを保つため、米ドルをたくさん買うことで米ドルの価値を支え、米ドルの為替レートが低くならないように操作しているのです。つまり人民元のレートが上がらないように、通貨当局が為替介入をしているのです。そして買った米ドルの現金や債権などを資産として保有しています。

貿易で稼いだ米ドルや他の外貨、そして人民元が上がらないように操作するために買った米ドルなどの資産のことを外貨準備高と言います。（外貨準備高の本来の意味は、通貨危機など困った時に使うためのお金です）各国の所有している外貨準備高は、今までは日本がダントツの1位だったのですが 2004 年末、中国は日本を急激に追い上げ前年比51.3パーセントの伸びを見せました。日本が追いつかれ、追い抜かれる日もそう遠くはなさそうです。

そんな中国のことを、アメリカをはじめとする他の国々が放ってお

くはずがありません。人民元の為替レートを切り上げようとする圧力が年々高まってきています。そこで、人民元の為替レートが低いうちに、つまり切り上げが始まる前に人民元を買っておこうというのが人民元投資のスタートです。

人民元は米ドルとの固定相場制（為替レートを固定する制度）を採っており、1ドル＝約8.3元に固定されています。これが1999年から続いています。仮に将来的に1ドル＝4元になれば、手持ちの人民元の価値が2倍になるというものです。

例えば分かりやすく、現在1ドル＝8元だとしましょう。人民元を今1,000ドル分買ったとします。米ドルから人民元に両替をするという意味です。すると、

$1,000 \text{ ドル} \times 8 \text{ 元} = 8,000 \text{ 元}$ を手にすることができます。この

8,000元をしばらく持っている間に、人民元の為替レートが切り上げになり、1ドル＝4元、と仮に2倍になったとするとどうなるでしょう。この時、手持ちの8,000円で今度は米ドルを買い戻すのです。

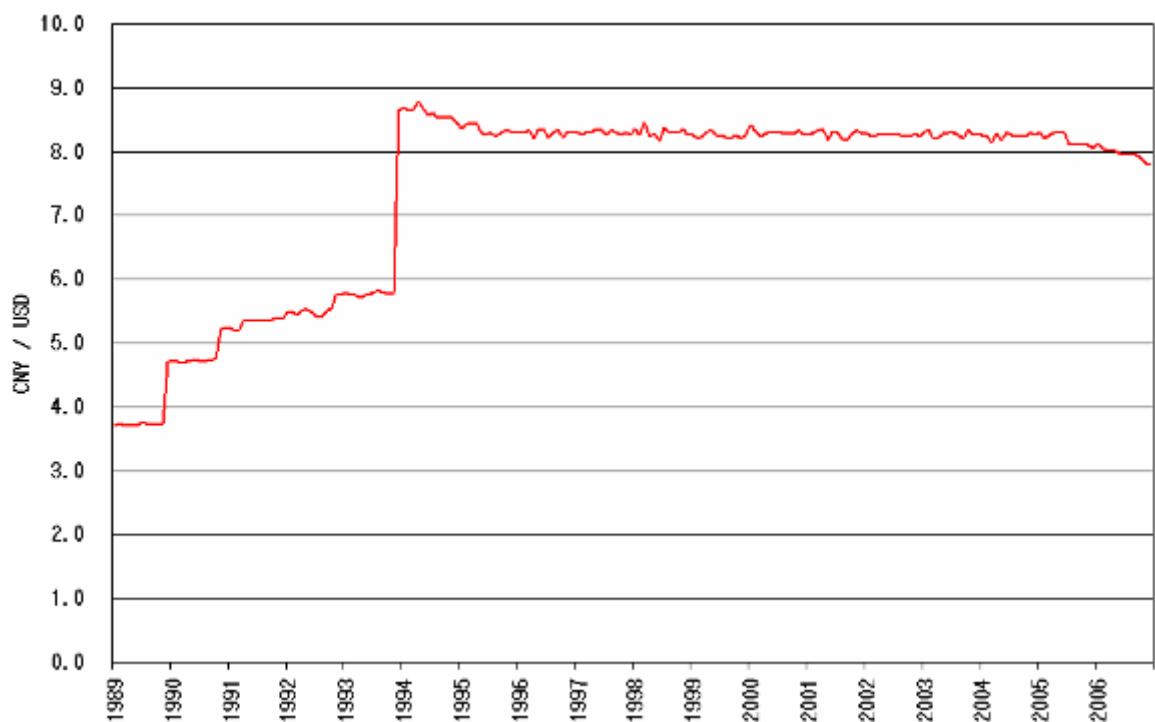
$8,000 \text{ 元} \div 4 \text{ ドル} = 2,000 \text{ ドル}$ になるということなのです。

つまり元々の1,000ドルを一旦人民元に替え、切り上げが行われたあとに再び米ドルに替えるという行為だけで1,000ドルが2倍の2,000ドルに増えることになります。便宜上ここでは両替などの手数

料は無視します。

さて、簡単にそんなことができるのでしょうか？ これはさすがに誰にも分かりません。

では次のグラフをご覧ください。1989 年ごろは1 ドル＝4 元を切っていたのです。これを見ると、1 ドル＝4 元という数字もまんざらではないことが分かって頂けるのではないのでしょうか。

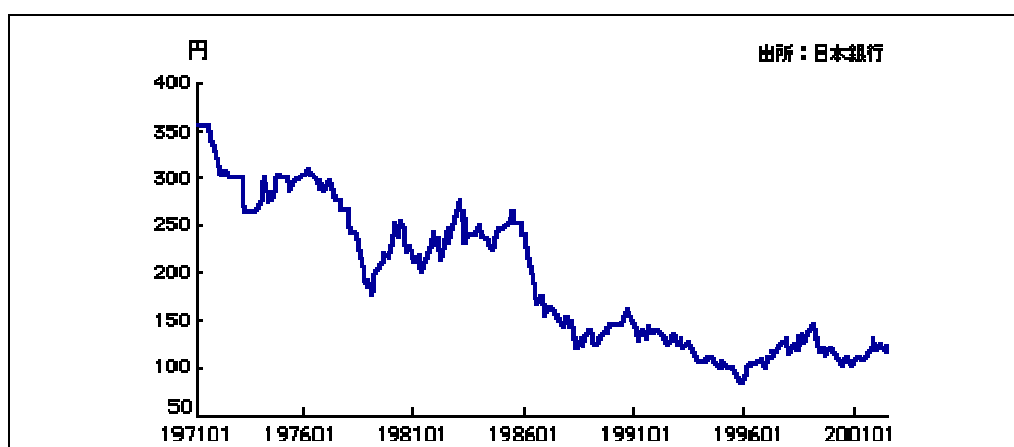


(人民元と米ドルの為替レートの推移)

さらに、中国の近年の経済成長率は、毎年10%前後を 10 年以上続けています。かつての日本がそうだったように。

覚えていらっしゃる方も多いと思いますが、昔、1971年、円とドルの関係はというと、1ドル＝360円の固定相場制だったのです。この円安の力を借りて日本は超輸出大国として、すさまじい経済成長を遂げました。こういう円安をいつまでも諸外国が許しておくはずもなく、1971年12月、1ドル＝308円へ、16.88%の切り上げが行われました。そして、1973年2月固定相場制から変動相場制（市場に任せて為替レートが変わる制度）へと移行していきました。その後1995年には、1ドル＝80円を切る超円高になりました。現在でも1ドル110円～120円くらいで推移しています。つまり円は固定相場制のころと比べると3倍～4倍に価値が上がっているのです。

では、ここで米ドルと円の推移をグラフで見てください。



（米ドルと円の為替レートの推移）

このように昔の日本の例を見ても分かるように、中国の人民元もか

つての日本円のように化ける可能性が大いにあると思われます。

このころ、日本が変動相場制へ移行した時期に何があったかという
と 1964 年、東京オリンピック、その後 1970 年大阪万博などが世界的なイベントでしょう。そして先にも述べましたが、1971 年の切り上げ、1973 年、変動相場制への移行と続きました。

では中国の場合はどうでしょうか。2008 年、北京オリンピック、そして 2010 年、上海万博。どうですか？ 何処か似ていませんか？ 何かが起こる気がしてきませんか？

経済面でも考えてみると、中国は宇宙開発に於いて旧ソ連、アメリカに続いて有人宇宙飛行を成功させています。自動車レースの最高峰、F1 グランプリも 2004 年より上海で開催されています。これらを考えると中国は、完全に経済大国の仲間入りをしたと考えるべきではないでしょうか。

中国国内にも目を向けてみると、今では多くの中国人観光客が日本を含め世界中に押し寄せています。もちろん中国でも一部のお金持ちの人たちでしょうが。海外旅行には、やはりお金がかかります。海外旅行をするにはそれだけの経済力が必要ですし、海外でお金を使うということは、人民元から日本円や米ドルなどの外貨へ両替しているはずです。クレジットカードを使ったとしても、1 ドル = 8.3 元という中国人にはかなり悪い為替レートで、よりたくさんのお金を使わなく

てはなりません。ですから、海外旅行をする中国人や輸入を主とする企業は、人民元の切り上げを願っていると考えるのが普通ではないでしょうか。

20 年くらい前の話ですが、私が初めてアメリカに行った時は 1 ドル = 240 円くらいだったと記憶しています。はっきりとは覚えていませんが、1 ドル = 200 円以上だったのは間違いありません。何を買うにも、日本円に換算して考えると、「うわー高いなー」と思ったのを覚えています。慣れてくると、日本円に換算しなくなりドルで考えるようになったのですが、そのドルで考える時のレートは感覚として 1 ドル = 100 円くらいが妥当だと思いました。マクドナルドで一番安いハンバーガーが 1 ドルにしても、240 円は高いですからね。

あの時の私と同じことを、海外旅行をする中国人は考えているのではないのでしょうか？ さっきのマクドナルドのハンバーガーが 8.3 円ですからね。相当高いですよ。中国で 8.3 元あれば、小籠包（小さい肉まん）が何十個も買えるはずですよ。

人民元は現在、円や米ドルやユーロのように世界を流通していません。あくまでも中国国内を流通しているお金です。厄介なことに中国からの持ち出しも原則的には禁止されています。国外への持ち出し

は 6,000 元（約 81,000 円）が限度なのです。

ではどうやって人民元を手に入ればよいのでしょうか。最も簡単な方法は、中国へ行き人民元に両替をして中国を出国する際に、そのまま人民元を現金で持ち出せばよいのですが、持ち出しは 6,000 元までしかできないのです。それ以上を持ち出そうとすれば、出国時に没収される可能性もあるのです。

私が旅でチベットを訪れていた時にこんな出来事がありました。

（歴史的にはいろいろありますがチベットは中国になります）旅で出会った仲間何人かでビールを飲んでいると、ドイツ人の旅行者に声をかけられました。「人民元がたくさん余っているので、米ドルか何かと両替してくれないか？」と言うのです。詳しく話を聞いてみると、まだしばらくチベットにいるつもりでたくさん人民元に両替したのだけれど、急に気が変わり中国を離れることにした。それで手持ちの人民元の扱いに困り、両替を頼んできたという訳でした。私たちもそんなにたくさんの米ドルは持っていなかったもので、みんなそれぞれが日本円、米ドル、タイバーツ等と両替してあげました。米ドルや日本円はたいてい、どこの国でも両替ができるからです。

では、日本で人民元を手に入れることはできないのか？　と思うか

もしれません。先ほど述べましたが、人民元は中国以外ではあまり出回っていないのです。日本でも人民元への両替ができる銀行はあるのですが、手数料がとても高いのです。聞いたところでは、日本円から人民元、そして人民元から日本円、と往復すると、30%くらいの手数料がかかるようです。100万円の投資に対して30万円は手数料ということです。これでは人民元投資をして、人民元が30%切り上げになっても、その儲けは全部手数料で持っていかれてしまいます。それ以上に人民元が切り上がれば話は別ですが、これではあまりよい投資話にはなりません。

では、どうやって日本人として投資に見合うだけの人民元を安全に手に入れるのかというと、こうです。

- 1、 まず中国に行く。
- 2、 中国国内の銀行に行き、人民元の預金口座を開く。
- 3、 この預金口座に日本から送金する。
- 4、 人民元を銀行預金として持つ。

という方法が考えられるのです。

日本から送金して人民元の定期預金として、しばらく寝かせておきます。日本と違って中国の銀行はまともな金利を提供してくれます。人民元が切り上げされ、為替レートがぐんと良くなった時に寝かせておいた人民元を金利と共に日本円に再び両替する。

これです。これこそが私の考える人民元投資の姿です。

ただし、いつまで寝かせておけばよいのか、どのくらい上がるのか、もしくは下がるのか、本当に儲かるのかは誰にも分かりません。あくまでも予想です。リスクの無い投資はないと聞きます。それに期間も短期的な投資ではなく、中長期的な投資になってしまいます。投資というよりも資産運用といったほうがよいかもしれません。しかし近い将来、人民元の為替レートが下がるということは私の調べた限りではなさそうです。私にはこれが、ローリスク・ハイリターンの狙える投資に見えて仕方ありません。それに投資という立派な言い訳のもとに外国に旅ができるのです。

そう思い立ち、それじゃ、いっちょ、やってみるか。と立ち上がったのが投資なんてまったくのシロウトである私です。過去にはバックパッカーとしてリュックを担ぎ、いろんな国をブラブラしていた私です。あまり綿密な計画を立てるのは苦手な直感で動くタイプの私です。

投資と聞くと日経新聞を読み、パソコンで株価のチャート表を見ながら証券会社や銀行、不動産会社の営業マンと電話でやりとりをしたり、指示を出しているかっこいい姿を想像してしまうかもしれませんが、今回の私の場合はそんなにかっこいいものではありません。まさに自分で駆けずり回り悪戦苦闘して、まったくスマートとは言えません。「これが本当に投資なんていえるのか？」と投資家のみなさまか

ら、お叱りを受けるかもしれません。とにかく貧乏旅行者としての視点や、やり方で投資というものに挑戦してみたいと思います。さて、どうなることでしょうか。

ひとくちメモ （人民元投資）

●人民元投資とは、人民元安、円高の時に人民元を買い、人民元高、円安になった時に円を買い戻すことで利益を狙う投資である。

●人民元投資のやり方は、中国へ行き、中国国内の銀行で預金口座を開き、その口座へ日本から送金する。預金として人民元を持ち、金利を稼ぎながら、再度日本円への換金タイミングを探る。最終的に日本円へ換金して利益を確保する。この方法がベストと思われる。

解説 2 バックパッカーとは？

ここでバックパッカーとはどんなものなのかという説明を含めて、私の自己紹介をさせてください。その前にお断わりしておきますが、私は本を書くのが、まったく初めてです。文章や表現など分かりにくいところなど多々あるかと思いますが、そのあたりはお見逃してください。

私は大学を卒業後、普通に就職活動をして、国内の住宅建材メーカーに入社しました。扱っていた商品は、アルミサッシをメインとし、その他にキッチン、ユニットバス、室内建具、カーポートなど家に関する物でした。そこで営業マンとして販売店や工務店に売り込みをかけるという仕事をしていました。営業成績はわりと順調だったと自分では思っています。しかし、そんな忙しい生活にふと疑問を持つようになり、五年半で退職しました。

英語を本格的に話せるようになりたいという願望は昔からありました。英語を話せると地球上のいろんな人種、10億人と会話ができると言われていました。それに何よりカッコいいじゃありませんか。

しかし留学なんてお硬いのは性に合いません。子供のころから机に向かって勉強するのが何より嫌いでしたから。そこで思いついたのが

ワーキングホリデービザを取って  ニュージーランドへ行き、羊飼いをしながら実践英語を学ぶという計画でした。

ニュージーランドで旅を楽しみながら、バックパッカーズホステル、という値段の安いホテルで仕事を見つけました。YMCA やユースホステルのような感じのホテルです。仕事と言っても賃金をもらうのではなく、1日2～3時間程度の仕事をする代わりに部屋代をただにしてもらうエクスチェンジと呼ばれるもので、仕事の内容はベッドメイクや、掃除、たまにチェックインの受付といった簡単なものでした。そして空いた時間に自分で英語の文法を勉強したり、泊まりに来た旅行者と英語でいろんな話をしたり、そこに住んでいた地元の大学生をつかまえては、発音を習ったり、分からないところを尋ねたり、前日覚えた表現を試したり、という生活を2ヶ月ほど送りました。

その後、このホテルのオーナーに羊飼いの仕事を紹介してほしいと頼み、また旅に出ました。そのうちにEメールで、羊の牧場の手伝いを探している人がいるという連絡を受けて念願の羊飼いの仕事に就くことができました。

私の想像していた羊の牧場は、おじいちゃん、おばあちゃんがいて、その息子夫婦、そして子供が2～3人いるような家庭的な牧場だったのですが、実際に仕事をするところになったところは若いオーナーひとりでやっている牧場だったのです。私より2歳年上と若く、牧場経営

を始めて間もないこともあり、やる気満々で仕事は朝早くからハードなものでした。最初のころは言葉を理解できず怒鳴られることもしばしばでした。少なくとも草むらに寝そべって羊をぼんやり眺めるというものではありませんでした。

住むところは WOOLSHED（ウールシェッド）と呼ばれる大きな羊小屋で、その一画に住むためのスペースが作ってありました。広さでいうと、たたみ 12 畳くらいでしょうか。そこにオーナーと、男 2 人で生活していました。私にはベッドもなく小さなマットに寝袋で寝ていました。テレビや洗濯機もなく、食事は交代で作るという不便な生活でした。仕事が終わると特にすることもなく 2 人で部屋で酒を飲んだり、たまには外に飲みに行ったり、話をするくらいしかありません。でもこの環境は私にとって、とてもよいものでした。ここで体力と英語力を鍛えられました。まさに英語漬けの日々でした。毎日、「今日の仕事の段取りを言ってみろ」とか「この景色を見て何か感じたことを話してみろ」などの質問に英語で答えないといけないし、街に飲みに行けば、女の子をダンスに誘わなければなりません。

そんな環境で 5 ヶ月間生活し、英語も日常会話ができるレベルにまで上達しました。彼にはとても感謝しています。その彼とは今でも親友です。

1年というビザの期限が迫り日本に帰る予定だったのですが、気が変わり、もうしばらく現実逃避の旅を続けることにしました。

ニュージーランドを出国後  オーストラリアで1ヶ月間バーテンダーとして働き、小銭を稼いだあと、タイに入りました。タイから東南アジアを中心に10カ国を旅して回りました。それぞれの国でたくさんの人に出会い、さまざまな経験をし、ひどい目にも遭いました。月日が経ち、いつしか洋服や靴、そしてリュックも使い込んでぼろぼろになりました。ここで旅の話をすると、とても長くなるので書きませんが、ひとつだけ簡単に書かせてください。

それは  ラオスでの出来事です。ラオスの首都ビエンチャンにバスで着いた時、ひとりの女性に出会いました。そして恋に落ちました。彼女もバックパッカーとしてアジアを旅していたのです。彼女の帰国までしばらく一緒にラオス、タイと旅を続けました。その彼女が今では妻となりました。ちなみに妻は日本人です。

ニュージーランドを出て約1年、手持ちのお金をすべて使い果たし、やっと日本に帰国したというしだいです。というよりも妻と出会ったことで、ようやく帰国へのカウントダウンが始まったのです。もし妻と出会っていなければ、いまだに  インドあたりでうろうろしていたかもしれません。

日本に帰国後、定職を持つようになり結婚。その後2人の子供にも

恵まれ、現在に至る。という経歴です。

説明が長くなりましたが、このようにあまりお金をかけずに長期間旅をしている貧乏旅行者のことを、英語でバックパッカーと言います。リュックサックのことを英語でバックパックというので、それに人を表す、**ER** をつけて **BACKPACKER** と呼ぶのだそうです。

日本ではあまりたくさんは見かけませんが、世界中には若者を中心として、様々な年齢のバックパッカーがいて、安い宿に泊まり、時間をあまり気にすることなく、ぶらぶらしたり、少し働いてみたりと気ままな旅を楽しんでいるのです。

日本を訪れるバックパッカーが少ない理由は、ズバリこの物価の高さでしょう。安い宿も海外に比べればまだまだ少ないですし、とにかく移動代や食費などすべての滞在費が高すぎるのです。物価の安い国に行けば、同じお金で何倍もゆっくりしたり、ちょっと贅沢したりできるのでから仕方ないですね。余談ですが、日本にもこんな旅行者がもっと来てくれるような環境が整ってほしいと思っています。

人民元投資とバックパッカー、一見何の関係も無いように見えますが、こういうバックパッカーこそ普通の人が見えないものが見えたりすることもあるのではないのでしょうか。バックパッカーは普通の日本

人が泊まるような高級ホテルなどとは無縁です。高級料理も無縁です。ガイドが連れて行く、いわゆるぼったくりの日本人料金が設定してあるお土産屋にも行きません。地元の人たちが使う庶民的な宿や、食堂、屋台、マーケットなど地域密着型の旅をしているのです。

私も以前、 中国での旅を通して、中国という国を肌で感じ、現地の人々に接し、人民元も実際手に取り使ってみて、中国の物価を経験しています。

こういうバックパッカーから見た人民元投資、ということでしょうか。この一見かけ離れた 2 つのキーワードがなんとなく繋がってくるのではないのでしょうか。

これから書く話は、すべて私自身が実際に体験した実話です。英語も基本的なところは大丈夫なのですが、肝心なところで勘違いしていたり、計画性に欠けていたり、情報収集もツメが甘かったり、「もっとしっかりしろよ」（自分でもそう思います）との声が聞こえてきそうなほど間の抜けた部分も多いのですが、それらを含めてすべて実話なのです。

おっとすみません、前置きが長くなりすぎました。ではいよいよ本題に入っていきたいと思います。

雲の上で

「かんぱーい！」

バンコク、カオサンロードにある飲み屋。約2年におよぶ旅が終わろうとしていた。日本に帰国する前の日。ここに集まったのは旅先で出

会った仲間。中国からチベットを越え、 ネパール、インドと苦楽を共にした仲間だ。タージマハールで有名なインドのアグラで別れて以来の再会だった。2人はそれぞれ  バングラディッシュとインドから今日のために駆けつけてくれた。私を見送るためにとか一緒に酒をくみかわすために。久しぶりに会ってそれぞれの旅の報告をしあう。

アグラで別れたあと、謎の高熱を出したのは私だけではなかった。3人揃ってほぼ同じタイミングで高熱を出したようだった。ということは、どうやら食事の時に食べ物に何か入れられたのだろう。インドではある話だが、食堂の店主が何か悪いものを食事に入れ、具合が悪くなった客を病院に連れて行き、病院から紹介料をもらう。あわよくばその客本人からもチップをもらう。まったく困ったもんだ、インドってところは。まさに、まやかしの国だ。そんな悪いことをしてもガンジス川で沐浴をして体を清めれば、すべて浄化されるなんて本当に

思っているのだろうか。

私はカルカッタへ向かう汽車の狭い寝台の上でひとり高熱と戦ったのだった。あの時は無事にカルカッタに着けるのか本当に分からなかったが、一晩寝たらケロッと治ったのだ。

みんなそれぞれに武勇伝を持っている。 ベトナムでカツアゲされた話、中国の飲み屋でぼったくられた話、警察や日本大使館にお世話になった話、人にはとても言えないような話など。そんな話をしながら飲み続け、ひとりずつ壊れていった。

翌日、バンコクのドンムアン国際空港で2人に見送られて、日本へ向け雲の上へと飛び立ったのだった。あれから何年経っただろうか。

今再び、雲の上にいる。

雲の上といえはやっぱり思い出すのがチベットの都、ラサ。海拔3,658メートル。まさに雲の上の都市。ここは私のルーツである。もちろんこれは私が勝手に思っているだけだが。

ラサを訪れた時は強烈だった。中国の青海省、ゴルムドから仲間と闇タクシーをチャーターし24時間以上、食事休憩以外はほとんど走りっぱなしだった。

当時チベット自治区に入る外国人には、中国のビザ以外にパーミットという許可証が必要だった。これが無いと、ラサなどに向うバスや

飛行機のチケットも買えない。旅行会社で正規にチケットを買えばパーミットがもらえるのだが、とてつもなく高い。だから多くのバックパッカーは不正にラサを目指すのだ。中国人に成りすまし一般のバスを使い中国人料金で行く者、ヒッチハイクで行く者、いろんなヤツがいる。途中で公安（警察）に見つかればチベット自治区から無理やり追い返される。こんな理由から、違法にチベットを目指すことをバックパッカー達は「アタック」と呼んでいた。これは登山用語なのだろうと思う。この「アタック」に2度失敗して追い返された韓国人バックパッカーを私は知っている。

我々4人は違法にタクシーをチャーターし「アタック」をかけたのだった。これでも正規のバスよりはるかに安い。それにずっと早い。この中国人の運転手は我々にとってかなり有能で、外国人をチェックするための検問をあざやかに2つも突破してくれた。ほとんど休むことなく、あの寒さの中、何故かランニングシャツ1枚で運転していた。おかげで早く快適にラサに着くことができたのだった。

快適といっても標高5,200メートル級の山を越えて走る。車とはいえさすがに5,200メートルは体が悲鳴をあげる。出発地のゴルムドが海拔2,800メートル、そこから車で一気に2,400メートルを駆け登るのだから、いつ高山病になってもおかしくない状況である。とにかく濃い酸素が恋しい。そのタクシーの中でも頭が痛いと言をあげる者も

いた。しかし私は元気そのもので、途中で車を停めてもらい写真を撮る余裕さえあった。この時ばかりは丈夫な体に生んでくれた両親に感謝しない訳にはいかなかった。

ラサは7月だというのに、ヒョウが降るほど寒くなることもあったり、標高が高いため急いで歩くと息苦しくなる。そして、いっぷくするために飲むバター茶はまずい。とにかく今まで旅してきた中でも最も過酷な場所のひとつだ。高山病で動けなくなる旅行者も出るくらいだ。

ラサを出て、ネパールとの国境までは、仲間を増やし5人でランドクルーザーと運転手、ガイドをチャーターした。小さな村に泊まり、移動しながら5泊6日かけて国境を目指す。エベレスト山のベースキャンプや、湖、大平原や川を越えて車はひたすら走る。本物の遊牧民を見ることが出来るすばらしい体験だった。風呂にも入れず、お世辞にも美味しいとは言えない現地食を食らい、汚いベッドで眠る。まさに貧乏旅行の極致を堪能することができた。

本来なら観光客は入れないのだが、現地の子供と仲良くなり、鳥葬場にも入ることができた。鳥葬とは死んだ人の体を職人がナタで細かく切って、ハゲタカなどの鳥に食べさせることだ。これで鳥が魂を天に運んでくれると信じられているのだと聞いた。チベットではいまだにこんな風習があるのだ。しかし実際は、鳥葬される時点では魂は既

に肉体を離れ、来世への転生に向かっていると考えられている。結局のところ本音は、要らなくなった肉体を他の生き物のために役立てようという理由と、さらに火葬するための燃料費の節約といったところらしい。

信じられないほどの絶景や、とんでもない風習を目の当たりにすると、日本での常識なんて完全に吹っ飛んでいく。

こんなところが私のルーツと思ったのには訳がある。強い紫外線で日焼けした私の顔は、まさしくチベタンの顔そのものだった。チベットの子供と撮った写真はまるで兄弟のように見える。

ニュージーランドにいたころはアメリカンインディアンに似ていると言われ、自分でもそうかなと思っていた。



アメリカを旅行中、



メキシコとの国境の街サンデ

イエゴからロサンゼルスへ向かう長距離バスの中にアメリカのボーダーパトロール（国境警察）が乗り込んできたが、日焼けしてとても日本人に見えなかった私はパスポートを見せたにもかかわらず、しつこく質問攻めにあった。パスポートの写真と顔の色が違うのだから、無理は無い。当時英語がほとんど話せなかったこともあり、大変な目に遭った。結局、隣の席に座っていたアメリカ人のおばちゃんが説明してくれて、ことなきを得た。隣のおばちゃんとは道中、日本から来たことなどを一生懸命に下手な英語で話していたので、そのことが功を

奏したのだ。そのバスからは不法入国のメキシコ人らしき 3 人の男が連れて行かれた。

タイにいた時はタイ人から道を聞かれたことも何回かある。もちろんタイ語で。とにかく私は日焼けしていると無国籍人になるらしい。というか現地人になってしまうみたいだ。

しかし、そのチベットの子供と撮った写真を見たら、やっぱり私の顔はチベタンに違いないと思った。

それとラサのお寺でお参りしていた時のこと。チューメと呼ばれるバターで灯す照明のバターの香りと、チベット語で聞こえてくるお経、キャンチャ（五体投地礼）で祈りをささげる信心深い信者たちの姿を見ていると、心が安らいで体がお寺と一体化しそうな不思議な感覚になった。とにかく心が穏やかで落ち着いた、今までにまったく経験したことのない感覚だった。まるで懐かしい故郷に帰ってきたような感じだった。それまで私は無宗教だと思っていたが、実はチベット仏教なのかもしれないと思ってしまった。そんなことから、私は前世ではチベットにいたのではないかと本気で感じたのだった。

そんな昔のことを懐かしく思い出していたが、雲の上とは言っても、もちろんチベットのことではなく、今は飛行機の中だった。

時は 2005 年 4 月 16 日、土曜日。現在、福岡発香港行きのチャイ

ナエアーラインの機内。と言っても、いつものようにチケット代をケチったため正確には、福岡発、台北経由、香港行きの機内である。チケット代をケチろうがケチるまいが、このチャイナエアーラインは香港へ向け順調に飛行を続けている。

自宅を出てから、もうどれくらいの時間が経ったかというと、既に1日近くになる。昨日仕事を終え、福岡行きの長距離バスに飛び乗り、サウナで一泊。当日着ていた下着をお風呂で洗濯。荷物を減らすためとはいえサウナのクリーニングサービスなんかに出さないところがまた貧乏旅行者たるゆえンである。自分でパンツを洗いながら、
「あー久しぶりのバックパッカー生活だなあ。なんか懐かしい」
と実感してしまった。貧乏旅行者は時間と手間をお金で買わないものだ。

今、胸がとても高鳴っているのを感じる。久しぶりの海外。初めての香港。香港には今まで乗換えで何回か立ち寄ったが、入国したことは1度もなかった。しかも今回の旅の目的が投資だなんて、自分でも信じられなかった。こんな旅はまったく初めてだ。機内の狭い座席でビールを片手にのんびりくつろぎながら、昔の旅の思い出をいろいろと懐かしく思い出していたのだった。

しかしこのころ、2005年4月、中国各地では反日運動が盛んに行われていた。その理由としては中国がいうところの、日本の尖閣諸島

の横領問題。日本の新しい社会科の歴史教科書の検定通過。そして、日本の国連安保理常任理事国入りへの反対。などが考えられていた。

日本人が経営するレストランが壊され、日本大使館や総領事館にも投石されガラスが割られ、未だに中国政府も修理していないという異常な状態だった。

反日デモも各地で毎週のように行われており、その規模も回を重ねる度に、だんだん大きくなってきていた。まさに反日感情が最高潮の時期だった。

今回、私の旅の目的地、中国のシンセンも例外ではなかった。先週末にも大規模な反日デモが行われ、インターネットの呼びかけで集まった若者を中心に、デモ隊の数も 1,000 人を超えたとのことだった。

「あー、なんでよりによって、中国に行く時にこんなのだろう。1ヶ月前なら、こんなことはなかったのになぁ」
なんて思ってしまう。

日本を出発する数日前、義母から電話で中国行きを止められたのも無理は無い。

「いえ、中国じゃなくて、香港に行くんですよ」
と、とぼけてみたものの、妻子ある身としては昔みたいにホイホイとできないことは私自身、身に染みて分かっていたつもりではあったのだが。

私の両親はというと、過去に海外で連絡もせずにブラブラしていた時の免疫があるせいか、この時期に香港に行くと言っても、

「あ、そう」

というくらいだった。それでも心配をかけたくなかったので、中国本土に行くことは1度も口にしなかった。

私の妻はもちろん今回の旅の目的などはすべて知っていたが、私を信頼して行かせてくれた。どちらかというと、デモなどに巻き込まれることよりも、過去の経験から、香港で怪しい店に入り、危ない目に遭うことを心配していたのかもしれない。

確かに、何故この時期にわざわざ中国に行くかと聞かれると困ってしまう。例えば、1ヵ月後とか、もうしばらく状況を見て出発してもよかったのではないか。そうはいうものの、仕事の休みの関係もあるし、航空券も買っているし、出直しとなると正直ちょっと難しかった。それに、出発を見送っている間に人民元の切り上げなんてことになったら悔しいし、シャレにもならない。

そんな理由で、やっぱり今しかなかったというのが本当のところだ。

思い起こせば約1年前、本屋で立ち読みをしていた時にピーンと来たのが始まりだった。そのころでも人民元に対して、切り上げ要求が各国から上がっているということは知っていた。ただその当時は

「ふーん、それがどうした」

という感じだった。というか、人民元が切り上げられるということが何を意味するかをきちんと理解できていなかったのだ。

ある雑誌で人民元切り上げの記事を読んで、その重大さに初めて気が付いた。これはもしかしたら、とんでもないことになるのではないかと体に電気が走ったような感じがした。しかしそれから先に進まない。日常に流されて、ただなんとなく過ごす日々が数ヶ月続いた。しかし情報をキャッチするためのアンテナだけは全開にしておいた。するといろんな情報が入ってくる。新聞やテレビ、ラジオなどで、中国とか人民元という言葉が出てくると、異常に反応してしまう。そして、1度気になり始めると体が勝手に情報を検索しているようだった。

そうやって少しずつ調べていくうちに、やっぱりこれはやってみる価値があると思うようになっていった。

しかし中国行きを現実的に考えると、難しい点がいくつか出てきた。今までと違い、独身ではないこと。仕事もしていること。お金のこと。それらを考えると、やっぱり今回は無理かな。と弱気の虫がうずき始めてしまった。

その中でも妻を説得すること。これが一番難しいように思えた。
お金、「まあ旅費ぐらいはヘソクリでなんとかかなりそうだ」
休み、「ちょっと無理言って、休んでしまおう」

妻の説得、「うーん、これは厄介だな。難しい」

「一緒に行こうか？」

この台詞が何より簡単なのは分かっている。絶対に、尋ねた瞬間に

「行く」と言うだろう。でも経費は2倍、いや3倍はかかる。1歳の娘をおいて行く訳にはいかんだろう。いや待て、妻は2人目の子供を妊娠中だった。何かあったら大変だ。やっぱりひとりで行くしかなさそうだな。でも、ひがむだろうな、ひとりで行くなんて言ったら。

そんな感じで、妻にはなかなか切り出せなかった。難しい。中国ってやっぱり遠いな。

そんな悶々とした日々を過ごしていたある日のこと、新聞の中国に関する重大な記事に目が釘付けになった。読んでみると、どうやら中国の中央銀行のトップが交代するらしいとの内容だった。その時、これは人民元切り上げの前触れに違いないと直感した。中国が政策を変えるぞ。いよいよ人民元切り上げが近づいてきた。ぐずぐずしてはいられない。

思い切って妻に今までの経緯をすべて話し、ひとりで香港に行きたいと告げると、熱意が通じたのか以外にもすんなりとOKが出た。

これはニュージーランドへ旅に出るということを両親に話した時ととてもよく似ていた。

「あのさ、大事な話があるんだけどさ」

「なに？ 改まって、分かった、結婚でもするの？ もういい歳だから早いほうがいいよ」

「まさか、結婚じゃないよ、実は会社辞めようと思ってさ」

「なんで？ 辞めてどうするの？」

「ニュージーランドに行って羊飼いいになる」

「へー、羊飼いいね、面白そうね。で、肝心のお金はどうするの？ お金かかるでしょ」

「貯めた」

「ふーん、じゃ、行ってくれば」

「うん、行ってくる」

こんな感じだった。話を切り出した本人が拍子抜けしてしまったのだった。

この時と似たような妻のリアクションに感動すら覚えてしまった。いつもは口うるさいが、ここぞというところでは私の首輪に繫いだ鎖を緩めてくれる。どうせなら首輪ごと、外してくれればもっとよいのだが。

とにかく、妻との交渉が上手くいった。一番の難関をすんなりと突破できた。なーんだ、こんなことならもっと早く話せばよかった。そ

うと決まったら、急いでチケットを手配しなくては。せっかく中国に行けるようになったのに、これで間に合わなかったらシャレにならない。

早速、翌日には旅行会社へ行って香港行きの往復チケットを手配した。仕事の都合で、休みは土曜日から火曜日まで4日間。香港への旅3泊4日。本当なら1ヶ月くらい行きたいよなとも思ったが、この際、時間的なワガママは言っていられない。こうやってひとりで中国に行けることに感謝しなくては。

4日間の日程だが、福岡を土曜日の朝に出発、日曜日、月曜日がフリー、そして火曜日の午前10時には空港に行かなくてはならない。この日程だと、銀行に行けるのは平日の月曜日1日のみだ。

勝負は1日、ワンチャンス、この1日で口座開設のすべてを終わらせなければならない。

あとはのんびり飲茶でもして、100万ドルの夜景を見て、観光でもすればよい。ジャッキー・チェンに会えたりして。ミスターブーでもいいなあ、と夢は別のほうに膨らんでいった。

ここで今回の旅の目的地として、私がどうして中国の中で比較的マイナーなシンセンという街を選んだかというと・・・

私の調べでは、中国で外国人が人民元の預金口座を開設できる地域

は限られていて、何処でも預金口座を作れるという訳ではなかった。上海、シンセン、大連、天津、この4ヶ所は確実だった。他にも広州、珠海、南京なども口座開設ができるらしいのだが、確実な情報ではなかった。わざわざ確実でないところに行く必要は無いので、この3ヶ所は最初から省く。最初の4ヶ所でアクセスの良さを考えると、上海か、シンセンのどちらかになる。こうやって、この時点で上海かシンセンに絞り込まれた。

上海は福岡から直行便がある。便数も多い。

シンセンは香港から国境を越えればすぐで、香港から電車1本で行ける。福岡から香港へはもちろん直行便がある。（私の場合は台北経由だったが）

上海もシンセンもアクセスの良さは問題なかった。しかしどちらとも反日運動が盛んであり、いずれにしてもこの反日感情が良くない時期の滞在は短いほうがよさそうだ。

それなら香港からシンセンに入り、預金口座開設後、すぐに香港に戻ればどうだろうか。中国本土よりも香港のほうが絶対に安全だろう。香港での反日デモはあまり聞いてないし、上海だと結局のところ、ずっと中国に滞在することになる。上海は大都会だから目当ての銀行を探すのにも時間がかかるだろう。それに私は個人的に都会が好きではなかった。田舎が好きなのだ。歩いて国境を越えるのも好きだ。島国

根性だろうか、飛行機を降りて入国するよりも歩いて出国して、また歩いて入国するのが好きなのだ。まさに2カ国を股に駆けているような気がする。

香港にはバックパッカーも多いと聞かし、バックパッカーが多いということは安宿も多いだろう。香港はこの前までイギリス領だった訳だから、少なくとも上海よりは英語が通じるだろう。

私が以前中国を訪れた時は、まったくと言ってよいほど英語が通じなかった。他の国ではレストランや宿では最低限の会話は通じたのだが、中国だけはその点で不便を感じた。でもその代わり漢字が使えるので、日本語との漢字の使い方の違いを少し覚えると筆談でなんとかなったものだった。例えば列車は「火車」、バスは「汽車」、これはちょっと紛らわしかったけれど。他には、今日は「今天」、明日は「明天」、いくらですか？ は「多少錢？」。しかし漢字を書く度に、自分の漢字力のなさに毎日落ち込む日々だった。おっと、また話がそれてしまった。

とにかくこんなことをいろいろ考えると、上海ではなくシンセンに軍配が上がってしまう。それに何より香港へは行ったことがなかったので1度行ってみたかったのだ。これらすべてを考慮した結果、人民

元預金口座の開設地はシンセンに決まった。

台北で乗り換えたので、これが今日 2 回目のフライトになる。機内食も 2 回食べた。1 回ならまあまあ美味しいのだけど、さすがに 1 日に 2 回はちょっと辛い。

しかし、2 回目の機内食もビールのつまみと思えば、悪くはなかった。1 度のフライトでビールを 2 本ずつ、合計 4 本飲んだので、そのくらいでもうやめておいた。

以前ニュージーランドのオークランドから、オーストラリアのシドニーに向かう機内で、隣に座っていたオージー（オーストラリア人）と意気投合し、2 人で調子に乗ってビールやらウイスキーやらを飲みすぎて酔っ払いひどい目に遭ったことがあった。気分は悪いし、頭も痛いし、トイレに入るとなかなか出られなくなった。シドニーに着いてもまだ酔っ払っていて、入国審査の時もあれでうまく入国させてもらえたものだと、あとで感心してしまった。

国際線の機内は一応飲み放題とはいえ、あれはまずかった。一番悪いのは飲みすぎた自分なのだが。そんな失敗を思い出し、そのことがあってから、機内でのアルコールは控えめにするようになった。少し大人になったのだ。

機内は気圧が低く、酔いやすいことを身をもって学んだのだった。

のんびりと昔の旅を思い出し、くつろいでいるうちに、私を乗せたチャイナエアーラインは、だんだんと香港国際空港に近づいて行った。テンションがグーンと上がってきた。香港ってどんなところだろう。食べ物は美味しいだろうな。どんな人と会えるかな。シンセンはどうだろう。銀行では上手くいくかな。さーいよいよ今回の旅が始まるぞ、投資の旅が。待ってろよ香港、そして中国シンセン。今から行くぞ。

飛行機はゆっくりと高度を下げ、巨大な空港の滑走路に吸い込まれていった。

ひとくちメモ （今回の旅のスケジュール）

- 金曜日 自宅より福岡へ。
- 土曜日 福岡発台北経由で香港へ、到着後フリー。
- 日曜日 一日フリー、翌日の下見、観光。
- 月曜日 今回の旅のメイン。国境を越え中国へ、シンセンにて人民元口座の開設。その後フリー。
- 火曜日 日本へ帰国。

ひとくちメモ （口座開設にシンセンという街を選んだ理由）

- アクセスがよい。
- 香港滞在になるのでこの時期は中国本土より安心。
- 個人的に香港に行きたかったから。

香港

機内でのビールをセーブしたおかげで、酔っ払うこともなく無事に香港国際空港に着いた。とにかく大きい空港だ。さすがにアジアのハブ空港だけのことはある。

イミグレーション（入国審査）をすんなり抜けて、何事もなく入国を果たした。ここまでは今回の旅の成功を予感させるかのように、すべて順調だった。

香港ドルをまったく持っていなかったもので、まず両替をしなくてはならなかった。このままではバス代すら無い。空港だと多少両替のレートが悪いがこの際、仕方がない。

数年前に  イギリスに行った際、持ち帰っていたポンドが 70 ポンド（約 14,000 円）あったので、それを持って両替所に並んだ。

「ハーイ、全部香港ドルに両替してください」

「はい、えーと、このお札は・・・」

と言って両替所の若いおねえちゃんが、 50 ポンド札と 20 ポンド札をじっと見ていた。

この人、新人かな、そんなに見なくてもイギリスポンドだよ。ちゃんとエリザベス女王が載っているでしょ。香港は 1997 年の中国返還

まで、イギリス領だったんでしょう。ニュージーランド時代の香港出身の友達が言っていたよ。「香港は中国に返還されたけど、パスポートはまだイギリスのを使っているよ。この次にパスポートを取る時は、中国のパスポートになるらしいけどね」ってね。

香港は本当に中国に返還されたんだな。もう 10 年近く前のことだけど、やっぱり歴史的にすごいことだよなあ。なんてひとりで考えていると、

「申し訳ありませんが、このお札は両替できませんよ」
と冷たい声で言われた。

「え、なんで？ それロンドンで使っていたやつだけど」
香港に着いて早々、どういうこと？ まさか、このポンド、偽札じゃないだろうな。偽ドルというのはよく聞くけど、偽ポンド札なんて聞いたことないよ。

偽ドルというと、実は昔、持っていたことがある。アメリカの偽 100 ドル札。カンボジアに行った時、確か首都プノンペンのマーケットで拾ったのだった。

「うわー、やったーラッキー、100 ドル札だ。（約 12,000 円）
儲かった」と思い、拾ってみると何か変だった。よく考えるとカンボジアで 100 ドルなんて高額のお金、あまり使わないだろうし、銀行で

拾ったならともかく、マーケットで100ドルなんて使ってもお釣りが無いだろう。このことからしても怪しい。

もともと米ドル札はおもちゃみたいだが、この札はさらにおもちゃぽかった。よくよく見ると、印刷は少しずれているし、色も緑色が濃い感じがした。シロウトが見てもすぐ判る本物の偽札だった。だから、この札を使ったりはしなかったが、記念として財布にずっと入れておいたのだった。しかし後にベトナムのホーチミンで飲みに行った帰り、その財布をポケットから、すられてしまったのだ。もちろん財布の中にはベトナムのお金、ベトナムドンも入っていたのだが、財布の中になくさん現金を入れているはずもなく、実際の被害は日本円にすると200円くらいだった。

この偽100ドル札と現金だけ抜き取られ、財布は返ってきた。変な話だが、バイクに乗った男が私に向かって投げ返したのだった。それ以来、私は財布に紐を付けズボンに結びつけるようにしたのだった。でもあの偽ドル札はもったいなかった。あんなのめったに手に入らないだろうに、と残念に思ったことが思いだされた。

その両替所のおねえちゃんに話を聞いてみると、さすがに偽札ではなかったが、どうやらイギリスのポンドは新しいお札が出たらしく、私の持っていたポンドは古いお札だったので、ここでは両替できない

ということだった。

「ここで両替できないのなら、どこに持っていけばいいの？ 街の銀行ならできる？」

と尋ねると次のように教えてくれた。

「ここというのは、この両替所という意味ではなくて、香港という意味です。たぶん香港では両替はできないと思いますよ。はっきりとは言えませんが。イギリス本土なら大丈夫だと思いますよ」

そんなイギリスなんて行かないよ。新しいお札に替わったということとは、もしかしてユーロになったということだろうか。いや待て、イギリスは確かユーロは使っていないはずだよなあ。今でもポンドだよな。でも、そう言われると自信がなくなった。（イギリスは現在もポンドを使っている）仕方がないのでポンドの両替は諦めて、米ドルのトラベラーズチェックをカウンターに差し出し、サインをした。

後に知人がイギリスに行くというので、香港で両替できなかったこの 70 ポンドをお餞別代りにプレゼントしたのだが、イギリスの街中でも、やっぱり使えなかったと言っていた。知らないふりをして、旧ポンド札で買い物をしようとしたが、お店で受け取ってもらえず、結局銀行で新しいお札と交換してもらったと教えてくれた。

やっと香港ドルを手にすることができた。着いて早々に縁起が悪いもんだ。気を取り直し、手にした香港ドルを使い、まず空港でオクトパスカードというプリペイドカードを買った。これは地下鉄、電車、バス、フェリー、トラム、などほとんどの乗り物に使えるという優れたもので、自動販売機やセブンイレブンでも買い物ができる、いわゆる電子マネーというものだった。1997年に導入されたという話を聞き、香港は日本よりずっと進んでいることを実感した。とにかく慣れない外国のお金って使いにくいものだから、旅行者にはとても便利だ。これがあれば電車なども小銭が要らないし、目的地までの料金もいちいち調べなくて済む。さらに毎回切符を買うよりも、少し割引までしてくれるのだ。

結局このオクトパスカードは滞在中毎日、フルに使った。残金がなくなるとまた入金することもできたし、残った分は帰りに空港で払い戻しもしてくれた。

空港からバスに乗って市内に向かった。途中、香港ディズニーランドの建設予定地を通り、高層ビルが、まさにそびえ建っているのが見えてきた。街中のネオンの群れもとても香港らしい。まさにネオンのトンネルといった感じで華やかに街を彩っていた。そのネオンのトンネルをくぐりバスは進んで行く。下品といえばそれまでだが、ネオン

には、何か心躍らせるものがあるようだ。

それともうひとつ香港らしいものを発見した。それは、工事現場の足場。噂では聞いていたけど、本当に竹でできていたのには驚いた。

学生時代、私はとび職のアルバイトをしたことがある。ビルの建設現場で足場を組み立てる手伝いだ。日本の工事現場ではもちろん鉄製の足場を使うのだが、あれはやはり重い。竹なら軽くて現場作業は楽だろうな。でもあんな高いところまで本当に大丈夫なのだろうか。竹は、しなって強いとは聞くけれど実際目にすると異様に怖かった。これで高層ビルの足場も作るというのだからまた驚きだ。こんなものを見せられると香港でも、とび職のアルバイトをやってみたくなった。

バスが市内に入り、辺りがだいぶにぎやかになってきたところで適当にバスを降りた。外はもう夕方になっていた。さあ、暗くなる前に今夜の宿を探さなきゃ。

旅に出ると必ず思うのだが、初めていく街、知らない街にひとりでぽつんと降り立つと、なんという感じだろうか、緊張感、孤独感、不安感、ドキドキ、わくわく、なんかいろんな感情が混ざったような気持ちになる。その街のことはまったく知らないし、知り合いなんてもちろんいない。つまり自分だけが頼りの世界。なんだか、ひとり知らない場所に投げだされたような感じになる。でもこれが予定を立てな

い、ぶらぶらひとり旅の醍醐味でもあるのだけれど。

街を適当に歩き回っていると、なんとなく感じがつかめてくる。香港の街は都会的で、人が多くて、忙しいという印象を受けた。若者もみんなおしゃれで、かっこいい。

私はゲストハウスと呼ばれる安宿が、何十件も入っている雑居ビルをいくつか発見した。香港は土地が狭いので、建物がどうしても上へ上へと伸びてしまうのだろう。その雑居ビルの入り口には、客引きがたくさん、てぐすねを引いてバックパッカーたちを待ち受けている。私は早速、インド人らしき客引きにつかまった。

「ジャパニーズ？ 安いゲストハウス、紹介してやるよ」

インドでもよく声をかけられたが、ついて行ってもあまりよい思いをした記憶はなかった。ぼったくりも騙しもあった。でもたまに当たりがあることも確かだったが。まあ日本の飲み屋街の客引きと似たようなものだ。

「No thank you. とりあえずいいよ、自分で探すから」

と言って丁寧に断った。

丁寧に断らなかったために、以前ひどい目に遭ったことがある。あれは、 フィリピンのマニラでぶらぶらしていた時、フィリピ

ン人のオヤジに、「両替してやろうか？」と声をかけられた。最初は
どうせ怪しいヤツだからと、レートも聞かずにずっと無視していた。
しかし私のあとをずっとつけて来て、そのうち、「何処に行くのか」
とか、「ホテルを教えろ」だとか、とにかくしつこかったのでいい加
減に頭にきて、きつい口調で言ってしまった。

「なんでお前にそんなことを教えなきゃいけないんだ。両替もいらな
いし、何も用は無いから、とにかくあっち行ってくれ」

その言葉に、このオヤジは怒ったのか、懷に右手を突っ込んで、

「ジャップの兄ちゃん、おとなしく聞いてれば調子に乗りやがって、
せっかく人が親切で両替してやろうと思ってるのに。俺はガンを持っ
てんだぞ。あまりふざけたまねするなよ」

しかしよく見ると、どうやら銃は持ってなさそうだ。あくまでも勘
だったが、とてもそんな感じじゃない。ここで引くとかえって危ない。
と何故か冷静に考えることができた。そして何処かで聞いたことのあ
る、こんな時の対処法を思い出す余裕もあった。

「言い方が悪かったなら謝るよ。両替は必要ないし、とにかく用は無
いから、ほっといて」

それでもオヤジは、離れない。

前を歩くと背後から何をされるか分からないので、オヤジのペース
に合わせて横に並び、ゆっくりと歩いた。しかもオヤジの右側を。こ

れなら万が一、銃を出そうとしてもオヤジが右利きなら銃がこちらに向くまで少し時間がかかる。上手くいけば、右手を押さえることもできるかもしれない。そんなことを考える余裕もあった。細心の警戒をして、オヤジの行動を見ながら、しばらく歩いた。そうやって歩いていくうちに、左側にセブンイレブンを見つけたので、さっとオヤジの後ろを回り自分だけ中に入った。オヤジはとっさのことに何もできなかった。中で様子を見ていたが、このオヤジは外で待っていて入って来ない。どうみてもチンケなチンピラにもならないような感じだった。やはり銃を持っているようには見えない。

しばらく時間を潰してから外に出たが、そのオヤジはまだ私を待っていた。何処で買ったのか、大きな焼き鳥のような物を右手に持つかじりながら。

「おう、ジャップの兄ちゃん、遅かったな、お前が遅いからこれ食ってたんだ。お前のせいだから、この分お前が払えよ。少し金よこせ。1ドルで勘弁してやるよ。分かるか？ イングリッシュ？ ギブミーワンダラーだよ」

と左手を差し出しながらまた近寄ってきた。まったく、ただのタカリだった。銃で撃たれたら死ぬかもしれないけど、焼き鳥で打たれても死ぬことはないだろう。本当にびっくりさせるオヤジだ。人をバカにしたような話し方に腹が立ったが、グッと堪えて無視することにした。

こんなところで喧嘩しても仕方がない。損するのはこっちだ。

泊まっていた安宿がもう近くだったので、急いで宿に入った。それ以上はさすがに追って来なかったので安心したのだった。

宿のおねえちゃんにこのことを話すと、そのオヤジはこの辺りをいつもうろついているタカリのオヤジらしい。このことはあとで考えても怖くて仕方がない。それにしても、よく冷静に対処できたものだ自分でも感心してしまった。

そんなことがあったので、丁寧に断るように気をつけるようになったのだった。変なトラブルは無いほうがよいに決まっている。せっかくの旅が台無しになってしまうから。

いつもの旅と違い、今回はたったの3泊だから、ケチらずにちょっと高めのホテルに泊まろうかな。長期の旅でもないし。なんてったって目的は投資だからな。たまにはちょっとリッチに、なんて少し甘えも出てきたりする。

港の近くに YMCA があった。とても YMCA には見えないような立派な建物だった。中もきれいだし、お洒落なカフェなんかもあった。フロントは一流ホテルのようだ。こんなところならゆっくりくつろげそうだな。せっかく入ったのでフロントで宿泊料金を尋ねてみると、シングルで、880 香港ドル（約 12,000 円）、ドミトリー（数人部

屋)でも210香港ドル(約3,000円)だった。めちゃくちゃ高い。それでも満室で泊まれないとのことだった。断られてちょっとほっとした。

いろいろ探したがホテルはどこも高い。私のようなバックパッカーには贅沢に思えて仕方なかった。結局、さっきのインド人の客引きのいた雑居ビルへ行き、客引きをかわし、3階のゲストハウスを訪ねた。そこの受付のおっちゃんに部屋を見せてもらうことにした。このおっちゃんがまた、渋い味を出していた。小柄で痩せていて、黒縁の眼鏡をかけ、よれよれのスーツにノーネクタイ。昔の香港映画の最初のシーンで一番に銃で撃ち殺される役がよく似合いそう。そんなふうになんて怪しげだ。街で見かけた若者たちとは、まったく別の人種に見えた。まさに私のイメージする香港のくたびれたおっちゃんそのものだった。

「安い部屋見せてね。あんまりお金持っていないからね」

「ジャパニーズか、よしよし、分かっとるよ。安い部屋じゃな」

と言って見せてくれたのは、シングル180香港ドル(約2,500円)の部屋。ビルの外見とは違い、部屋はわりときれいだった。

「うーん、180ドルね。きれいでいい部屋だけど、もうちょっと安い部屋でいいんだけど。100ドルでないかな？」

「100かい？ 100ドルはないが、それならぴったりの部屋があるよ。」

スペシャルなやつがな。ついておいで。・・・まったくジャパニーズは金持ちのくせに・・・」

小声でブツブツ言いながら何故か裏口に連れて行かれた。ここは3階のはずなのに、裏口から外に出た。まるで映画のワンシーンのようだ。さすがにスペシャルだ。どうして外に出られるのだろうか。その後、また変な入り口へ入って行った。どうも怪しいが、そのまま私もあとに続いた。映画ならこの辺りに香港マフィアのアジトがあるのだろう。狭い入り口の錆びたドアを抜け、再びビルの中に入り、狭い廊下を通ると扉があった。おっちゃんがその扉を開けた。そこには一応、部屋らしい空間があった。

うわーさすがにボロい。狭い。汚い。3拍子揃っていた。スペシャルの意味が分かった。でも部屋の鍵だけはちゃんと付いていた。

部屋の広さは、たたみ3畳、いや2畳半、もっと狭いかもしれない。その狭い中にシャワーとトイレとベッドがある。おまけにテレビまで付いていた。ベッドの幅は60センチくらいだろうか。狭いけど、とりあえず横にはなれる。トイレとシャワーはベッドの上を乗り越えてなんとか行ける場所にある。でもさすがに使いにくそう。

「トイレちゃんと流れる？」

「当たり前じゃ、もちろん流れるよ」

「シャワーってお湯出るの？　もしかして水シャワー？」

「お湯くらいちゃんと出るわい、しばらくすれば」

どのくらいを、しばらくというのかには個人差があるだろうけど、まあ、お湯も出るんだらう。いくら暑い国とはいえ、シャワーはやっぱりお湯がいい。ホットシャワーにエアコン、ちょっと贅沢だが、この組み合わせがよいのだ。

以前行ったラオスの北部、中国国境付近の街では、電気もなく夜はローソクだった。しかもわりと寒かった。それなのにシャワーは水だった。そこではゲストハウスの人ができるポット 2 杯分の熱湯をバケツに入れ、水と混ぜて浴びたものだった。これはこれで雰囲気があって楽しいものだった。それに比べれば香港のスペシャルな部屋なんて可愛いものだ。

しかし値段はぜんぜん可愛くなかった。シングルのこの部屋で 120 香港ドル（約 1,700 円）だった。決して安くはない。さっき話したラオスの宿なんて、部屋に蛍が入ってくるというサービス付きで 1 泊 2 ドル（約 240 円）だった。

やはり香港は物価が高いということだろう。先進国だし、覚悟はしていたとはいえ、他の東南アジアの国々と比べたら 4～5 倍は高い感じがする。でも物価の高さは仕方がない。

どうせ寝るだけだからこの部屋に決めよう。念のために部屋代を値

切ってみたが、まけてくれなかったので諦めてそのスペシャルな部屋にチェックインすることにした。

どうも変だと思ったら、この建物は2階までは全フロアつながっているのだが、3階以上は、A,B,C,D,Eの5つの棟に分かれていた。ゲストハウスの受付はC棟、泊まった部屋はD棟。だから受付のあるC棟から部屋に行くには下の階に下りるか、1度外に出なくてはならなかったのだ。下の階に下りずに外に出ることは、まさに3階だからできる離れ業だったのだ。そのビルはまるで迷路みたいで、最初は自分の部屋に戻るのも一苦勞だった。火事になったらみんな大丈夫だろうか。逃げるのは大変そうだ。

このビルの各棟にはエレベーターがあって、エレベーターには防犯カメラが設置されており、1階のホールにあるモニターでチェックできるようになっていた。なんでも過去にエレベーター内で殺人があったらしく、その後、警備上の理由でモニターが付けられたとのことだった。とにかくビル全体が怪しい雰囲気をかもしだしている。行きかう人も黒人、白人、アジア人、中東系などいろんな人種が入り混じっていた。でも私はこんな怪しい雰囲気は嫌いではない。これもここ香港の一部なのだろうから。超高層ビルが立ち並び、近代化された街並みもあるのだが、こんな古めかしくて怪しいところも香港なのだ。私

のイメージする香港はどちらかというと後者の方だった。

こういう日本とまったく違う環境、違う常識が味わえるのが旅の醍醐味のひとつだと思う。あとは自分の直感で危険があれば察知できるように、日本の平和ボケモードから、旅モードへ切り替えなければならない。これがまた大変なのだけれど。

リュックを部屋に置き、外に出てまた少し歩き回り、ビールと食事を済ませゲストハウスに戻った。長時間の移動で疲れていたせいか、汚くて狭いベッドに横になるとすぐに眠ってしまった。

翌日は日曜日、1日何の予定もなくフリーだった。屋台でヌードルの朝食をとり、マーケットで小籠包。露店で白い蒸しパンのようなものを買って、つまみながらのんびりと歩いた。さすが香港、食べ物が美味しい。地下道を通った時にホームレスのおばあちゃんが座り込んでいるのを見かけた。目の前にお金を恵んでもらうための空き缶が置いてあったので、食べきれなかった小籠包と蒸しパンをあげた。お金をあげるのはいつも抵抗を感じてしまうから。おばあちゃんは深々とお辞儀をして、ありがとうと言っているようだった。

今まで旅した他の国々でも、こんなホームレスをたくさん見かけたが、特にタイのバンコクの場合は別の意味でひどかった。何人かの身

体障害者がいろんな場所で物乞いをしていた。国からの援助など無いのかな、かわいそうだなとは思っていたが、どうやら彼らは組織化されていて、その組織の人間がそれぞれの場所に送り迎えしているらしかった。物乞いで手に入れたお金を組織の人間がピンハネしているという話を聞いて許せない気分になったのだった。

さらにもっとひどいのが、インドでは物乞いをするのに、かわいそうだと思ってもらうためだけの理由で、自分の子供の両手や両足をわざと切断しているという噂も聞いたことがあった。そんなのは論外中の論外だろう。

それに比べて、カンボジアでひとりのおばちゃんを見た時は涙が出そうになった。このおばちゃんは、両手の手首から先がなく、さらに両足の足首から先もなかった。もちろん原因を知るすべはなかったが、地雷のせいなのかもしれない。それでも物乞いをする訳でもなく、不自由な体で落ちている空き缶を拾って、両手で挟んで肩から掛けたカバンに入れていた。それをお金に替えて生活している様子だった。笑顔で空き缶を拾っている姿を見て、本当に涙が出てきそうだった。何もしてあげられない自分が、もどかしかった。お金をあげるのも失礼かもしれないと思った。私にできたことといえばジュースを飲み終えて、空き缶をおばちゃんから見えるところに、わざと置いてくるということだけだった。

まったく予定のないこの日はぶらぶらと街を散策して過ごした。

結局 1 日歩き回ったが、香港では反日運動はまったく意識せずに済んだ。日曜日にもかかわらず、反日デモも無いし、日本人に対する悪い感情も特に気にならなかった。香港と中国ではやはり状況がだいぶ違うようだ。

しかし夜、部屋のテレビでニュースを見ると、その日も中国では各地で反日デモがあったようだった。中でも上海のデモは大規模で日本総領事館前に 1 万人以上が集まり、大勢が物を投げていた。日本料理店も 10 件以上壊されていた。後日知ったが、この日の上海での反日デモ参加者は最終的に 10 万人以上に達したとのことだった。

本当によかった、行き先をシンセンにして。上海に行かずに正解だった。そんな状況では危なくて、たぶん外には出られなかっただろう。街でデモに出くわしたら、日本人というだけで何をされるか分かったもんじゃない。とりあえずここまでの選択は間違っていないようだ。

明日は待ちに待った月曜日。いよいよ中国本土の銀行へ行って、預金口座を開設する日だ。中国、シンセン、何事もなければよいのだが。しかし今までを見ていると、デモは毎週日曜日に行われているようなので大丈夫そう。考えてみればそれもそうだろう。平日はみんな普通に仕事をしているはずだから。明日もみんなしっかり仕事しようね。

頼むよ。でもここまで来て今さら心配しても仕方ない。きつとうまくいくさ。大丈夫、大丈夫。

国境を越えて中国、シンセン。目指すは、HSBC・香港上海銀行シンセン支店。今回の旅の最終目的地。気合充分、そのわりにはあっという間に眠りに落ちていった。

いざHSBCシンセン支店へ

2005 年 4 月 18 日、月曜日。ついに勝負の日の朝がやってきた。
KCR East Rail（鉄道）の Hung Hom という駅に向かった。ここまでは昨日下見をしておいたので迷うこともなく、ゲストハウスから歩いて 10 分くらいで到着した。

旅の目的地、中国のシンセンはここからまず、電車で約 40 分のところにある終点の Lo Wu まで行く。Lo Wu までは電車 1 本で行ける。料金は 33 香港ドル（約 460 円）。Lo Wu が中国との国境の街になる。そして国境をはさんで、中国のシンセンという具合である。隣の国（香港は現在中国ではあるがまだ国境が存在する）に行くというより、ほんの隣の街に行くといったほうが自然な気がする。国境の街に住む人たちには自然なことだろうけど、やっぱり島国の日本人にはちょっと不思議な感覚だ。

ほとんど待つこともなく、やって来た KCR の電車に乗り込んだ。ここから 11 番目の駅が Lo Wu である。この香港領内の区間は通勤電車が走っているとのことだった。私が乗り込んだ電車はこの通勤電車になるらしい。通勤電車は国境の Lo Wu で終点になるのだが、そこから広州や上海、北京にまでも直行列車が運行されているらしい。

朝の通勤時間帯にもかかわらず、車内はそんなに混んでいなくてゆ

ゆっくりと座ることができた。KCR の路線には途中に大学があり、学生も乗っていた。見た目には日本の大学生とまったく変わりはない。面白いのはこの大学のある駅名が、「大學」ということだ。もっと、まともな駅名が思い付かなかったのだろうか。

電車が北上するにつれて、だんだん都会から離れてきていることが車窓を通して伝わってきた。高層ビルがあまり見えなくなり、緑の木々が見えるようになってきた。

ゆっくりと外の景色を眺めているうちに終点の Lo Wu に到着した。窓から外を見ていると、香港の街とは違い、のんびりしている様子だった。そこで電車を降り、人の流れにのって、そのまま出国手続きのため出国ゲートに並んだ。のんびりしていそうな街だったが、さすがに国境辺りは出入国する現地の人々で混み合っていて、出入国ともに少し待たされることになった。

私は香港を出国する時、出国ゲートを間違って並んでいた。しかしイミグレーションの人は、

「外国人は本当はあっちに並ばないとだめだよ」

と言いながらも、パスポートに出国のスタンプを押してくれ、すんなりと通してくれた。普通なら、正しいゲートに並び直せと言われるはずだが、どうやら今日はツイているようだ。

香港の出国が終わり、中国の入国ゲートへ向かった。香港を出国し

て中国にもまだ入国していないので、今現在はどちらの国にも属していないことになる。この香港でもなく中国でもない地域の建物の中を歩いていくと、下に川が流れているのが見える。たぶん、この川が国境線になるのだろう。兩岸とも不法入国を防ぐために有刺鉄線が張り巡らされていて、国境地帯独特の雰囲気があった。

こういう雰囲気は島国の日本では決して味わうことができない。

陸路での国境越えといえば、タイからカンボジアへ国境を越えた時の衝撃を思い出してしまう。カンボジアはタイと比べると、ずっと貧しい国だったのだが、国境を越えてカンボジアに入った途端に道路の舗装が消え失せて、急に道がでこぼこになった。タイではまったくそんなことなく快適にバスに乗れたのだが。たった数十メートル歩いただけで景色ががらりと変わる。まるで狐につままれたかのような気がしてしまった。

タイとの国境の街ポイペットから、アンコールワットで有名なシェムリアップという街まで距離にするとわずか100キロ程しかないのだが、道が悪すぎて車も普通に走れない。四駆のトラックの荷台に荷物を置き、荷物の上にみんなで座り、上下左右にまるでロデオのように揺れながら、ほこりまみれになって走ること約8時間、ようやく目的地に着くというありさまだった。これが国道というのだからさらに驚く。

しかも到着時間はドライバーの腕しだいというのもすごい。カンボジアでの移動は、たいていこんな感じだった。雨が降れば水たまりができ、国道の道路上で水牛が水浴びしているなんてこともあった。時刻表なんてあるはずもない。人が集まれば出発するだけ。でもこの一体感がよいのだろうか、言葉が通じなくても到着するころには乗り合わせたみんなと必ず仲良くなっていた。そういう移動を私は結構楽しんでた。

この道路の凸凹や、大きな穴のほとんどは、地雷の跡であるらしいと聞かされた。地雷博物館に行った時は、このケチな私ですら、地雷除去援助のために寄付してしまったのだった。

香港を出国後、先ほどの川を歩いて越えて中国での入国手続きを終えた。

以前中国を訪れた際にはビザが必要だった。しかも1ヶ月のビザしか取れずに途中でビザの延長までしなくてはならなかった。SARS

(サーズ)以来、観光目的ならビザが要らなくなったので手間も費用もかからなくなった。昔からすると便利になったものだ。間違いなく中国も少しずつ身近になってきているのだ。もちろん人民元もそうなっていくのだろうと、さらに期待が高まった。

建物を出ると、香港とはまた違う景色になった。建物の外はだっ

広く感じた。すべてが一箇所に凝縮された感じの香港とはまったく違う。まさに大陸を感じさせる。そして香港よりすべてがダサくて古臭い。まさしくここは中国本土なのである。国境越えというのは、やはり日本人には理解しがたい、何か特別なものを感じる。だから私は陸路での国境越えが好きなのかもしれない。

街に見とれる間もなく、早速今回の目的地、**HSBC**シンセン支店を目指し歩き始めた。**HSBC**の場所は前もって地図で確認してあった。確認というほど難しい道順でもなく、入国してきた駅から、とにかくまっすぐ行って、右側にあるプラザホテルの1階。簡単だった。子供でも行ける。

こんな場所で地図を開いて、きょろきょろするなんて危ないことはできない。特にこの反日運動が盛んな時期には。まさに、アホな日本人観光客になってしまう。そそくさとひとり、**HSBC**を目指して少し早めに歩いて向かった。目立たないように、周りに溶け込むように。

目的地としてはシンセンを選んだのだが、ここで何故**HSBC**という銀行を選んだのかというと・・・

HSBCというのは、香港上海銀行という名前なのだが、実は外資系（イギリス）の銀行なのだ。外資系ということは、英語がカタコトでも多少くらは通じるだろう。過去の経験から、中国国内の銀行では

英語が通じるとは、あまり考えられない。中国語を話せない私には、意思の疎通が難しい。ごく簡単な話なら筆談でも、なんとかなるかもしれないが、漢字だけを使った筆談で口座開設なんて絶対に無理だろう。

次に、HSBCは格付けが、AAクラスであること。AAとは世界でもトップクラスの格付けになる。経営も安定していて、中国の他の銀行よりも信用度が高い。つまりは倒産の危険性が極めて少ないということ。わざわざ中国まで行って、口座を開いて預金したのはよいけれど、銀行が倒産なんてことになったら、飲んだ席で酒の肴にされて大笑いされることは間違いない。

さらに、国境から近くて歩いて行ける。しかも道順も簡単。これは説明の必要も無いだろう。初めて行く知らない土地で銀行を探すのは大変だ。特にこういう日本人が嫌われている時期に、反日デモが起こるような場所へ行く場合はなおさらだ。人に道を聞く訳にもいかないから。以上すべての点でHSBCシンセン支店がベストだと思えたのだ。

中国に入国してから歩くこと約 10 分、調べていた通りプラザホテルを発見した。その 1 階にはHSBCシンセン支店がちゃんと存在していた。ほっと一安心しながら時計を見ると、9 時をちょっと回ったところだった。よし、すべて順調、予定通り。いよいよ来たぞ、今回

の旅の最終目的地である**HSBC**シンセン支店。自宅を出てからここに着くまで、3泊4日。この投資を思いついてからここまで約1年、長かった。中国行きを諦めかけたこともあった。しかし、ついに**HSBC**シンセン支店が目の前にある。あとは扉を開いて中に入ればよい。これで私も投資家の仲間入りをするのだ。熱い思いがこみ上げてきた。

さあ今から勝負を賭けよう。今回の旅の、いや今までのバックパッカー生活の集大成ともいえる人民元預金口座開設を。

高鳴る気持ちを抑えるように大きく深呼吸をして、一步一步、踏みしめながら正面の入り口へ向かった。そして扉を開け、ゆっくりと中に入った。

ひとくちメモ（香港から**HSBC**シンセン支店へのアクセス）

- **KCR East Rail** にて **Hung Hom** から終点 **Lo Wu** まで 40 分。
- **Lo Wu** で下車、そこから国境を越えて中国へ入国。入国後ひたすらまっすぐ約 10 分歩く。右側のプラザホテルの 1 階が**HSBC**シンセン支店。（2006 年 7 月に別の場所へ移転したとの連絡あり）

アジアンビューティー

HSBCシンセン支店の店内は、まだ時間が早いせいか他の客はまばらだった。

中で迎えてくれたのは、すらっとした細身の色白で美人な女性行員だった。私を見てかるく微笑むと中国語で話しかけてきた。

HSBCに着くまでは日本人と悟られないように、目立たないように、周りに溶け込むように振舞っていたのだが、ここでも一応中国人と思われるようだった。

「ニーハオ」

とこちらも笑顔で挨拶して、次に

「Do you speak English?」（英語話せますか？）

と英語で話しかけてみた。

女性行員の顔つきが笑顔から一瞬、はっと驚いたような表情になった。しかし、彼女のきれいな顔に再び笑顔が戻ったと思ったら流暢な英語が返ってきた。

「うわー、英語上手い」と、とりあえず安心した。何が、「カタコトでも少しくらいは通じるだろう」だ。カタコトどころかペラペラだった。さすがに外資系の銀行だ。これならきちんと話もできる。というか私よりずっと上手い。逆にこちらが自分の英語力に不安を感じてし

まったが、そのまま話を続けた。

「 I'd like to open a bank account. 」 （預金口座を開きたいのですが）と尋ねた。

「それでは、こちらにどうぞ」

と中に通された。

カウンター窓口とは別に、左側にブースがいくつか作られていて、その中のひとつのテーブル席に案内された。この女性行員は日本の銀行にもいるような案内係の人かな。やっぱり何処でも、案内係は美人なんだな。案内係ということは、だれか別の人が出てくるんだろうな。せっかくこんな美人に会えたのに、ちょっと寂しいな。と勝手に思い込んでいると、この女性行員が私の向かい側の席に腰を下した。彼女と1対1で向かい合わせに座ることになった。

ヤッター、この人が相手してくれるのか、ラッキー。今日は朝からやっぱりツイてるぞ。同じ話すならやっぱり美人のほうがよいに決まっている。

テーブルに付くと彼女が名刺をくれた。その名刺には、表は漢字、裏は英語で彼女の名前が書かれていた。

歳は 25 歳くらいだろうか、すっきりとした顔立ちで、ストレートの黒いロングヘアがよく似合う、色白の中国的な美人だった。彼女こそアジアビューティーと呼ぶにふさわしいだろう。

彼女がウーロン茶か、何かのコマーシャルに太極拳をしながら出てくれば、日本でも絶対に人気が出るだろうな。なんてぜんぜん関係の無いことを想像してしまった。本来なら口座開設という事務的で退屈なことが彼女となら、とても楽しい時間になりそうな予感がした。

軽く自己紹介をしたあと、口座開設するために日本から香港、そしてシンセンに来たこと。香港での出来事。など今までのいきさつを話した。彼女も頷きながら話を聞いてくれた。少し雰囲気や和んだところで本題に入った。

彼女が預金口座の説明を始めた。パンフレットを取ってきてくれるというので、ついでにメモ紙とペンも頼んだ。難しい話をする時にはメモ紙とペンは欠かせない。

紙に数字を書いたり、言葉を書いたり、言葉と言葉を矢印でつないだり、そんなふうにしながらかかりやすく説明してくれた。

時には私がペンを取り、紙に書きながら質問し、彼女がそれに答える。そんなやりとりが続いた。

私が日本で調べてきたところでは、今回の人民元投資に必要な口座は人民元普通預金口座、それとよい金利を受け取るための人民元定期預金口座。この2つを作ればよいと思っていた。そして口座開設後、人民元普通預金口座宛に日本から日本円を送金すれば、自動的にその日の為替レートで人民元に両替されて人民元普通預金口座に入金され

る。さらに人民元普通預金口座から、よりよい金利を受け取るために人民元定期預金口座に振替える。これですべて終わりだと思っていた。しかし、彼女の説明ではやり方がずいぶん異なっていた。彼女の説明はこうだった。

まず日本円を日本から送金するための、日本円普通預金口座を開設する。それと人民元普通預金口座も同時に開設する。

そして日本円普通預金口座に、日本から日本円を送金する。

送金された日本円を日本円普通預金口座から、人民元普通預金口座へ振替える。この時、銀行に対して、私が指示を出さなければならない。この指示はインターネットバンキングや、テレフォンバンキングではできない。書面でのやり取りになるらしい。つまり私が書面に日本円普通預金口座から日本円をいくら、人民元普通預金口座に振替えるかを書き、サインをして郵送で送らなくてはならない。その後の人民元普通預金口座から人民元定期預金口座に振替えるという作業はインターネットバンキングや、テレフォンバンキングでもできるということだった。

日本で調べてきたこととのギャップをかなり感じたが、決まりならばしょうがない。従うしかない。というより私の下調べに問題があったというだけだ。手続きが少し面倒になっただけで投資自体には、なんら問題はなさそうだった。

しかし話が進むにつれ、まだまだ違いが出てくる。日本円普通預金口座から人民元普通預金口座に振替える時には、限度額が設定された。今年から決まっらしい。このこともまったく知らなかった。これもまた煩わしい。そこで、その限度額がいくらか尋ねると、1回の限度額は、10,000 米ドル相当額分で、だいたいひと月に1度しかできないとのことだった。だいたいひと月に1度というのもアバウトだが、これもルールなので従うほかないようだ。調べてきたこととの大きな違いはこのくらいだった。

「だいたいのやり方は理解できました。まず今回は日本円普通預金口座と人民元普通預金口座を作ればよいのですね。それでは、日本円普通預金口座について教えてください」

「はい、それでは外貨預金口座について説明しますね。外貨預金口座には、プレミアムアカウントとマルチカレンシーアカウントの2つがあります。まず両方に共通するところから説明します。HSBCで扱う外貨とは、米ドル、香港ドル、日本円、ユーロ、イギリスポンド、カナダドル、オーストラリアドル、シンガポールドル、これらの8種類の通貨のことです。お客様の場合は日本円口座でよいと思います。それから・・・」

外貨預金の説明が始まった。彼女は再びゆっくりと分かりやすく丁

寧に話し始めた。話の内容は次のようだった。

まず私に必要なのは、日本円普通預金口座と人民元普通預金口座の2つ。他の通貨の口座は今回関係無い。

そしてプレミアムアカウントとマルチカレンシーアカウントの2つの違い。プレミアムアカウントというのは、プレミアムというだけあって、簡単にいうとお金持ちのための口座だった。マルチカレンシーアカウントよりもいろいろとサービスはよいらしいのだが、条件がある。これが金持ちのための口座たるゆえンであるのだが。条件として預金残高が、常に40万元以上（約540万円）必要ということだった。へー、40万円ね。さすが金持ち専用の口座だね。ぜんぜん関係無いね、プレミアムアカウント。とこの説明は軽く聞き流した。

マルチカレンシーアカウント、どうやらこっちの口座になりそうだ。マルチカレンシーアカウントについてここで少し説明すると、

MULTI（多くの）、**CURRENCY**（通貨）、**ACCOUNT**（口座）、という意味である。さきほど説明した通り、いくつかの外貨で口座が開ける。人民元投資をするには、これに人民元普通預金口座をくっつけて運用することになるのだ。私の場合はマルチカレンシーアカウントの日本円普通預金口座と人民元普通預金口座の2つが必要になる。

日本の銀行と違う点は、預金残高が一定額を下回ると口座管理手数料

料がかかるという点だ。日本の銀行では考えられないが、外国の銀行では口座管理手数料は、わりと一般的なのだ。HSBCの場合は口座の合計残高が 16,500 元(2,000米ドル相当額＝約 240,000 円)を下回ると口座管理手数料 16 元(約 200 円)が半年ごとにかかる。

私の場合、人民元投資が目的なので、少なくとも口座管理手数料の心配は要らない。何故なら、それ以下の金額で運用してもあまり面白みが無いから、頑張ってもっと預金する予定なのだ。

預金金利に対する税金は 20 パーセント。これは源泉徴収される。この点は日本の銀行とまったく同じだった。

そのようにして、説明をひと通りなんとか聞き終えたが、なにしろ金融の専門用語は多いし、難しい単語も多かったので、完全に理解できた訳ではなかった。辞書なんて持って行っているはずもないし、もし持っていたても、いちいち辞書を引いている時間は無い。

それでも私に必要なことは質問をし、分かりにくいところは紙に書いてもらい、だいたいのところは理解できたように思えた。彼女の説明は親切でとても分かりやすかった。

私が納得した様子を見て、いよいよ彼女は口座開設の手続きを始めた。

ひとくちメモ（HSBCでの口座について）

- 外貨預金にはプレミアムアカウントとマルチカレンシーアカウントがある。プレミアムアカウントは預金残高が 40 万元必要。
- マルチカレンシーアカウントの場合、預金残高が 16,500 元以下の場合、口座管理手数料が半年ごとに 16 元かかる。
- 金利に対する税金は 20 パーセント。源泉徴収される。（日本と同じ）
- 日本円から人民元への振替は 10,000 米ドル分が 1 ヶ月に 1 度。

口座開設

さあ、いよいよ口座の開設だ。待っていました。日本で調べてきた内容といくつかの違いがあったが、投資自体にはまったく問題ない。今回の旅のフィナーレとも言える口座の開設がついに始まった。

彼女が口座開設に必要な申込み用紙を持って戻ってきた。ひとつひとつ質問をしながら、彼女が記入してくれた。私はその質問にひとつひとつ答えながら、最後にサインをすればよいはずだった。

氏名、性別、身分証明書（ここではパスポートナンバーと有効期限を書き込んだ）、生年月日、国籍、現在住んでいる国、言語の選択（報告書や連絡事項を受取る際の言語、ここでは英語を選んだ。日本語は設定がなかった）、報告書（残高など、口座に関するもの）を送る頻度、住所、郵便番号、住居の種類（持ち家か賃貸かなど）、いつからその住所に住んでいるか、職業、勤務先、職種、勤務年数、役職、年収、給与体系、学歴、婚姻の有無、車を持っているか、電話番号、開設口座の種類、など聞かれることは多かった。

すべて彼女が記入してくれたので、手続きはスムーズに進んだ。そして残すは、私の直筆のサインのみとなった。さあ感動的にかっこよくサインして終了だ。

「じゃあペンを貸してください」と言おうとしたところで、

「身分証明書は、パスポートのコピーをいただきますね。他に現住所を確認する書類をお願いします」

「えっ、現住所を確認する書類ですか？ それって、パスポートで確認できますよね」

と答えながらパスポートの最後のページを開いた。ここには所持人記入欄というページがあり、氏名、現住所、電話番号などパスポートを持っている本人が記入するようになっている。

「ほら、ここに現住所が・・・」

とそのページをよく見てみると、ガーン。

なんと実家の住所が私の字で丁寧に書いてあった。しかもちゃんと英語で。それもそのはず、このパスポートは8年前に取ったものだった。結婚前どころか、ニュージーランドにも行く前で、写真も営業マン時代のネクタイ姿で写っている。

「あのね、じつは、結婚して今、ここには住んでいなくて・・・」

口座の申込書には、もちろん今の住所を書いたあとだった。でもはっきり言ってパスポートの住所欄なんてどうせ本人が書くのだから、うそでも、なんでも書けるというのが本当のところなのだ。パスポートを発行する側の国が書き込むのではないので、これじゃ現住所の証明にはならないのではないのだろうか。と別の疑問がわいてきた。

日本をご存知の通り、架空の口座を使った振り込め詐欺などが多くなり、口座開設時の身分証明の基準は年々厳しくなっているのだが、中国の場合は逆だった。日本で私が調べてきたところでは、昔は中国での預金口座の開設はとても規制が厳しかったのだが、年々緩和され、中国国内の住所や紹介者がいなくても口座開設ができるようになった。外国人でも決まった地域、決まった銀行でならパスポートひとつで口座が開設できると聞いていた。しかし、これはとんだ情報収集ミスだ。

このパスポートひとつという言葉に完全に信じ込んでいた。しかも自分のパスポートの最後のページを確認することもなく。よく考えれば、日本の銀行でも現住所の入った身分証明書が確かに必要だ。どうしよう、ちょっと困ったな。

「現住所を確認できる書類というと、国際免許証とかそんなのでいいのですか？ 今は持っていないけど」

いつもの旅なら国際免許証は標準装備の中に入っているのだが、今回は発行すらしていなかった。バックパッカーとしてのブランクが長すぎたのか、それとも今回の旅があまりにも短いものだったから油断したのか、すっかり日本で平和ボケしていたことを実感してしまった。

「ええ、国際免許証なら間違いありません。では、それで、えっ、今お持ちではないのですか？」

「いいえ、持ってきていません」

きっぱり答えた。何故こんな変なところで男らしく、きっぱり答える必要があったのかは分からなかったが、実に男らしかった。

「えーと、では、どうしましょう、それでは今回はこのまま手続きを保留にしておきますので、また後日、国際免許証を持って来てください。その時に口座開設の手続きを再開しましょう。現住所を証明できる書類が無いと、ここから先には進めないんですよ。申し訳ありませんが」

と言われても、「あーそうですか、残念ですが家に帰ってまた出直します」という簡単な話ではない。家の近所の銀行じゃないんだから。自宅からバスに乗って、飛行機を2機乗り継いで、さらにバス、そして電車と3泊4日かけてここまで来ているのに。ではまた来週という訳にはいかないのだ。やっぱり、それはちょっとまずいでしょう。

妻の顔が浮かんだ、「何やってるの？　いつも最後のツメがあまいんだから」と呆れ顔だった。来週もまた香港に行ってくる、なんて言ったら大変なことになりそうだ。さすがに仕事も休めないし。

でもまあいいか、香港観光もできたし、美味しいものもたくさん食べたし、久しぶりの海外も楽しかったし、これでよしとしよう。と諦めが付くはずもなく、頭をフル回転させる。しかし参っちゃうなあ。うーん、どうしようかなあ。

ひとくちメモ（口座開設に必要な書類）

- パスポート。
- 現住所を証明するもの、国際免許証など。
- 預金するための現金。（小額でよい）

チョットまってよ

「チョット待ってくださいよ。最初に説明したでしょう、今回の旅の目的はここで預金口座を開くことだって。そのために日本から香港経由で HSBC に来たんですよ。観光のついでに寄った訳じゃないんだから。それに反日運動が盛んな、こんな時期にわざわざ来たんです。反日デモ、シンセンでもやっているでしょう。もう 1 度来るなんて絶対に無理ですよ。3 泊 4 日ですよ。ここまで来るだけで。なんとかありませんかね。お願いしますよ」

とにかく思いついたことを並べた。それ以外には、何もできなかった。

「そう言われても、口座開設には現住所の確認が必要なんです。それが無いと、どうしても・・・」

彼女は困った顔をした。言葉も、はぎれが悪い。

「そうだ、いい考えがある。日本に帰ってすぐに国際免許証を手配します。確か、その日にもらえると思うから。それをコピーしてあなた宛に送りますよ。それが届きしだい、今書いている申込書に付けて口座開設してくればいいんじゃないですか？　そうしましょう。うん、それがいい」

我ながらグッドアイデアだった。今持っていなければ、日本から送ればよい。なんだ、簡単なことじゃないか。何も難しく考える必要はな

かった。それなのに、彼女はうかない顔をしている。

「しかし口座開設をしているその場で、その原本に間違いがないか確認して、コピーをいただくというのが原則でして、コピーを送ってもらう訳にはいかないのです」

彼女がうかない顔をしているはずだった。コピーを送るというアイデアはだめだった。

「ではコピーじゃなくて本物の国際免許証を送ります。それなら大丈夫でしょう。こうやって今実際にあなたと会って話しているじゃないですか、私の顔を覚えておいてくれば、国際免許証が届いた時に、本人確認ができるでしょう。そのコピーを取って添付すればどうですか？ そうすれば現物の国際免許証の確認もできるでしょう」

「しかし、それが・・・」

彼女はすっきりしないようだ。

「あ、そうか、分かりました。それまでに時間がかかるから、私の顔を覚えてないかもしれないからでしょう。どうしてもそれまで、私の顔を覚えてもらえないというのなら、今カメラを持っているので一緒に写真を撮りましょうよ。そしてその写真も同封しますよ。それなら証拠になるでしょう。それとも今からすぐにこの近くで現像してきて、あなたに渡しましょうか？ それなら OK でしょう？ その写真と国際免許証の 2 つを見比べてもらえば、間違いなく証明になるんじゃない

いですか？」

ちょっと無茶かなと思ったが、彼女と写真を撮れることはうれしかった。

「それが、そのような大事な身分証明書を送っていただく訳にはいかないのです。郵送中の責任が持てませんし、こちらの銀行でお預かりすることもできません。送り返す際の責任も持てません。とにかく、この場でコピーをいただくという決まりなのですから」

彼女も困っていた。それでも諦めが付かなかったのでさらに続けた。

「では、こうしましょう。今までの手続きは白紙に戻して、日付を入れずにもう1度、最初から書類を書きましょう。サインはしておきます。国際免許証の本物でも、なんでも銀行ではなく、私が個人的にあなたの自宅に直接送ります。それを受け取ったら日付を入れて書類を提出してくれませんか？ これでどうですか？」

「そう言われても、困ります」

本当に困っていた。私が彼女の立場でも同じだろう。こんなの迷惑だ。まるでストーカーだ。無理ばかり言って、本当にイヤな客だ。早く帰れと思われても仕方がない。でも諦める訳にはいかない。

「分かりました。あなたの自宅に直接送るというのは失礼でした。ごめんなさい。でも分かってください。もう1度ここに来るのは無理なのです。最後にひとつだけ考えがあります。聞いてもらえますか？」

「はい、もちろんです。为什么呢？」

「書類はこのまま保留にしてください。今日は帰ります。明日、日本に帰るので、すぐに国際免許証を申請します。そして私が勝手に国際免許証をHSBCのあなた宛に送ります。もし、ちゃんと届かなくても一切文句は言いません。そこで諦めます。無事に届いたらコピーを取って書類を申請してください。これはお願いです。それも無理なら仕方ありません。そこで諦めます。あなたが受け取った国際免許証はあなたにあげます。送り返しても、送り返さなくてもどちらでも構いません。もちろん送り返す途中で無くなっても構いません。とにかく、あなたにあげます。自由に使ってください。どうしようとあなたの勝手に、あなたの責任ではありません」

自分でもめちゃくちゃな論法なのは分かっていた。でも他に考え付かなかったのだ。彼女からしても迷惑な話だっただろう。無理だというのに帰ろうとしないのだから。それに人の国際免許証なんてもらってもどうしようもないのだから。

「それでは・・・しばらくお待ちください」

と言って彼女が席を外した。彼女がいない間に考えた。国際免許証も日本が発行する国際IDカードなのだから、その筋に売ればよい値段がつくかもしれない。

国際免許証はどうか分からないが、日本人のパスポートならバンコ

クでは 10 万円前後、ものによっては 20 万円で売れると聞いたことがある。日本人旅行者でお金欲しさにそんなことをしているバカもいた。パスポートを失くしたと言って、大使館に駆け込めば外国でも再発行してくれるのだから。でも、その売られたパスポートは間違いなく偽造され、偽造パスポートとして悪用されると分かっているはずなのに。自分の知らないところで自分のパスポートを持った人間がいるなんて考えられない。そういう偽造パスポートを持った人間がテロを起こしたりしているのだろう。そんな話を思い出し、自己嫌悪に陥った。自分も似たようなことをしようとしている。こんなのはルール違反だ。貧乏旅行者のクズだ。何がバックパッカーだ。海外で身分証明書といえ、命の次に大事な物じゃないか。なんて浅はかな考えだ。彼女が戻ったら、さっき言ったことは、やっぱり取り消そう。そう心に決めた。彼女が席を外してくれたので、ひとりで頭を冷やすことができた。

口座開設はどうなるのだろう。自分でも先行きがまったく読めなかった。上司が出てくるのだろうか？ 厳しくなるかな。上司が出てくると今みたいな変なことは言えないだろうな。しかし、今の私にできるのは、彼女の帰りを待つだけだった。

数分後、彼女は最初と同じ笑顔で帰ってきた。

「お待たせしました。実は今、調べましたところ、HSBCの他の支店

でも本人確認ができるとのことでした」

他の支店と言われても、結局中国に行かないといけないのだったら、大して変わらないのにな。

「他の支店でも？　どういう意味ですか？」

「はい、日本には東京と大阪にHSBCの支店があります。お客様にどちらかの支店に国際免許証を持って行っていただき、その支店で行員と会ってもらいます。その場で本人確認を行い、コピーを取り、その支店よりシンセン支店に国際免許証のコピーを送ってもらうことができるのです。すみません、私も勉強不足で知りませんでした」

思わぬ展開に驚いた。さっきの自己嫌悪のことなんて完全に吹っ飛んでいた。希望の光が見えてきた。でも東京か大阪ってちょっと遠いな。

「本当に？　そんなことができるのですか？　ありがとう、調べてくれて。でも東京、大阪以外に支店はないのですか？　例えば福岡とか？」

「いいえ、東京と大阪だけです」

せっかく調べたのに、まだこんなことを言っているのかと彼女は思ったに違いない。

東京や大阪も結局1日ばかりになるだろう。もちろん平日に行かないといけない。仕事も休まないといけないし、旅費もかかってしまう。

さて、どうしたものか。しかし贅沢だ、さっきまで預金口座の開設自体が危なかったというのに。あとは日本国内での手続きで、すべて終わるというのに。やっぱり贅沢だ。これ以上彼女を困らせたなら、バチが当たるかもしれない。そんな心の葛藤があったのだが、ずうずうしく、もう一押ししてみた。

「分かりました。説明も丁寧で分かりやすかったし、いろいろ調べてくれて、本当にありがとう。こんな例外的なことまでしてくれて。でもだからこそ私はあなたと預金口座を作りたいのです。他の誰でもなく、あなたとです。うまく口座が作れたら頑張ってたくさん預金しますね。日本の銀行の分もこちらに送金します。なんとかならないでしょうかね？　お願いします」

なんてずうずうしいやつなんだ。よくもこんなことが言えたものだ。自分でも信じられないと思ったが、彼女は以外にも、

「ちょっと聞いてきます。しばらくお待ちください」
と、また席を外した。

彼女もいろいろとよくしてくれたから、これでだめなら大阪に日帰りで行こう。ところでいつにしようか、早いほうがいいけど。明後日なんて無理だよな。こんなことなら福岡じゃなくて、関空発着にしておけばよかったかな。でも国際免許証が無いからどっちにしても出直しか。と次の計画や、お金の工面を考えていた。考えがまとまる前に

彼女が帰ってきた。

「お待たせしました。ところで、現住所を証明するものを他に何かお持ちじゃないですか？ 国際免許証以外で、例えば電気代の請求書とか、電話代とか、そういう公共料金の請求書みたいなのは？」

「え、どういうことですか？ 今そんなもの持ってないですよ」
なんだか風向きが変わってきた。彼女の言っていることの意味がさっぱり分からなかった。

「もちろん今じゃありません。公共料金の請求書など自宅にないですか？」

「自宅に？ 自宅にだったら、そんなものいくらでもありますよ。もし、無くて毎月送ってくるはずだから。それがなにか？」

彼女はじれったそうに説明してくれた。

「ですから、その請求書を日本からこちらに直接送ってもらえませんか？ 国際免許証などはお預かりできませんが、公共料金の請求書なら、お預かりするのに問題ありません。それには住所が書いてあるはずでしょう。現住所を証明する書類として請求書を使ってもよいということです」

あまりにも意外な展開に考えがまとまらなかった。そんな方法があるなら早く言ってくればいいのに。って今調べてくれたところか。

「え、本当に？ 大阪なんかに行くくらいなら、そんなこと朝飯前で

すよ。帰ったらすぐに送りますよ」

この話がやっとまとまりそうになり、彼女も笑顔で話を続けた。

「ただ、ひとつだけよろしいですか、条件としては請求書が英語で書かれているということです。それだけです。私たちは日本語が分かりませんから。書類は英語か中国語になりますので。ですから英語で書いてある請求書ですよ。これなら口座開設に使えます。大丈夫です」

「分かりました、英語で書かれた請求書ですね。なんとかなるでしょう。日本から急いで送りますよ」

長い交渉がやっとまとまった。達成感というよりも、彼女ひとりの頑張りだったような気がする。

「これで口座が作れますね、よかった。私も安心しました」

彼女の顔にやっと、本来のきれいな笑顔が戻った。笑顔の彼女はとても素敵だった。

「いや、こっちこそ無理ばかり言ってすみませんでした。でもあなたのおかげで口座が作れるんですね。本当にありがとう」

やっと口座開設を続けることができた。インターネットバンキングとテレフォンバンキングもお願いした。最後に直筆のサインをして、残すは、英語で書かれた請求書を送るだけとなった。

日本円普通預金口座から人民元普通預金口座に振替える際に使うという専用の用紙を数枚と、銀行のパンフレット、説明の時に書いたメ

モ紙など必要なものをもらい、その日の手続きはすべて終了した。

彼女にお礼を言って席を立った。あんなにワガママを言ったにもかかわらず、彼女は嫌な顔ひとつ見せず、銀行の出口まで送ってくれた。外に出てからも、しばらく手を振ってくれた。

彼女と会うことはもう一生ないだろうな。あそこまでワガママを言ったのだから、最後にもうひとつだけワガママを言って、写真でも撮らせてもらえばよかったな。それにしても美人だったなあ。お礼に食事でも誘えばよかったかなあ。そんなことばかり考えて、後ろ髪を引かれる思いでHSBCをあとにしたのだった。

ありがとう、そしてさようなら、HSBCのアジアンビューティー。

ひとくちメモ（HSBCでの口座開設の裏ワザ）

- 住所を確認する書類として、公共料金の請求書（英語表記のもの）でもよい。
- 日本のHSBCの支店でも本人確認ができる。

中国脱出

HSBCを出ると、もう 11 時前だった。口座開設にかかった時間は 1 時間半にも及んでいた。上手くいけば 30 分もかからないはずなのだが。密度の濃い 1 時間半だった。その証拠に、もうくたくただった。よくあんなに英語で話ができただと自分でも感心した。とにかく必死だった。すべてが順調だったとは言えないが、今日できる限りのことはやったという満足感があつた。あの状況ではベストと言えるのではないか。そんなに偉そうに言ってみたものの、原因はすべて自分の準備不足であるのだが。

いつもなら、ここでビールでも飲んで軽く食事してから香港へ帰ろうかというところだが、今回はさすがにやめておくことにした。

駅に向かう途中、商店街を歩いているとお店のおばちゃんが、何か話しかけてきた。もちろん中国語で。こんなおばちゃんとは言葉が通じなくても話しをするといろいろと面白いのだが、今日のところは日本人とバレないように無視して通り抜けた。早歩きで元来た道に戻る。

イミグレーションを抜け、中国を出国した。カバンの中や体をチェックされることはまったくなかった。

人民元は国外への持ち出しは原則禁止と聞いていたが、これならぜんぜん問題はなさそうだ。バレずに、いくらでも持ち出せそうに思え

る。バッグにいっぱい100元札を詰め込めば、いくら持ち出せるだろうか。こんなことなら、シンセンで口座開設なんて面倒なことをしなくても、人民元に両替して香港に持ち込めばよいのではないか。もちろん現金なら利息は付かないけれど、ずっと簡単にできそう。国境での没収なんて絶対にあり得ないと思えるくらいにすんなりと出国できた。

そういえば、以前チベットからネパールへ国境を越えた時もノーチェックだった。あの時は確か、少し余った人民元は国境を越えたあと、ネパール側でネパールルピーへ両替したのだった。

しかし昔、ベテランの日本人バックパッカーから聞いた話を思い出した。どこの国だったか忘れたが、多額の現金を持ち出そうとした人がいて、出国の際に見つかって全額没収になったと。その人も持ち出し禁止のことは知っていたが、何回か越えたことのある国境だったので、チェックはされないという状況を知っていた。普通なら絶対にチェックされないのだが、その時に限って初めてチェックされて、没収されたということだった。

あとになって考えると、銀行で大金をおろしてからそのまま出国したらしく、その銀行からイミグレーションに連絡がいったのではないかと言っていた。そうとしか考えられないと。そうやってそのお金の

一部が銀行員のポケットに入るのだろう。そう考えると、ぞっとするがこれが現実なのだろう。

私も銀行を出てそのまま出国したのだが、残念ながらそんな大金を持っているはずもない。というか人民元は1元も持っていなかった。シンセンで人民元に両替していないし、お金は1元も使っていないのだから。私には没収される危険性はまったくなかった。

香港への入国ゲートに並んでいると、何かゲートの上に数字が表示されている機械を見つけた。なんだろうと思い、ずっと見ていたら、人が進む度に数字が変わる。なるほど、どうやら体温を測っているようだ。この前、SARS（サーズ）が流行っていたからだろう。あの時、香港はひどかったらしいから。さすがにIT先進国だ。それにしても、すごいシステムがあるものだと感心しながら、香港へのゲートをくぐり再入国した。

中国での滞在時間、わずか2時間。本当にちょっとの中国滞在だった。これも香港から見て、海外旅行になるのだろう。今までの最短滞在記録となった。この記録は2度と破られることはないだろう。

香港最後の夜

シンセンにきた時と同じく KCR の電車で香港市内まで戻って来た。大事な仕事を終えて、ほっと一息ついた。それでも時間はまだお昼だった。まだ時間はたっぷりある。電車を使い、遠くまで足を伸ばして観光した。有名なスターフェリーや2階建ての路面電車にも乗った。

そんなふうにして、その日の残った時間は過ぎていった。早いもので今回の旅も最後の夜になってしまった。口座開設も完了はしなかったが、あとやるべきことは日本に帰ってからだし、今やれることはすべてやり終えた。旅の最後の夜だし、今夜はちょっとリッチに祝杯でもあげよう。と自分に言い聞かせ、いつも行く屋台や食堂よりも高級そうな中華料理店を選び、中に入った。

贅沢な食事の値段はゲストハウスの1泊分よりも、はるかに高かった。と言っても、ゲストハウスの宿泊代が安いのがだから当然といえば当然なのだが。

昔の貧乏旅行中、カンボジアあたりでは1泊2ドル（約240円）の一番安い部屋に泊まっているのに、1杯2ドルのウィスキーを何杯も飲んでいたこともあった。仲間からもその分を部屋代に回せば、エア

コンとホットシャワー付きのずっと快適な部屋に泊まれるのと言われていたが、私に言わせればそれとこれとは別の問題だ。エアコンとホットシャワーにお金を使うくらいなら酒代にしたいのだ。私は昔からこういう人間なのだ。

食事は済ませたがやっぱり飲み足りない。このまま、あのスペシャルな部屋に帰るのもどうかと思い、街をぶらぶらとしばらく歩いていると、パブのネオンを見つけた。いつもの調子でつい、ふらっと足が向いて店に入ってしまった。

外見は外国によくある普通のパブなのだが、中の様子は少し違っていた。若い女の子がやたらと多い。女の子たちはみんな派手な服を着ているし、みんな客といちゃついている。なんか怪しいなと思いながら観察していると、どうやらその店のホステスのようだった。客を見ると観光客らしい白人ばかりだった。地元の人姿はまったく見えなかった。

ホステスのいる店か、日本みたいだなあ。ちょっと高いかな。でもまあ、せっかくだから1杯だけ飲んで帰ろう、香港最後の夜だし。とカウンターで1杯注文した。そのままカウンターで待っていたが、バーテンダーのお兄ちゃんに日本で言う、ボックス席に座るようにと言われた。私はカウンターで構わなかったのだが。

指定された席に座って待っていると、ホステスの女の子が注文したウィスキーコークを持ってきてくれた。その女の子に少しチップを払った。

私はどうもこのチップという習慣にいまだに馴染めない。やはり日本人だということだろうか。

女の子が隣に座ってきた。少し話しをするとこの女の子の出身はバンコクだった。タイから来たのだった。

「バンコクから来たの？ タイは行ったことあるよ。タイ語は少しだけなら知ってるよ」

まあ、このあたりが話のきっかけとしては無難だろう。

「本当に？ どんなの知ってるの？ 言ってみて」

「サワディーカー（こんにちは）、コープンカー（ありがとう）、アローイマイ？（おいしいかい？）、マイペンライ（気にしないで）」えーとそれから、「ロートダイマイ（まけてくださいな）」下手くそなタイ語を連発してみた。

「サワディーカー？ コープンカー？ その語尾の、『カー』って女言葉だよ。男が使うとおかしいよ」

ホステスの子が笑いながら教えてくれた。男の人は、「カップ」とか「クラブ」とか言うらしい。どうもオカマっぽく聞こえるようだ。やっぱり外国語の発音って難しいものだ。

「分かった。今度からそう言うようにするよ。じゃあ、他にこれは知ってる？」

知ってる？ とタイ人に聞くのも失礼な話だが。

「セიმセიმ！」

「セიმセიმ、知ってる知ってる、それ懐かしいー、久しぶりに聞いた」

と女の子は笑った。

「セიმセიმ」はタイとか、タイ近辺の東南アジアで使うのだが、よく聞くので私も最初は「セიმセიმ」ってなんだろうとずっと思っていた。結局は英語の、**SAME**、から来ているらしく、意味も英語と同じで、「同じ」ということだった。

日本語で言うと、例えば「あーそれぞれ、おなじおなじ」というニュアンスで使うみたいだ。タイの女の子がよく使っていた。若い女の子が使うと、とてもかわいらしく聞こえる。

タイのマーケットで見かけたTシャツにこんな文句が書いてあったのを思い出した。

SAME SAME BUT DIFFERENCE

訳すと、「おなじおなじ、けどちょっとちがう」という感じだろうか。意味はよく分からないけど、なんだか、かわいらしく聞こえたものだ。

タイ辺りを旅している欧米人のバックパッカー達もこの、「セიმセიმ」はよく使っていた。最初は面白半分で使っていたのだが、それがいつの間にか口癖になったと出会ったバックパッカーが言っていた。和製英語ならぬ、タイ製英語だろうか。でもやけに耳に残る言葉だった。私も思い出しておかしくなった。

タイの人たちは英語を話せなくて、この「セიმセიმ」を自然に使っているのだろうけど、この店の女の子は英語が話せるだけにこの「セიმセიმ」のことを思い出して、おかしかったのではないだろうか。

「バンコクにカオサンロードってあるでしょう。バックパッカーが集まる場所。あそこは好きだったよ、なんでも揃うし、あ、そうそう昔あそこで、インターナショナル・スチューデント・ID・カード（国際学生証）作ったよ。知ってる？ 見比べたことあるけど、あれ本物と区別付かないよね」

「へーそうなの？ 知らなかった。カオサンロードなんか普通のタイ人は行かないもん」

カオサンロードというのは、バンコク最大の安宿街で、世界中からバックパッカー達が集まってくる。日本食も安い値段で食べられるし、世界各国への航空券も格安で手に入る。食事も酒もお土産もなんでも

ここだけで揃う。カフェでは新作映画の海賊版ビデオが堂々とテレビで流されている。バックパッカーにとっては、とても居心地のよい街である。

この国際学生証も、もちろんインチキのニセモノだが、写真も貼るようになっているし、わりと精巧に作られていた。本物と比べても簡単には見分けが付かない。ニセモノなので自分で大学名を決められるため、日本人は東京大学と書いている人が多かった。カオサンロード辺りには、東大生がたくさんいるのだ。ちなみに私は正直に自分の母校を書いていた。偽造の身分証明書に正直もなにも、あったもんじやないのだが。

他にもアフリカに行く時に必要なイエローカードや、プレスカード（記者の身分証明書）なんかのインチキが買えた。イエローカードとは、黄熱病の予防接種を受けましたという証明書だが、これが無いとアフリカの国には入国できないらしい。本当にこれが使えるかどうか分からないし、そんな大事な予防接種の証明のインチキを買うことの意味が分からなかったが、みんなシャレで買うのだろう。

こういった偽造 ID カードを、みんなお土産代わりに作っていた。お土産代わりとはいえ、私が中国の雲南省、昆明という街で動物園にパンダを見に行った時、これを試しに出してみたら学生割引で入園できたこともあった。

「バンコクにいる時には、いろんな詐欺師に会ったよ。宝石詐欺とか、カード賭博詐欺とか、シルクのスーツが安く作れるというインチキ臭い話とか。よくカオサンロードの近くで声をかけられたよ」

「へー、噂では聞いたことあるけど、本当にいるの？　どんな感じなの？」

「例えば、そうだな、今日はお寺でムエタイの試合をやっているから見に行かないか？　って感じで声をかけてくることが多いかな。お寺でムエタイっていうのもおかいな話だけど。とにかく、どこかに連れて行こうとするんだよ、あの連中は」

「で、どうなるの、ついて行ったら？」

「いや、別にどうってこともないんだけど、いろんな店に連れて行かれるよ。別に買わなければ問題は無いよ。いろいろ連れて行ってくれるから、まあ、観光にもなるよ」

「それじゃ、詐欺にならないんじゃないの？」

「うん、普通ならそうなんだけど、実は、1度、危なかったんだ」

誠に恥ずかしい話なのだが・・・

あれはカオサンロードの近くで、寺院を見ている時に声をかけられたのが最初だった。タイ人のおじさんと仲良くなり、いろいろ旅の話

などをした。とても私を気に入ってくれたみたいで、とっておきのことを教えてくれるという。

そのとっておきとは、タックスフリーウィークという制度がタイにはあり、それが今週いっぱい終わるというのだ。年に1度のこの制度を利用すると、高額な商品を外国に持ち出す際に必要な税金がかからないらしい。それが明日までなのだという。ある店で宝石を買って日本に持ち帰り、日本で契約している指定の宝石店へ持って行けば、3倍くらいの値段で買い取ってくれるという話だった。指定の宝石店というのは私でも知っている有名な店だった。

そんな馬鹿な話がある訳ないと分かっていたのだが、なんとなく話に引き込まれた。そのおじさんの妹が次の日、宝石を買いに行くので一緒に連れて行ってくれるという。その後、妹にも会い、翌日一緒に宝石を見に行く約束をした。その話を完全に信じた訳ではなかったが、見に行くのはタダだし、よい暇つぶしにもなるだろうと思った。それに私は現地の人と話すのが大好きなのだ。

翌日、お昼に待ち合わせの場所でその妹に会った。トゥクトゥクというオート三輪のタクシーで宝石屋へと向った。もちろんタクシー代は彼女が払ってくれた。トゥクトゥクに乗っている間もタックスフリーウィークが、いかにすばらしいかを説明された。彼女は毎年この時期に宝石を買い、外国で売って、そのお金で  スイスに行ったり

してのんびり過ごしているという。でもどうもマユツバものだ。

そんな夢みたいな話を聞いているうちに、立派な店構えの宝石店に着いた。店の中は金持ちそうな客が何組か来ていた。そのわりには宝石の数が少ない気がした。宝石を店員から見せられ、説明を受けた。高そうな器に入ったコーヒーが出されたり、宝石を手にとってルーペで見せてくれたりと、いかにもそれらしかった。値段は一番安いセットが日本円で 20 万円くらいだった。これを日本に持ち帰れば、60 万円で買い取ってくれるという。

どう考えても、うますぎる話だ。それに私に宝石を見る目なんてあるはずもなく、いくら見せられても宝石の価値なんてまったく分からなかった。こんなもの買える訳がない。

「やっぱりいらないよ。宝石見たってぜんぜん分からないし。買わないから先に帰るよ」

と妹に言うと、

「買わないの？ もったいないけどね。でも仕方ないわね」

と無理強いする様子もまったくない。

「私は買うわ。じゃあ、これとこれね。今から銀行にお金をおろしに行くから、そのあと食事でもしましょうよ」

銀行にお金をおろしに行くという妹と、宝石を買わない私は一緒に店を出た。銀行から大金をおろすということで、ご丁寧にもボディー

ガードがついて来た。でもこれで終わりではなかった。

「銀行に行って、お店にお金を払ってくるから、その間ここの寺院でも見ておけば？ 綺麗なお寺よ。あとで待ち合わせしましょう」

そのお寺の前で妹と別れた。

寺に入りゆっくりと中を見ていると、そこで僧侶らしい男が庭の掃除をしていた。彼と少し世間話をしたあと、お坊さんなら信用できるだろうと思い、さっきの宝石の話をした。

「それで、買ったんだろう、宝石？ こんなチャンスはめったにないよ。年に1度だけだからね」

「いや、買わなかった。だって宝石見たってよく分からないし、なんだか騙されてる気がして。やっぱり買えないよ」

その坊さんが乗り出してきて話し始めた。

「確かにその気持ちは分かるけど、チャンスは1年のうち今だけなんだから、買っといたほうがいいと思うよ。私もこの時期に毎年買ってるよ。うちの妹が  シンガポールに留学しているんだけど、その学費が払えるのもこれのおかげだよ。うちの貧しいから、これがないと留学なんて絶対に無理だから、本当に感謝してるよ。みんなこのことを西洋人には教えたくないんだ。でも日本人は同じアジア人だから、仲間だから教えるんだよ、きっと。今からでも間に合うんじゃないかな。ま、無理にとは言わないけどね」

急に何かすごく損をした気になった。早く戻って買わなきゃ。儲け損ねてしまう。そうかやっぱり本当だったんだ。

「分かった、今から戻って買ってくるよ。やっぱり本当だったんだ。いろいろ教えてくれてありがとう」

「いやいや、こんなよい制度があるんだから、みんなで分かち合わないと、もったいないからね。さあ、急いだほうがいいよ」

儲かる話って本当にあるんだ。こういうチャンスをものにした人が金持ちになれるって訳なのか。これで 40 万円も儲ければ、日本への旅費を使ったとしても、まだまだ旅が続けられそうだ。ヨーロッパくらいまで余裕で行けるんじゃないかな。と夢はぐんぐん広がっていった。

宝石店に戻る途中、こんな夢のようなことばかりを考えていた。そうだ、こんなラッキーなことなら他の人にも教えてあげよう。と思っても、知り合いなんてひとりもない。教えてあげようというより、このことを誰かに聞いてもらい、そして背中を押してもらいたいという気持ちだったのかもしれない。やはり宝石を買うことに対する不安が、まったく無いという訳ではなかった

あれこれ考えた末、日本大使館に電話をすることにした。彼らならこの制度について知っているかもしれないし、もし知っていれば詳しい情報を教えてくれるだろう。彼らが賛成してくれれば、こんな不安

もなくなる。きっと背中を押してくれるはずだ。そんな期待を胸に、公衆電話に入りコインを入れダイヤルを回した。

「あの、面白い儲け話を耳に挟んだのですが。実はですね・・・」
今までのいきさつを話した。

「あ、それね、やめといたほうがいいですよ。完全に宝石詐欺ですよ。これに引っかかる日本人、結構多いんですよ。だからもう、その妹とも会わないほうがいいですよ」

まさに即答だった。しかもまったく予想外の返事が返ってきた。この大使館員は知らないんだと思った。

「だって今はタックスフリーウィークでしょう」
私はまだ、本気でそんなことを言っていた。

「そんなこと言われても、お寺で会ったお坊さんも言っていたんですよ。偶然に入ったお寺で・・・」

と言いかけて気が付いた。その寺に行けと言ったのは、まぎれもなくあの妹だったんだ。そこですべてがつながった。これってやっぱり詐欺なんだ。やっと目が覚めた。

「そういうことか！ 分かりました、今、やっと謎が解けました。すべてがつながりました。危うくインチキ宝石を買わされるところでした。大使館に電話してよかった。おかげさまで目が覚めました。ありがとうございました」

と電話を切った。さすが日本大使館。

これは仕掛け人が何十人もいる大掛かりな詐欺だった。最初のおじさんに、妹、宝石店の店員、たぶんその客全員（なかにはカモもいたかもしれないが）、ボディーガード、そしてインチキ坊主。まさか坊主までが仕掛け人だとは夢にも思わなかった。実際私が信じたのもあのクソ坊主のせいだ。これだけの人数でも1日にひとり引っ掛ければ元が取れるのだろう。

当時聞いた話では、タイでは大卒の銀行員の初任給が月に日本円で1万円くらいらしいので、1日に20万円稼げば、それこそすごいもんだ。

その翌日、スイスに行くはずのあの妹にばったり会った。どうせまた、カモを探しているのだろう。

「あれ、今日スイスに行くんじゃないかったっけ？ 昨日買った宝石をスイスに売りに行くんでしょう？ やっぱり俺も買いたいから今からもう1度連れて行ってよ。あの宝石店、道がややっこしくて、ひとりじゃ行けないからさ」

と言うとその妹は言葉を濁し、逃げて行った。

他にもシルクのスーツが安く作れるとか、トランプ賭博でグルになり、金持ちを騙してお金を巻き上げようなど、いかにも怪しい話がいっぱいあった。ひとりでボーっとしていると何度も声をかけられた。

その度に、次はどんな話だろうかと彼らの話に付き合ったのだった。みんなよく考えるものだ。いろんな作り話を真面目に話す姿を見ると、おかしくて笑ってしまった。しかしすべてに共通するのは、みんな英語が達者だということ。生活がかかっているので、みんな勉強熱心なのだろう。

ひとり旅が長くなると、だんだん、人恋しくなる。そこに付け込んでくるのが詐欺師なんだということも、身をもって学んだような気がした。

この話をすると、そのタイ人のホステスの子は、またげらげらと笑い出した。

「そんな話に騙される人が本当にいるのね。噂では聞いたことあるけど。騙された人に、まさか香港で会うとは思ってもみなかった。」

「いや、騙されてないって、騙されかけたけどね。でも本当に信じてしまうって、あの状況じゃ。あの場に居なきゃ分からないって、本当にリアルなんだよ。だってお寺の坊さんだよ、坊さん。どうやって入り込んだのかね。もしかしたら本物かな。とにかくテレビのドッキリみたいなもんだよ。とにかく金と手間、それに人手もかけてるよね。今考えてもすごいと思うよ。また声かけられたら、今度は引っかかるかも」

そんな馬鹿話が始まり、私も1杯のつもりが1杯で終わるはずもなかった。

「それと実はね、その他にも、もっとひどいのがあってね。マニラでね・・・」

「なに、なに、まだあるの？ そんな話？ 教えてよ。1杯おごるからさー」

と言われ、結局1杯おごらされた。ここでも軽く騙されてる。まったく、どうしてこうなんだろう。でも楽しいからまあいいか。もう話も酒も止まらなくなってしまった。

「フィリピンに行った時、マニラでひとりで観光していたんだけど、その時、地方からマニラ観光に来たというフィリピン人のおばちゃん4人組に声かけられて、一緒に観光してたのよ・・・」

私は昔から何故か、おばちゃん和孩子にはもてるのだ。その間のちょうどよい年代の女の子にはあまりもてないのだが。

おばちゃんというのがミソかもしれない。若い子のほうがもちろんうれしいけど、その分こっちも警戒するだろうから。

おばちゃんたちと、あちこち半日くらい観光した。日本のことやフィリピンのことを話したり、観光地の歴史なども教えてくれて、ちょっとしたガイドにもなってくれた。そんなふうにして、とても仲良くなった。途中で飴をもらって食べたのは覚えている。あとで考えると

そこから少し記憶があやふやになっている。もしかしたら、その飴に何か入っていたのかもしれない。

夕方まで観光して、おばちゃんの自宅でフィリピンの家庭料理をご馳走してくれるという話になった。こんなチャンスはめったにないので、もちろん喜んでついて行った。

何品かのフィリピンの家庭料理がテーブルに並んだ。こういう庶民的な料理って、その国の本当の姿が見えていいもんだ。やっぱり旅はいいよな。と思っていると、フィリピンのビール、サンミゲールも出してくれた。これがうまいのだ。よろこんで頂いた。しかしどうやら、このビールに睡眠薬が入れてあったらしい。

「それでどうなったの？ 睡眠薬って飲んで分からないの？」

「ビールおかわりした」

「え？ 睡眠薬の入ったビールおかわりしたの？ 本当に。それで？ それから？」

「だってサンミゲール、うまいんだから、しょうがないよ。料理も美味しかったし。それでつい、もう1杯。さらにもう1杯」

その後、突然眠たくなった。おばちゃんに「少し横になって休んでからホテルに帰ったら？」と言われ、自分の意思とは関係なく、その

場に横になった。

気が付くと夜中の 12 時すぎだった。どうやら 4 ～ 5 時間眠っていたらしい。「あ、寝ちゃった。ごめんごめん、じゃ迷惑だから帰るね。ありがとう、ご馳走様でした」と、おばちゃんにお礼を言って外に出た。外は真っ暗。外に出てしばらく歩くが、そこが何処だかさっぱり分からない。

何か嫌な予感がして財布を見る。財布の中身は異常ない。少しのフィリピンペソが入っている。次に貴重品を入れている腹巻を見ると、トラベラーズチェックが無い。しまった。やられた。噂で聞いたことのある睡眠薬強盗だ。

来た道を引き返すが、路地がいっぱいあって、どの家から出て来たのか、まったく分からなくなっていた。もちろん自分が何処にいるのかも分からなくなっていた。頭に血が上り、カバンに入れていたキャンプ用の万能ナイフを手にとって、その家を探し歩いた。

興奮して歩き回っていると地元の人に事情を聞かれた。説明しているうちに人だかりができ、いつの間にか車に押し込まれ連れて行かれた。

「何処に連れて行かれたの？ 大丈夫だったの？」

「何処って、警察。変な外国人が暴れていると思われたらしいよ。た

だ説明していただけたのに。でもよく考えるとたぶん、あの辺の人はみんなグルなんじゃないかな。だから、その場から俺を遠ざけるために警察につれて行ったんだと思うよ」

交番のような小さなところから、もっと大きな警察署に移された。警察署で事情を話したあと、待たされている間に長椅子で眠ってしまった。

気が付くと朝だった。頭がボーっとする。警察署で被害届を出し、そこを出ようとした時、ひとりの日本人に声をかけられた。話をするとその人はマニラで日本人向けに発行されている新聞の記者だった。まったく何処でかぎつけて来たのだろうか。この記者にインタビューされ、翌日の新聞に今回の件が匿名で載ったのだった。

「睡眠薬強盗の話は知っていましたが、まさか私が・・・」

と、ちゃんと私のコメント入りで。

被害はトラベラーズチェックの100米ドル（約12,000円）と日本円の現金が10,000円。やられました。トラベラーズチェックはすぐに再発行できたが、現金はどうしようもない。タイでの宝石詐欺の教訓は、これっぽっちも生かされていなかった。本当にまったく懲りていない。

「でも無事でよかったね。気を付けてよ。ってもう遅いけど。でもそんな目に遭ったのならフィリピンのこと嫌いになるんじゃないの？」

タイもそうよね。宝石詐欺にも遭ってるし」

ホステスの子も笑いながら心配してくれていた。

その一方、お酒のグラスはどんどん空いていった。

「タイの宝石詐欺なんて可愛いもんだと思うよ。いい経験だよ。タイは今でも、もちろん大好きだよ。食事も美味しいし、普通の人は優しいからね」

女の子もタイのことを悪く言われなかったもので、少しホッとした様子だった。

「フィリピンのは確かに危ないよね。強烈だったけど、全部自分の責任だからね。あの事件のあと、このままじゃいけないと思って、船に乗って田舎のビーチでしばらくのんびりしたよ。そこの人たちはみんな親切だった。だから今でも嫌いじゃないよ。都会は何処でも同じじゃないかな。いろんな人がいるから。香港でも東京でも騙される時は騙されるよ。何処だってぼったくりはあるしね。でも今夜は、ぼったくらないでね！　お願いね！」

「ぼったくらないわよ。大丈夫よ。でも、そんなものかしらね。まあいいわ。タイのこと嫌いじゃないのなら。まだあるんじゃないの、そんな話。他には？」

ちょっとまじめな話をしたのだが、女の子に誘導されてまた馬鹿話に戻っていった。

「それがまだまだあるよ、この手の変な話ならいくらでも。ネパールのカトマンズではね、男の人の大事なところで 50 キロの石を持ち上げる人を見たよ。ヒンドゥー教の修行者でサドゥーと呼ばれる人なんだけど、1 ドル払えば見せてやるって言われて何人かで払ったよ。

ヒンドゥー教で修行すれば、あんなことができるのかね。まさかね」

「うそ。インチキじゃないのそれ？ 石が軽いとか。それにお金取るのも怪しいよ」

「だって、その噂を聞いて、わざわざその人を探しにパシュパティナートっていうヒンドゥー教の寺院に行ったんだもの。ちょっとインチクさいんだけど、本当に石は持てないくらいに重かったよ。その石がちゃんと持ち上がっていたんだ。俺があんなことしたら、ちぎれるだろうな。でもいいよな、あんなことできれば。俺も修行しようかな」

女の子はあきれた顔で、

「しなくていいよ。そんなこと。できたからってなんにもならないよ」

確かに、おっしゃる通りだ。

「そうかなあ？ できればかっこよくない？ 目の前で見てみたくな

い？」

「ぜんぜん。バカみたい。でも、ちょっとは見たいかも」

本当はみんな見たいのだ。くだらないけど、あのバカさが面白いんだ。
だから1ドル払うのだ。

「ベトナムのフーコック島というところではね・・・」

この話はひどすぎて、とても本には書けない・・・ここではパス。

私も女の子もげらげらと大笑い。周りの客やホステスも、ちらちら
とこっちを見ている。

こんな馬鹿な話ばかりだったが、香港最後の夜をととても楽しむこ
とができた。ホステスがこの女の子でよかった。彼女はとても聞き上
手で気持ち良く話させてくれた。しかしその分、1杯で帰るつもりが、
結局ゲストハウスの3泊分よりも高い料金を払わされてしまった。で
も、楽しいからこれでいいのだ。こういう都合のよい時だけは日本円
に換算して、高くないと自分に言い聞かせるのだった。

「じゃあ帰るね、ごちそうさま、またね、コープンカップ！」

「そうそう、それでOK。また来てね、コープンカー」

このパブを千鳥足で抜け出した。女の子も笑顔で見送ってくれた。

パブを出たあとは、とても100万ドルの夜景を見に行ける時間では
なかった。やはり前日に見ておいて正解だった。香港に行って夜景を
見なかったら、絶対に後悔するだろう。

翌朝、3泊したゲストハウスをチェックアウトして、屋台でおかゆの朝食を済ませ、空港へバスで向かう。2階建てバスの2階の一番前の席に座ることができた。特等席だ。香港の街を見上げたり、見下ろしたりと車内から街の風景を見送った。この街ともお別れだ。旅の最後は、やはり寂しさが残る。また来られるかな香港。

空港で少しお土産を買うと、あっという間に出発の時間になった。さすがに3泊4日は早いもので今回の旅も、もう終わりが近づいてきた。あとは日本へ帰るだけ、早かったなあ。香港は忙しい街だったし、今回はあまり時間がなかったので、のんびりとはできなかったが、食事は何を食べても美味しかった。私は買い物にはあまり興味が無いので、次回チャンスがあればグルメ旅もよいかもしいと思った。

台北行きの機内。隣の席に座った台湾人だろうか、乗った時からずっと落ち着きがない。機内の設備図を見たり、テーブルを出したり戻したり、読書灯を点けたり消したり、ヘッドフォンを付けたり、オーディオをいじったり、ひと時もじっとしていない。飛行機に乗るのがいかにもうれしそうに見えた。

機内サービスが始まると、早々とテーブルを出して待ち構えていた。客室乗務員が近づいてくると、私に早くテーブルを出せとジェスチャ

一で言うてくる。そんなにあせる必要もないのにといいながら、「わかったわかった」とのジャスチャーを返したつもりだった。しかし彼は何を思ったか、私にテーブルの出し方を教えてくれたのだった。

それくらい知つとるわい。と思ったが大人げないので、ジョークのつもりで、昨夜習った正しいタイ語で、「コーペンカップ！」（ありがとう）と答えた。このジョークはもちろん彼には通じなかったが、あまりのくだらなさで自分で笑ってしまった。彼はうなずきながら、とても満足そうに笑い返してきた。

その彼は、機内食もはりきって食べていた。とてもうれしそうに。私は隣でビールを飲みながら、「幸せってすごく近いところにあるんだなあ」となんだか幸せな気分になってしまった。

その後も彼の行動を見ているだけで、台北まで退屈することはなかった。

台北で乗り換えて、福岡行きの機内では隣の日本人から話しかけられ、香港のマーケットで買っていたマスカットを食べながらお互いの旅話に花が咲いた。2人のおかげで福岡まではあっという間のフライトだった。

日本に帰ったら、HSBCから出された宿題をしっかりとやらなきゃいけない。中国、香港への旅を終えようとして、少し寂しさを感じながらも、残された課題に取り組む闘志が、ふつふつと湧いてきた。

帰国したのはいいものの

福岡空港、今回はめずらしく荷物を開けられることもなく、税関をすんなりと抜けた。

以前、関西国際空港で長い旅から帰国した時はリュックを開けられ、荷物を全部チェックされたのだった。長期間日本から離れていて、パスポートにインドなどの入国スタンプがあるとカバンを開けられてチェックされることが多いようだ。

「怪しい物は何も持ち込んでいませんよ。見ても構いませんけど、これ全部またパッキングするの大変なんですよね」

と言うのだが、

「それは分かりますが、ご協力をお願いします」

との一言。

「みんな、どんな物を持ち込んでくるんですか？ やっぱりドラッグとか、そんなものでしょう？」

暇つぶしに話しかけると意外な答えが返ってきた。

「もちろんドラッグはありますが、最近多いのは亀ですね」

「は？ 亀ですか。なんで亀なんですか？ なにも亀なんか持って来なくても」

話を聞くと亀は、カバンが動いているとじっとしているので持ち込みやすいし、珍しい海外の亀は日本では高くで売れるらしいのだ。動物は検疫なしでは持ち込めないし、そんな珍しい亀はワシントン条約で輸入が禁止されているはずだ。だからその分高くで売れるため、カバンに入れて密輸入する人が絶えないのだと言っていた。

帰国した翌日から早速、HSBCから出された宿題に取りかかった。なんとしても、英語で書いてある請求書を手に入れなければならない。普通の請求書はもちろん日本語で書いてあるので、これを英語で発行してもらうように頼まなくては。

今の時代、日本にも外国人はたくさん住んでいるので、頼めばすぐに発行してくれるだろうとタカをくくっていたのだが、この考えは甘かった。日本という国は思ったほど外国人にやさしい国ではないのだった。

請求書を送ってくるところといえば、電話に電気にクレジット会社、いろいろあるが、まず NTT に電話してみた。ここなら一発で OK が出るだろう。NTT は国際企業だから、英語での請求書の発行を頼んでいる人は沢山いるだろう。ここなら間違いないだろうと思いながら。

「ちょっとお尋ねします、請求書を英文で発行してもらいたいのですが、手続きはどうすればよいのですか？」

英語での発行は当然できるという感じで聞いてみた。

「エイブンですか？ エイブンというと英語で発行するということですか？」

「はい、毎月届きますよね、請求書。それを、全部英語で書いてもらいたいのですが」

「いえ、英語での発行はしていないのですが」

極めて事務的な返事が返ってきた。でもこんなことで負けてはいられない。

「それでは、明細のところは今のままで構わないのですが、住所のところだけでも英語でタイプしてもらえないでしょうか？」

とにかく住所のところが英文が必要なのだ。それ以外は必要ない。

「そのようなサービスは行っておりません」

さらに事務的な返事だった。でもまだまだ負けずにねばる。

「サービスもなにも・・・じゃあ、外国の人たちはどうするんですか？ 日本語の分からない人たちは？ 請求書、理解できないじゃないですか。困るじゃないですか」

日本に住む外国人の代表になったつもりでまだ頑張る。

「そう言われましても・・・請求書の請求欄はともかく、住所を英語で書く必要は無いのではないですか？ ここは日本ですし、日本語で書いてあれば、請求書もちゃんとお手元に届くのではないですか？」

なるほど、おっしゃる通り。NTT は正しい。まったく間違っていない。日本国内で住所をわざわざ英語で書く必要なんてまったくない。

海外からの手紙だって、JAPAN と分かりやすく書いてあれば、日本に着いたあとは日本人が配達するのだから住所は日本語で構わない。あたりまえだ。でも、もう少し頑張っただろう。

「でも NTT は国際電話も使えるでしょう。国際電話といえは基本は英語じゃないですか。住所だけでも英語で書いてくださいよ。お願いしますよ」

自分で言いながらも、これは既に説得になっていないということに気が付いた。こんなやり取りをさらにしばらく続けたが、結局だめだった。NTT には撃沈された。一番大丈夫だろうと思っていたのに。

気を取り直して、次は au に電話した。ケータイはやっぱり au だ。DOCOMO じゃなくてよかった。au は KDDI だから、いけるのではないか。KDDI はもともと国際電話の会社のはずだから、英語の請求書なんてお手のものだろう。NTT はだめだったけど、au なら大丈夫だろう。と自分に都合のよい理屈をつけて電話した。

ここはオペレーターの方がいろいろ問い合わせしてくれて、いけると思ったのだが、結果的にはだめだった。

電力会社に電話した。ここは請求書が郵送ではなく、それ自体に住所が書かれていないため、はなからだめだった。

クレジット会社、保険会社など他に請求書を発行している会社にも電話したが、残念ながら全滅に終わった。

本当に日本って国は外国人に優しくないらしいな。日本語が読めない人たちはどうするんだろう。なんて住みにくい国なんだ。とひとりで文句を言ってみてもどうしようもなかった。英文の請求書くらい、簡単に手に入ると思っていたのに、甘い考えだった。どうやら日本では手に入らないらしい。少なくとも私の契約している会社では。

さてと、どうしたものか？ 現住所、現住所、現住所を証明できるもの。他にアイデアはないだろうか。日本で現住所を証明するもの。

しばらく現住所、現住所、証明、証明、英文、英文、とにかく考えてみた。何か絶対にあるはず。必ずある。必ず。うーん。

だんだん気が滅入ってきた。国際免許証なら一番簡単なのに。どうしてあの時シンセンに持って行かなかったのだろうか。免許センターに行行って発行してもらってさえいれば今ごろは……。今さら考えても仕方なかった。免許センターか、免許センター。免許といえば、運転免許、運転免許を取るには、自動車学校、いや、免許を発行するには戸籍がいるんだったっけ？ いや住民票だったかな？ そうか、住民票といえば、住所を証明するものじゃないか。

あった。一番基本的なもの、住民票だ。住民票なら簡単に手に入る。

なんだ簡単じゃないか。でも住民票は日本語表記だから、このままでは使えない。やっぱり無理か。

住民票を英訳して送ろうか？ いや、それでは証明書にならないからだめだろう。ではどうしよう、他にアイデアはないのか？ まず住民票を英訳して、うーん、それからどうしよう。その英訳した住民票を公的に証明できればよいのではないか。証明できれば。これならいけそう。公的に証明か、公的に・・・、公的証明といえば、公証人合同役場だろうか。考えていてもきりがなし。とにかくここに電話して聞いてみよう。と早速電話をかけた。

「外国の銀行に現住所の証明を出さないといけないのですが、住民票を取って、それを私が英訳しますから、その英訳文を公的に証明する書類というのは作れませんか？」

「住民票の英訳文を証明するのですか？ それは可能だと思いますが」

以外にもすんなりいけそう。

「本当ですか、よかった。できますか？」

「できますけど、証明する書類は、日本語ですよ。この英訳文は日本の住民票を英訳したものに間違いありません。という証明書は書けます。日本語でね。でもそれを銀行が証明書類として受取るかどうか分かりませんがね」

しまった、そうだ、証明書が日本語なら、意味が無いのではないか。
この証明書が読めるくらいなら、最初から住民票で構わないだろう。
この証明書をまた英訳しても、その英訳文をまた公的に証明しないと
いけないのか。

こういうのを、いちごっこと言うんだな。それなら、そうだ、
「では証明書を英語で書いてもらえませんか？」

「英語ですか？ それはちょっと厄介ですね。それにその証明書自
体、銀行が受取らないのではないですか？ 先に確認されたほうがよ
いと思いますよ」

やわらかく断られた。いけると思っていたのに、このままではまず
い。今までの苦労が台無しだ。香港が、ただの観光旅行になってしまう。
う。このままじゃ諦められない。

また振り出しに戻ってしまった。住民票はグッドアイデアだと思っ
たのに。住民票を英語では出してくれないだろうな。そんなの聞いた
ことないし。しかし他に考え付かずに、だめでも仕方ないと市役所に
電話してみた。とにかくもっと情報が必要だった。

「住民票なんですが、英語の住民票なんてないですよ？ 外国の
銀行で使うのですが。英文の住民票なんてないですよ？」

恐る恐る聞いてみた。しばらく待たされたが、電話先の女性が調べ
て教えてくれた。

「それでは、まず普通に住民票を取ってください。次にその住民票をご自分で、英語に翻訳してください。翻訳されたものと、住民票の原本を持って窓口にお越しください。翻訳されたものをきちんと英文でタイプして市長の印鑑をついてお渡しします」

そんなことができたんだ。まさに灯台元暗しだった。こんなことなら、初めから市役所に電話すればよかった。公証人合同役場の人も、それならそうと教えてくれればいいのに。知らなかったのだろうか。

明るい日差しが再び降り注いできた。これならいけるはずだ。なんてったって、市長の印鑑のおまけまで付いてくるなんて。これなら住所を証明する書類として文句ないだろう。

急いで市役所に行き、まず言われた通り普通に住民票を取った。そして、電話で対応してくれた女性を尋ねて窓口に並んだ。市役所の窓口で、こんなにわくわくしながら並んでいる人は他にはいないだろう。順番がやってきて電話の女性に会うことができた。そこには英語訳を書き込むフォーマットもあって、それも準備しておいてくれた。英訳といっても何も難しいものではなく、住民票の記載事項をそのままアルファベットに置き換えるくらいのものであった。これなら簡単だ。その場で書き込み、住民票と一緒に提出した。発行まで数日かかるらしい。あとは、出来上がりを待つだけだ。

念のために国際免許証も申請した。国際免許証は即日交付だった。

何があるか分からないので、少しでもこの待っている時間を有効に使いたかった。

数日後、英文の住民票を手に入れた。これで書類がすべてそろった。しかし英訳の住民票と国際免許証をじっくり見ていると、少し気になることが出てきた。出てきたというよりも、住民票の英訳を書いている時からずっと気になっていた。ひとつは国際免許証と同じく、HSBCが住民票の原本は受け取れない、さらにコピーを送ることはだめだと言いつくすのではないかとということ。

さらにもうひとつ、もっと重要かもしれないと思われること。しかしこればかりは、こちらでは判断できない。聞いてみないと分からない。ぐずぐずしていても、何の解決にもならないので、国際電話をかけて直接聞いてみるしかない。

早速、受話器を取ってHSBCシンセン支店の番号をダイヤルした。緊張感が高まってきた。ダイヤルしながらも、2つの気になることが頭から離れなかった。

ひとくちメモ

- 日本国内で英語での請求書をもらうのは難しい。
- 役所には、英訳の住民票というのがある。

一難去ってまた一難

プープー、プープー、

国際電話特有の呼び出し音が耳に心地良く響く。耳には心地良いが、心臓にはあまりよくない。コール音を重ねる度に緊張が増してきた。電話で英語を話すのは、面と向かって話すことの 10 倍くらい難しいんじゃないだろうか。何故なら、相手の顔は見えないし、ボディランゲージを使えないし、まして紙に書いて説明なんてできないのだから。やっぱり電話はどうも苦手なのだ。

電話がつながった。もちろん中国語での応答だった。

「ニーハオ」とだけ中国語で言って、その後英語で丁寧にこの前の彼女の名前を告げ、彼女を呼び出した。彼女が電話口に出てきて、少し話をしたが、残念ながら忙しいらしく、あとでかけ直してもらうことになった。

話すべき内容を英語で考えて、ドキドキしながら電話を待った。午後 6 時すぎ、ケータイが鳴った。シンセンは午後 5 時だから、一般業務を終えてから、かけ直してくれたのだろうと想像できた。

軽く挨拶して、すぐに本題に入った。まず、公共料金の請求書が手に入らなかったことを告げた。これさえあれば話は簡単だったのだが。

次に念のために国際免許証を取ったこと。そして英文の住民票を取

ったことを説明した。

「レジデンスカードってなんですか？」

と彼女からの質問。何って聞かれても、英訳の住民票にそう書いてあるので、そのまま伝えただけだったのだが、意味が伝わっていないみたいだ。この住民票というものを上手く英語で説明できず、なかなか伝わらなかった。

アメリカに戸籍が無いように、中国にもこのような制度が無いのだろうか。でも 13 億人分の住民票ってあったらすごいだろうな。管理が大変だなと、また余計なことを考えていた。そんなこと考えるくらいなら、上手い説明でも考えろよと自分に言い聞かせる。

仕方がない、こうなったら得意の直訳英語しかないようだ。難しく、かっこよく言おうとするのがいけないんだ。中学校で習った英語でいいんだ。ならば、よし、

「レジデンスカードというのは、私が住んでいるところの市長が、私はここの住所にちゃんと間違いなく住んでいますよ、ということを証明してくれる書類です」

我ながら変な説明だな、かえって分りにくいんじゃないか、もっと上手く話せないものだろうかと思いながら話したのだが、彼女には伝わったようだった。彼女もなかなかの聞き上手だ。

「しかし、この前も言いましたが、銀行としては、そのような重要な

書類をお預かりする訳にはいかないのです」

なんとか伝わったのはよかったが、またこの前聞いた台詞が繰り返された。まあ予想はしていたのだが。

「住民票というのは日本ではコピーではなく、原本を渡すのが普通なんです。そういう書類なんです」

と説得するのだが、やはりHSBCとしては、原本は受け取れないとそこだけは譲ってくれなかった。これはHSBCのポリシーなのだろう。国際免許証もだめ、考えぬいた住民票もだめ。これはちょっと参ったな。どうしたものか。

こんな、この前と変わらないやり取りをしばらくしていたが、最後に彼女から提案があった。

「それなら、国際免許証のコピーと、その住民票のコピーをそれぞれ1枚ずつ送ってもらうというのはどうでしょうか？」

「どうでしょうかって、こっちはぜんぜん構いませんけど、コピーはだめってこの前も言っていたじゃないですか。大丈夫なんですかコピーで？」

「本当はだめですが、先日私がお会いしているので、現住所の証明できる書類を、2種類送ってもらうということで、なんとかなると思います。その2つとも、身分証明としても使えるのでしょうか？」

「もちろん、国際免許証は写真も付いてるし、住民票には国際免許証

と同じ名前、住所、生年月日、家族の名前まで書いてありますから。

この2つがあれば、証明能力も倍になると思いますけど」

ちょっと大げさに言った。

「では、そうしましょう。それで口座の開設を進めましょう」

やったーと喜びたいところだったが、もうひとつだけ、ずっと気になっていたことがある。これも今クリアにしておかないと、あとでまた大変なことになるかもしれない。黙っていても仕方ない。ちゃんと聞いてみよう。

「これで本当に口座作れますか？　ありがとうございます。でも、もうひとつ聞いておかないといけないことがあるんですけど。いいですか？　ちょっと、この前一緒に書いた申込書を見てもらえませんか？」

「今手元にありますが、为什么呢？」

「私の住所のところなんですけど、なんて書いてありますか？　ちょっと読んでもらえませんか？　スペルまで」

「えーと、住所ですね。住所は・・・うえだちょう、UEDA-CHO になっています。U・E・D・A　です」

「・・・やっぱりそうですか。ありがとう」

今まで恐れていたことが現実になった。住民票を英訳した時に、もしかしたらと思っていた。いや、もしかしたらではなく、ほぼ確信していた。UEDA　と書いていたことを。

漢字で書くと、「上田町」なのだが、正確に読むと、「うえだ・ちょう」ではなく、「うえた・ちょう」なのだ。日本語なら濁点が必要ないのだ。UEDA ではなく、UETA と書かなくてはいけなかったのだ。普通の日本人なら 「うえだ」と読むだろう。でも正確には、「うえた」と読むのだ。しかし、なんでよりによって、「うえた」なんだろう。

自分の住んでいる街の名前を正確に知らないなんて、この時ばかりはさすがに自分で自分が嫌になった。ここまで、すべてに於いての計画性のなさ。準備の悪さ。この口座開設だけでも、これで何回目の失態だろうか。何度自分で自分の首を絞めれば気が済むのだろうか、この男は。

ここで言い訳をさせてもらうなら、私たちは約2ヶ月前に上田町に引っ越してきたのだった。そして周りの人がみんな、「うえだちょう」と言っているのを何十回も聞いていた。小学校のころから漢字は苦手だったが、大人になった今でも、改めて漢字の難しさを痛感させられた。

これではたぶん、この前に書いた申込書自体が無効になってしまうのではないだろうか。スペルが違うのだから。今さらHSBCの東京や

大阪の支店に行っても、人民元の口座開設は無理なんじゃないだろうか。このアホさ加減には、さすがに自分でも落ち込んでしまった。でも、とにかくちゃんと話をしよう。このことを黙っていてこのまま手続きしても絶対に途中で、はねられるだろうから。正直に彼女に話そう。やっと心が決まった。

「やっぱり、UEDA ですか？ 実は正確には、 UETA なんですよ。D ではなく、T です。間違えていました。国際免許証にも住民票にもそう書いてあります。どうしましょう？」

「え、スペルが違うんですか？ つまり住所が間違っているということですか？・・・」

沈黙・・・・・・・・

「でもですね、漢字では同じなんですよ。ただ発音の問題で、中国も漢字を使うから分かるでしょう。音の違いだけなんですよ。音の」
我ながら、すばらしい言い訳だ。

「しかし、手続きはすべて書面ですから、音ではありません。申請してある住所が現住所を証明する書類と違っていれば、書類は無効になってしまいますよね。困りましたね。どうしましょう？」

確かに、おっしゃる通り。100 パーセント、私のミス。誰のせいでもない。すべて私の責任。

沈黙・・・・・・・・

彼女があきれていることが電話線を通して、はるか遠く離れた中国から伝わってくる。痛いくらいにジンジンと。でもこんなことでは諦められない。

市役所に行って、特別に UEDA に打ち直してもらおうかな。いや、それは絶対無理だろう。国際免許証もだめだろうな。

HSBCに送るのはコピーだから、ちょっとだけ書き直そうか、一文字だけだし。さすがにHSBCもそこまでは調べないだろう。でもこれって公文書偽造とかになるのかな。そんなことまで考えた。やはり、偽造はルール違反だな。やっぱり直球勝負しかない。直球勝負でいこう。

「よし、いいこと思いついた。口座の申込書、白紙のやつ送ってもらうというのはできませんか？ 送ってもらえれば、今度こそ間違いなく記入して、国際免許証と住民票のコピーを添えて、送り返します。今度こそ間違えないようにきちんと書きますから。どうでしょうか？ なんとかありませんか？ お願いしますよ」

こいつはまだ懲りていない。しかも、別にいいことを思いついた訳でもない。本当にただの直球だ。

「しかし、そうすると次はサインの問題が。口座開設の場合、目の前でサインをしてもらわないといけません。他の人のサインでは困りますし」

日本では印鑑、あちらではサインが最も重要なものである。それは充分承知している。でも、どうにかしなくては。

「この前、あなたの前でサインしたのがあるじゃないですか。それと見比べれば分かるでしょう、同じサインかどうか。それに、どうせ日本円普通預金口座から、人民元普通預金口座に振替える時は、必要事項を書いてサインした紙を郵送で日本から送るんでしょう。それなら同じことじゃないですか」

まさに最後の力を振りしぼって投げた直球だった。

「確かにそうですよね。こちらにこの前もらったサインはありますし。それと見比べればよいことですもんね。そうですね。なんとかなるかもしれませんね。では少し時間をください。またかけなおします」

電話が切れた。なんか状況は良くなっている。これならいけるんじゃないか。でも、もうくたくただ。もうこれ以上投げられない。まさか他に重大なミスは無いだろうな。だんだん自分で自分が信じられなくなってきた。

(ひとくちメモ)

●口座開設の申込においてスペルのミスは致命的。(当然だ!)

大いなる勘違い

「ハロー、HSBCシンセン支店からですが、先ほどの話の続きではないのですが、少し別の話をしてもよろしいですか？」

さっきの電話から、しばらくしての彼女からの電話だった。また改まってなんだろう、別の話って。まったく想像も付かなかったが、彼女の声も明るいし、その話しぶりからすると悪い話ではなさそうな気がした。

「この前こちらにいらっしゃった時、最初に外貨預金口座の話をさせてもらったのですが、覚えていらっしゃいますか？」

「外貨預金口座ですか？ マルチカレンシーアカウントですよ。マルチカレンシーアカウントに日本円普通預金口座を作って、という話でしょう？」

「そうです、その話です。その外貨預金口座の件ですが、今回マルチカレンシーアカウントではなくて、プレミアムアカウントのほうはいかがですか？ プレミアムアカウントならサービスもずっと上ですし、お得だと思いますが、いかがでしょうか？」

確かにサービスがよいとは聞いたけど、いかがですか？ と聞かれてもな、40 万元も預金できないし。40 万元以上の預金残高が必要と聞いて、ひいてしまって、サービス内容などほとんど聞き流してい

て一切頭に入っていない。相づちを打つのだけほうまいので、ちゃんと理解していると思ったのだろうか。この話がどういう方向に向かっているのか見当も付かなかった。

「いかがですかと聞かれても、プレミアムアカウントは預金残高が確か 40 万元以上必要だったんじゃないですか？ 40 万元といえば大金ですよ」

「ええ、もちろんです。ですから最初はマルチカレンシーアカウントを作っていて、もし残高が 40 万元以上になった場合はプレミアムアカウントに切替えていただくというのはいかがですか？」

そんな 40 万元以上になるなんてあり得ないよ。可能性はほぼ 0 パーセント。だけど、もし宝くじが当たればそれもアリだな。

「もし、もしですよ、将来的にそうなれば、プレミアムアカウントのほうがいろんな面で有利だし、切替えるのは構いませんけど。いかがですかと聞かれても、どうすればよいのですか？」

「よかった、それでは書類を送りますので、サインして送り返してください」

彼女も何を焦っているのだろうか。

「ちょっと、それじゃ分らないから、ちゃんと説明してくださいよ。どういうことですか？ 何の書類ですか？」

「あ、そうですね、すみません。では先ほどの話に戻りますが、まず

マルチカレンシーアカウントの申込用紙を白紙で送ります、それから・・・」

「ほんとに、いいんですか？」

彼女の話の遮って、つい言ってしまった。間違いなく話はよい方向に
いっている。口座開設はいけそうだ。

「はい、申込用紙を白紙で送りますから、今度は間違いのないように
記入して、サインして下さい。それと国際免許証と住民票のコピーも
忘れないようにしてください。ここまではさっきの話ですが。それと
もう1枚、書類を送りますから、そちらにもサインして一緒に送り返
して下さい」

「では口座は作れるんですね。ありがとう。でもそれは何の書類なん
ですか？　そこが知りたいんですよ」

「もう1枚の書類は、プレミアムアカウントの申込用紙です。まずマ
ルチカレンシーアカウントの口座を作りますけど、もし将来的に預金
残高が40万円を超えた場合、マルチカレンシーアカウントからプレ
ミアムアカウントに、こちらで変更してもよいという承諾書です。も
ちろん40万円を超えなければ、マルチカレンシーアカウントのまま
ということになります。どちらにしても、これなら将来的に見ても、
お客様に有利だと思いますけど」

何かと思えば、そんないい話か。断る理由は何処にもない。でもそ

んなにお金持っていないけど、構わないのだろうか。HSBCに行った時もまったく金持ちになんて見えなかったはずだけど。香港はもちろん、シンセンの街でも、その辺を歩いている人たちより、私のほうがよっぽど貧しい中国人に見えたはずなのだが。ちょっとおかしい。

しかし、シンセンでの出来事をいろいろと考えてみると、ひとつ思い当たることがあった。それはHSBCで彼女から日本円普通預金口座から人民元普通預金口座に振替をするという説明を聞いていた時のことだ。

この振替には限度額があり、1度に10,000米ドル相当分で、約1ヶ月に1度しかできないと聞いた時に、彼女にボソッとやったことを思い出した。

「そんなこと知らなかったな。困ったな、いつから決まったの？ 1ヶ月に1度だけ？ 1回に10,000ドルしかできないのだったら振替えるのに何ヶ月かかるかな。切り上げに間に合うかな。でも決まったのなら仕方ないですね」

10,000米ドルを日本円にすると約120万円なのだが、この時私は約12万円と勘違いしていたのだった。1ヶ月に12万円だったら、100万円を振替えるにしても半年以上もかかるのか。これは参ったな。と、その時は思ったのだ。

HSBCを出たあとで10,000ドルは約120万円だということに気付

き、もし100万円を振替えるにしても、1回の振替で終わるじゃないか、それなら限度額は考えなくていいな。とひとりで思ったのだった。英語での数字の勘違いをしていたのだ。ゆっくりと考えれば分かるのだが、話がどんどん進む中で、英語で大きい数字を考えるのはやっぱり、ちょっとややこしかったのだ。

たぶん彼女はこの話を覚えていて、私がプレミアムアカウントの最低残高の40万元くらいは軽く持っていると思ったのではないだろうか。あれがもし、「ハッター」だったらあんなに堂々とは言えなかったはずだ。本当に、単なる勘違いだったのだから。桁を一桁間違えるという自分の勘違いに、その時はまったく気付いていなかったのも、あのよう思ったことが、ごく自然に口から出たのだった。

後に読んだ、苔米地英人先生の著書、「脳と心の洗い方」にこう書いてあった。

「ハッター」と「勘違い」の差は自分自身もだまされているということ。「ハッター」をやっているかどうかは、自分が一番知っているわけですから、自分はだませない。だから、ダメです。

でも、「勘違い」は自分自身もだまされている状態です。だから、効くし、多くの人を巻き込むことができます。

「ハッター」というのは単なるウソだから必ず破綻します。しかし、

「勘違い」は死ぬまで勘違いが続けば絶対破綻しません。

だから皆さんには「大いなる勘違い」をしてほしいのです。そうすれば、現実が必ずついてくるからです。

この本は自己洗脳の本で、自分自身に勘違いをすることで、無意識レベル（潜在意識）まで決心して願いをかなえようというような内容の本だった。

この本をたまたま読んだ時に、同じようなことがあの時、私にも起こっていたのだと不思議な気持ちになったのだった。

勘違いといえどもうひとつ、とんでもない勘違いをしたことがあった。それもやはり英語での勘違いだ。

あれは私がニュージーランドで羊飼いの仕事を始める前なので、英語がまだあまり理解できなかったころ、オークランドという街でフラット（アパート）をシェアして借りていた。あちらではひとつのアパートを何人かで借りて一緒に住むルームシェアが一般的である。

その時私は、 ケニアからの留学生とこの部屋を借りていた。

夜、ひとりでビールを片手に、なんとなくテレビを見ていた。なにか動物が出ているような番組だった。すると突然臨時ニュースが入ってきた。何か大変なことが起こったようだ。気になって見ていると、

隕石が何処かに落ちたらしい。ニュースキャスターも忙しそうに情報を読み上げている。アメリカのNASAからも情報が入ってくる。そうしているうちに、隕石が今度は北京に落ちた。さらにロンドンとニューヨークにも落ちた。世界中からパニックになった映像が送られてくる。おいおい大丈夫かよ日本は。北京、ロンドン、ニューヨークといえば世界三大都市じゃないか。北半球は大変なことになっていた。そのままニュースを見ていたが、コマーシャルになった。慌てて他のチャンネルに変えたが、他の局はそのニュースを放送していなかった。コマーシャルの間に外に出て周りを見回したが、辺りは平和そのものだった。まったくキウィ（ニュージーランド人）は呑気なもんだ。さすがキウィだな、こんな非常事態だというのに。ニュージーランドは南半球だから平和だな。

再びニュースが始まり、ずっとテレビの前に張りついて見ていた。地球は大丈夫なのだろうか。もしかしたら、この世の終わりなんじゃないかなんて本気で思っていた。その年は、まさに世紀末、1999年、あのことろ話題だったノストラダムスの大予言の年だったのだ。

NASAからの映像が入り、レポーターが隕石の動きを捉えたレーダーを見て絶叫している。その後、ニュースのスタジオがNASAのレポーターを呼び出すが返事が無い。カメラがそのレーダー画面を映すと、無数の隕石が、地球のありとあらゆる場所に向かってきていた。スタ

ジオからもアナウンサーの悲鳴が聞こえてきた。そこで画面が真っ暗になった。これは本当にやばいよ、私も真っ青になった時、画面からスクロールが現れた。

それはただの映画だった。私は呆然となった。本当のニュースだと心から信じて、まったく疑っていなかったのだ。100パーセントの勘違い。しかも三流映画だったため、有名な俳優はひとりも出ていなかったのがさらにリアルだった。完全に騙されたと思ったがテレビに文句を言う訳にもいかず、ひとりで大笑いした。あとで思えば、北京からの映像で時差を考えれば分かったはずだ。映像では昼だった。しかし完全に信じ込んでいたので、まったく気付かなかった。世界中で、この映画を一番楽しんだのは間違いなく私だろう。よく理解できない英語を2時間近くも必死に聞き取ろうとして、くたくたに疲れたのだが、その分いつもよりもずっと英語を理解できていたことに自分でも驚いた。

このようにとにかく、何らかの勘違いをして、それを自分で完全に信じ込んでいれば、それなりの行動を無意識でしてしまうということなのだろう。これが苔米地先生の言う、「完全に自分自身もだまされている勘違い」のよい例だろう。

10,000 ドルを約 12 万円という自分に有利になる勘違いを無意識でしたことが、今回は口座開設にも、吉と出たのだった。

いずれにせよ、HSBCとしても、口座の数を増やすのはもちろんのこと、プレミアムアカウントの客、いわば上客をたくさん作りたいはずだ。プレミアムアカウントの客を何人持っているかも営業成績に関わってくるはずだ。預金を集めるのが、銀行の仕事のひとつなのだから。

しかしHSBC側は私が訪ねて行った時に、プレミアムアカウントに変更する承諾書を書いてもらうのを忘れたのではないだろうか。つまりプレミアムアカウントを作れるだけの資金を持っていそうな客を、ひとり逃しつつある、ということではないか。

そうは思いたくないが、いやらしく考えるなら、もし私があの勘違いをしていなければ、ここまで親切にしてくれなかったのではないか。現住所を証明する書類が無い時点で、口座開設を断られても仕方ないのだから。こんなに間違いが多くて、手のかかる面倒くさい客もそんなにはいないだろう。

私としては、なんとか口座を開きたい。HSBCとしては、口座を開かせて、将来的にはプレミアムアカウントに切替えさせたい。という両方の思惑が重なったのではないか。そのように推測できた。とにかく、これで上手くいきそうだから、本当の理由はこの際どうでもよい。

でも、このいやらしい考えは彼女に対して、とても失礼だと感じてしまった。もちろん自分でもこの考えに賛成したくはなかった。

こんなに深読みせずに普通にありがとうと言えたら、どんなによかっただろう。こんなことを考えながらも電話での会話は進行中だった。

「そんなことができるんですか？ それはすごく便利ですね。こっちも助かります。では早速、口座の申込書と、プレミアムアカウントの承諾書を送ってください。今度こそ間違えないように書いて、国際免許証と住民票のコピーと一緒に、すぐに送り返しますよ」

半分諦めていたが、白紙の書類を送ってもらえるようになり、はれて口座開設ができる運びとなった。

彼女にきちんとお礼を言い、受話器を置いた。必要のないことまで考えて、少し空しさが残ったが、念願の口座開設に期待が膨らんでいて、すぐにそんなことは忘れてしまった。あとは書類を待つだけ。書類さえ来ればすべて上手くいく。1日でも早く書類が届くことを願うしかなかった。

ひとくちメモ

- 勘違いも、たまには役に立つ。
- あきらめないことは大切。

待てど暮らせど

あの電話から1週間が過ぎたが、書類はまだ届かなかった。中国からの郵便だと1週間もあれば充分だろうと思っていたのだが。

国際免許証のコピーも住民票のコピーもすべて準備は整っていた。書類が届くのを今日か明日かと、自宅のポストをチェックする日々が続いた。

そうか彼女も忙しくて、書類を揃えるのに時間がかかって、送るのが少し遅れたんだろう。あまり急がすのも悪いし、もう少し待ってみよう。早く書きたいな、あの書類。

ポストを毎日チェックするが、さらに1週間が過ぎた。ちょっと遅すぎないかい。まさか彼女宛先に、UEDA-CHO って書いて送ったんじゃないだろうか。ちゃんと、UETA-CHO って電話で何回も伝えたはずなのに。いや、でも日本の郵便局はそれくらいの間違いは、気付くだろう。それに郵便番号も伝えてあるし。送っていれば届くはずだ。電話してみようか。いや待て、何か事情があるはずだ。彼女は、はっきり送ると言っていたんだし、もうちょっと信じて待ってみよう。

そうしているうちに、3週間が過ぎた。ポストを見るのが楽しみから、苦しみになってきた。おい、書類ちゃんと送ってくれた？ あの電話での話はなんだったの？ プレミアムアカウントの話は？

まさかあんなにかわいい顔してウソはつかないだろう。でも実は期待を持たせて裏切って、今ごろ楽しんでいたりして。本当はシンセンでの反日デモに参加して日本の国旗に火をつけていたりして。まさかな、もしそうだとすると、反日感情とビジネスは切り離して考えようよ。

悪いことばかりが頭をよぎってしまう。だんだんと焦りがピークに近づいてきた。こう見えても私は実はシャイで、電話での催促がなかなかできずにいた。

彼女は送りますって確かに言ったよな。他に何か言っていたかな。何か条件とか。いや、どうだったかな。今度は自分の耳と、英語のヒアリング力を疑ってしまう。

こんな、悶々とした日々をさらに1週間過ごした。もう限界だ。もう我慢できん。今日帰ったら電話をかけて本当に送ったのか確認しよう。もうそれしかない。でもなんて言おうか、やっぱりさりげなく聞こうか。いやそんなに、かっこつけてもだめだ、ちゃんと聞こう。やっと電話で問い合わせる決心を固め自宅へ向かった。

その日帰宅してポストを見ると、なにやら見慣れない封筒が入っていた。封筒にはHSBCの文字。

つ、ついに来た。この日、2005年5月23日（月曜日）。帰国したのが4月19日だったから、あれから、既に1ヶ月以上が過ぎていた。本当に長かった。

あの電話からも4週間。どうしてこんなに時間がかかるのか理解できなかった。しかし封筒の消印を見てすべてが納得できた。消印は、電話で話した日の翌日のものだった。電話で話したのが夕方だったのだが、彼女は書類を揃え、次の日には投函してくれていたのだった。

ということは郵便事情としか考えられない。中国から1ヶ月。船便でもそんなにかからないはず。やはり日中関係の悪化で、郵便に支障が出たとしか考えられなかった。彼女のほうもこちらから書類が返ってこないで、心配してくれていたかもしれない。待っていてよかった。いろいろ疑ってしまっただごめんなさい。

さっきまでしょぼくれていたのに、俄然元気が出てきた。すぐに開封し中身をチェックした。申込書の他に彼女からのメモが入っていた。

「この2つの書類に今回は間違いなく記入して、サインして、国際免許証と住民票のコピーを添えて私宛に送ってください。念のため、ここに私の名刺を入れておきますので、これも同封してください。これで私の手元に届くはずですよ。

PS. 今度は間違えないでくださいね」

PS. とあるので何かを期待したが、今度は間違えないでくださいね、だった。おっしゃる通り。気を付けます。もう絶対に間違えません。

申込書のすべてに記入し、3回チェックし、最後にサインした。彼女への手紙を書いて封筒と一緒に入れた。手紙にはこう綴った。

「送ってもらった申込書、ずっと待っていたのですが、なかなか届かなくて心配しました。でもあなたは電話の翌日にはちゃんと投函してくれたのですね。ありがとう。急いで送り返しますので、できるだけ早く、口座開設をお願いします。口座ができしだい、こちらから日本円を送金します。インターネットバンキングとテレフォンバンキングも早く使いたいです。口座ができたら、また連絡をください」

と書き、サインと日付を入れた。さすがに **WITH LOVE** と書くのはやめておいた。当たり前だけど、こんな下手クソな文章でも一応はビジネスメールになるのだろうから。昔習ったことを思い出し、辞書でスペルを確認して、**SINCERELY** とかっこよく締めくくった。

翌日、郵便局より **EMS** 便（早くて安全で確実な書留のような国際郵便）で送った。900 円也。ちょっと高いが、これは安心料としか言いようがない。この書類が届かなければまた、振り出しに戻ってしまう。

郵便局で尋ねると、中国まで **EMS** 便なら通常 3 日くらいで届くらしいが、今は日中関係が少し複雑なので、はっきりしたことは言えないと言われた。**EMS** 便でこれだから、普通のエアメールなんてとんでもなく時間がかかりそうだ。中国から送ってもらった書類が届くのにかかる時間はかかったはずだ。とりあえず、きちんと届いただけでもよかったと思うことにしよう。とにかく今回は、早く確実に届いてくれと

願うだけだった。

できることなら、再び飛行機に飛び乗り、自分でシンセンまで持って行きたいくらいだった。

ひとくちメモ

●国外への重要な書類の送付は必ず EMS 便で！

口座開設ついに完了

2005 年 5 月 27 日（金曜日）。ケータイが鳴った。もう既に聞き慣れた声だった。

「ハロー、HSBCシンセン支店からです。口座開設の件ですが、先ほどすべて完了しました。もう口座使えるようになりましたよ」

思ったよりずっと早かった。書類を送ったのが 5 月 24 日（火曜日）だったので、あれから 3 日しか経っていない。今までと比べたら格段に早い。

「本当ですか、ありがとうございます。早かったですね。思っていたよりずっと」

その連絡を受けてから、ファックスを 2 枚受け取った。1 枚目はマルチカレンシーアカウントの日本円普通預金口座の明細。そして 2 枚目が人民元普通預金口座の明細。それぞれに名前や住所、口座番号が書いてある。開設日は今日 5 月 27 日になっていた。本当に今日できたものだ。彼女は開設当日に電話をくれたのだった。

ファックスを確認したあと、再び電話が来た。

「送金する時は必ず、1 枚目の日本円普通預金口座のほうに日本円で送金してください。くれぐれも間違えないようにしてくださいね。その後、先日お渡しした、専用の用紙で人民元普通預金口座に振替えてく

ださい」

私が間違うことが前提になってしまったのだろうか。今まであれだけの間違いがあれば、それもしょうがないけど。彼女も心配してくれているんだな。彼女の仕事をこれ以上増やさないようにしてあげないと本当にバチが当たるかもしれない。

「大丈夫です。もう間違えないようにします。今まで本当にありがとうございます。今思えばシンセンに行った時、国際免許証さえ持って行っていれば、すぐに口座が作れていたのに。それにそのあとに住所も間違っていたし。でもあなたが、親身になって手伝ってくれたのでやっと口座が作れました。本当にありがとう」

心からそう思えた。彼女に何かお礼がしたいと思った。中国にはチップの習慣は無いと思うけど、その場にいればチップでお礼ができるのだが、とも思った。自分からチップをあげたいと思ったのは、これが初めてだった。今までは海外でもチップは義理であげていただけだった。

彼女の預金口座番号を聞いて、振り込むというのも失礼な話だろう。銀行振り込みのチップなんて聞いたこともない。

「何かお礼がしたいのですが。なにしろ遠いので・・・」

「いえ、私は仕事として、お役に立てればそれでよいのです。そんなこと考えないでください」

なんてうれしいことを言ってくれるのだろうか。思わず惚れ直してしまった。今まで、こんなに親切な中国人に私は会ったことがない。

いや、そんなこともない。他にも、とても親切にしてくれた人がいた。あれは初めて中国を訪れた時の初日だった。日曜日だったこともあり、銀行での両替ができなかった。仕方なく、ヤミの両替商で少しでも両替をしたのだった。食事に行った時には、手持ちの人民元がほとんどなかった。入った食堂で、ちゃんと計算して注文したつもりだったが、支払いの時、お金が足りなかった。米ドルや日本円は持っていたが、街の小さな食堂だったので受け取ってくれるはずもなく、困ってしまったことがあった。

「すみませんが、今日は手持ちがこれだけしかないので、残りは明日必ず払いに来ます」

という意味のことを下手な筆談とジェスチャーで話したその食堂の女の子を思い出した。通じたのか通じなかったのか、よく分からなかったが、その日は手持ちの人民元を払っただけで「シェイシェイ」と言って帰してくれた。下手すれば公安（警察）を呼ばれそうなものだが。もちろん翌日、約束通りにお金を払いに行って食事をした。その時にも笑顔で迎えてくれて、さらに頼んでもいないのに水餃子の入った小鉢を出してくれたのだった。その子も優しかった。親切な中国人に会

ったことがないなんて失礼だった。

それにしても今回は、彼女が担当してくれて本当によかった。別の人だったらシンセンの時点で終わっていたかもしれない。今まで私の中で中国人のイメージは、決してよいものではなかったのだが、今回ばかりは彼女がその偏見を覆してくれた。そのことにも、お礼が言いたいと思った。

こうなればお礼になるかは分からないが、今は無理でも、将来本当にプレミアムアカウントの預金者になってやろうか。よし、もっと頑張ってもっと稼げる男になろう。と私のやる気まで引き出してくれたような気がした。

彼女に最上級のお礼を言って最後の電話を切った。

口座開設、本来ならとっくに終わっていたはずなのだが、長い時間かかってようやく終わった。ここまで長い道のりだった。でもここで安心してはいられない。まだステップは2つ残っている。

まず、日本の銀行からHSBCの日本円の口座に日本円を送金すること。そして最終段階として、日本円普通預金口座から、人民元普通預金口座にお金を振替えること。これでやっと人民元投資が始められる。今はまだスタートラインにさえ立っていないのだ。

さあ、まだまだやるべきことが残っている。ここまで来たのだから

一気に片付けてしまおう。

お願いだから、まだ切り上げなんてしないでよ。もう少しだから。

頼むから、まだ、動かないで、じっとしていてくれ。

中国への送金

HSBCに口座の申込書を送る前から、送金に関しての調べは付けてあった。地元の地方銀行に勤めている知り合いに、いろいろと聞いていたのだ。この銀行員のおばちゃんにはだいぶ前から、人民元投資について熱く語っていて、金融のプロとしていろんなアドバイスをしてもらっていた。

他にもこのおばちゃんは長年太極拳をしているので、そのついで、中国人の知り合いに中国での口座開設について聞いてくれていた。しかし、中国人といっても一般人なので、外国人の口座開設については詳しく知らなかった。それと人民元投資に関しても、有力な情報は得られなかった。それくらいマイナーな投資なのだろうか。

「情報は少ないけど頑張ってやってみるといいよ、応援するからね」と言ってくれていた。

送金についての詳しいことは、外貨担当の人に聞いていろいろ調べてくれた。そこの地方銀行から送ると手数料が高いので、近くの都市銀行がよいと教えてくれた。そこの地方銀行に頼んでも、結局送金は都市銀行に依頼するということだった。もちろんその分、手数料も高い。

口座ができた 5 月 27 日（金曜日）から、土曜、日曜が明けて、5 月 30 日（月曜日）、その都市銀行に行った。今日、中国へ向けて送金を実行する。いよいよこの日が実際にお金を動かす日になる。

一般業務をしている 1 階のフロアーを通り抜け、外国為替や海外への送金などを扱う 2 階のフロアーへ向かう。一般客で混み合う 1 階のフロアーと違い、2 階には客の姿はまばらだった。1 階と 2 階では客層がぜんぜん違っていた。

私がそこにいるのは、まさに場違いのようだった。格好からしてこのフロアーにいる人たちと私では、まったく別に見えた。他の客といえば、ビシッとスーツを着たビジネスマンや社長風の紳士、それにお金持ち風のご婦人などだった。さすがに都市銀行の 2 階フロアーは私みたいにラフな格好の客はひとりもいなかった。

私は、海外へ送金するような客には、とうてい見えなかっただろう。しかもそれが投資目的のためだとは、誰も想像すらしなかったはずだ。しかし、この見た目とのギャップが面白い。

学生時代、紀伊国屋書店に行った時のことを思い出した。大学の憲法の講義で使う本を探していたのだが、その本を見つけることができずに、お店の人に尋ねた。

「すみません、〇〇出版の『憲法と天皇制』という本は何処にありま

すか？」

若い女性店員は 「えっ」 とびっくりした様子で笑いながら場所を教えてくれた。お礼を言ってその場を離れたが、振り返るとまだ笑っていた。そして、もう 1 度その場所を指差してくれた。

「なんであんなに笑うんだろうか？ そんなにおかしいか？ 『憲法と天皇制』 って」と一緒にいた友達に聞くと、

「いやいや、本じゃなくて、お前がそんな格好で『憲法と天皇制』なんて言うからおかしいんだろう。そのギャップが」

と友達も笑っていた。確かにその日の私は、短パンにビーチサンダル、タンクトップに麦わら帽子、という格好だった。海に行った帰りに本屋に寄ったのだから、こんなもんだろうが。

「だから、そんな格好で『憲法と天皇制』は何処ですかって聞くのがおかしいよ。たぶん、釣りとかキャンプとか、そんなジャンルの本の場所を聞かれると思ったんじゃないか。それがよりによって、『憲法と天皇制』だもんな、そりゃおかしいよ」

まさにそんな感じで都市銀行の 2 階フロアーにたたずむ私であった。学生時代を思い出し、ひとりでニヤニヤしているうちに、たいして待たされることもなく担当の女性の席に呼ばれた。しーんと静まり返ったフロアーで話が始まった。

「中国の銀行に送金したいのですが、手続きはどのようにすればよいのですか？」

早速、本題に入った。

「送金先の銀行名、口座の名義、口座番号などを教えてください。中国への送金ですから、日本円を人民元に両替して送金いたします。そのほうが、あちらの銀行も受け入れがしやすいと思います」

日本で人民元に両替してから送金したら、絶対にレートが良くないだろう。それに両替手数料も取られるはずだ。せっかくの投資なんだから、少しでも有利になるようにしたい。手数料を少しでも安くあげるために調べてこの銀行に来たのだから。わざわざHSBCで日本円普通預金口座も開いたのだし、日本円のままで送金しなければ意味が無い。

「いえ、人民元に両替せずに、日本円のままで送金をお願いします。中国の銀行に日本円の預金口座がありますから、そこに送金して中国で両替するようにします」

人民元に両替してから送金するという銀行側の提案をきっぱりと断った。

「かしこまりました。人民元に替えずに日本円のままでの送金ですね。では、そのように致します」

この都市銀行側からすれば、日本円で送金すると送金手数料しか取

れないからだろう。人民元に両替してから送金すれば、送金手数料と両替手数料も取れるのだ。だから、人民元に両替してから送金したいのだ。しかし、こんな簡単なトラップに引っかかってはいけない。こっちはきちんと予習しているからな。

「それでは、この用紙に送金先の銀行名、支店名、口座番号、振込先のお名前、送金金額を書いてください」

日本円のまま送金しても送金手数料は、1回につき、5,500円だった。これも調べて知っていたのだが、やっぱり高い。10万円送ろうが、100万円送ろうが、同じ5,500円である。

振込先にHSBC、シンセン支店、そして口座番号と、自分の名前を書いた。担当の女性がそれらを見て、

「ご本人様名義の口座に送金されるのですか？ 他の方の口座ではなく、ご自分の口座なのですか？」

まるで、また間違いを書いてしまったかのように、その女性から指摘された。

「はい、私の口座です。間違いありませんよ。私の口座に、私が自分で送金するんです」

一般的には、海外に留学している子供に親が送金したりするのだろう。だから自分の口座に自分で送金するのは、ちょっとおかしく見えたのかもしれない。

「ご自分の口座宛に、ご自分で送金することの目的はなんですか？
現在海外への送金はいろいろと規制がありまして、目的などをお聞きしてからでないと送金できないようになっています」

2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ以来、海外送金が厳しくなっていたのは知っていた。テロの資金として使われないかとか、よからぬことに使われないかとの理由だと思うのだが。特にこういう普通とちょっと違った送金方法の場合は、やはり目的を聞かれるようだ。それ以外にも、こういう海外への送金はマネーロンダリング（資金洗浄、違法に儲けたお金を海外の口座に預金し、その、でどころを分からなくする違法行為）の可能性も否定できないからだろう。

「実はですね、将来中国に留学しようと思っていて、その資金を今のうちに中国の銀行に預金しておきたいのです。そのために先日中国に行って口座を作ってきたところです。日本でお金を持っていると、あれこれ使ってしまうじゃないですか。だから無駄遣いしないように中国の銀行に預けておきたいのです」

いかにも、もっともらしいことを答えた。しかし、どうしても納得してくれなかった。何がそんなに気に入らないのだろうか、自分のお金を自分の口座に送金するだけなのに。そのくらい海外に送金するということに世界中が敏感になっているのだろう。そこからなかなか話が進まないで、最終的に本当のことを話した。

「分かりました。そんなに聞かれるなら、本当のことを話します。本当の目的は人民元の切り上げを狙った投資のためです。人民元の切り上げがそろそろ迫ってきていると思うので、その前に人民元を手に入れる手段として、先日中国で口座を作ってきたのです。この送金が最終段階なのです。だからレートの悪い日本で両替することなく、日本円のままで送金したいのです」

担当の女性は、鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしていた。

「そんな投資があるのですか？ 初めて聞きました。もう少し詳しく教えてもらえませんか？」

ここからちょっと自慢げに話し始めた。まるで自分の研究成果を披露するかのように。もちろん今までの度重なる失敗談はかっこ悪くて、さすがに言わなかったが。それにこの担当の女性は海外送金の仕事をしているプロだから、そのプロの意見を聞いてみたかったというのが本音かもしれない。

「人民元切り上げの声が、アメリカを中心とする世界各国で上がっているのはご存知ですか？」

「ええ、それは聞いたことがあります。為替レートが低すぎるということでしょう。人民元は固定相場制で、その低いレートで固定されていますものね」

という話から始まり、今回の投資の背景をひと通り説明した。

「なるほど、そういうことなんですね。人民元投資って。でも本当に儲かるんですか？」

「それを言っちゃおしまいでしょう。儲かるつもりでやってるんですから。投資なんてそんなものじゃないですか？ 私も初めてだから、よく分かりませんが。まあ、楽しみにしてくださいよ」

「そうですね、今日から人民元の動きを見ておきます。人民元なんて今まで、まったく気にしていませんでしたから。レートがほとんど動かないですからね」

やっと納得してくれたようだった。

「他にも中国に送金している人は多いんじゃないですか？ 私と同じ目的で。たぶん、たくさんいらっしゃると思いますよ」

「いえ、お客様が初めてです。他には、いらっしゃると思いますよ。中国への送金自体がそんなに多い訳ではないですから」

「いやいや、みんなやってますって、本当の理由を言ってないだけだと思いますよ。いくら田舎だとはいえ、他にもけっこういるはずですよ。だってこんなチャンスめったにないし、私が気付いたくらいだから。みんな本当の目的を言わずに上手くやってるだけです。同僚の方たちにも聞いてみてくださいよ。海外送金の担当だったら、一番情報が早いじゃないですか。日本から人民元口座を作るためのツアーも出てるし、現地で通訳をつけて、一緒に銀行に行くというサービスだ

ってあるんですよ。けっこう手数料は高いらしいけど」

と私もいつになく饒舌だった。

「そんなツアーまであるんですか、ぜんぜん知りませんでした。同僚にも聞いてみます。今日はいろいろ教えていただいて、ありがとうございました」

とお礼まで言われた。このあと、送金がスムーズにできたのは言うまでもない。

今まで頑張って貯めた虎の子のお金、120万円を送金することに成功した。HSBCの口座に振り込まれるまで、2～3日かかるらしい。すべて順調だ。これが普通なんだろうけど、ミスが無いと本当に楽チンだ。

120万円という大金を、初めて投資目的で動かしたことで、なんだか自分が本当の投資家になったような気がした。

ひとくちメモ

- 送金手数料も銀行によって違うのできちんと調べる。
- 銀行に知り合いがいるととても有利。
- 外国への送金は、かなり厳しい。

ファイナルミッション

HSBCから1通の手紙が届いた。都市銀行から送金して1週間後のことだった。開けてみると、インターネットバンキングとテレフォンバンキングの開設状況の連絡だった。テレフォンバンキングはもう使えるようになっていた。インターネットバンキングは最初のパスワードが発行されていないのでまだ使えない。手紙の日付は5月30日となっていた。

翌日、また手紙が届いた。今回は2通同時に届いた。日付は5月31日。

まず1通目、日本円普通預金口座に、HSBC側の手数料、717円を引いた1,199,283円の残高が記入されていた。

日本からの送金が無事に完了した。でも正直に言うと、この送金のプロセスが今までで一番心配だった。何故なら、今までは香港に行ったり、書類を作ったり、国際電話で話したりと長い道のりではあったが、実際にはお金を動かしていない。もちろん香港行きの旅費は使ったが、あれは旅でもあり、直接的に使ったお金だから気にならないのだ。しかし今回は、虎の子の大金を初めて銀行から動かした。万が一なんらかの不都合で入金されなかったら、全額パーになってしまう。そんなことは、まずあり得ないのだろうが、こんな大きなお金を動か

したことが今までなかったのだから、そう思うのも無理は無い。だからこの報告書を見た時には、ホッと胸を撫で下ろした。日本の銀行のように預金通帳があって、残高が書かれていれば分かりやすいのだが、銀行から届くこんな紙切れ1枚で見なきゃならないのは変な気がする。インターネットバンキングが使えるようになれば、パソコンの画面でも見られるはずなのだが。

入金されたのが5月31日ということは、送金の翌日には入金できたということだ。1日なんてすさまじく早く感じた。私が日本からHSBCのシンセン支店に直接行くより、よっぽど早い。あたりまえだが。日本円普通預金口座に入金された1,199,283円の人民元口座への振替もこれで可能になった。

そして2通目の書類には、インターネットバンキングの初期パスワードが記されていた。このパスワードでアクセスすればインターネットバンキングも使えるようになるはずだ。これですべてのツールが使えるようになる。

インターネットバンキングが使えるようになってすぐに、日本円普通預金口座から人民元普通預金口座への振替をインターネットでやってみた。HSBCでは、振替は書面でしかできないと聞いていたのだが、どうしてもやってみたかった。インターネットバンキングに慣れるた

めに、他にもいろんなことをやってみた。なんとかコツがつかめてきたが、やはりこの振替はできなかった。やっぱり書面でのやり取りになるようだ。将来的には、たぶんインターネットバンキングでも、できるようになるだろう。

インターネットバンキングを使えるのがうれしくて、いろいろやっ
て楽しんでいるうちに、ログインできなくなってしまった。おそらく、
インターネットバンキングにログインしたまま、テレフォンバンキン
グに電話をかけ、2つ同時にアクセスし、口座番号と暗証番号を入力
したからではないだろうか。何度も試したけど結局、ログインできな
かった。

うわーしまった、どっちもアクセスできなくなってしまった。せっ
かくインターネットバンキングが使えるようになったのに、また要ら
んことをやらかしてしまった。もしかして、もうずっと使えないのか
なあ、と少し落ち込んだが、実はこんなことをしている暇は無いのだ
った。こんなことして遊んでばかりいないで、早く日本円から人民元
に振替えないと。ここまできて切り上げに間に合わなかったら、それ
こそ目も当てられない。

気を取り直し、HSBCからもらってきていた振替依頼書に記入を始
めた。振替元の日本円普通預金の口座番号、振替先の人民元普通預金
の口座番号、支店名、住所、電話番号、そして振替える金額を記入す

る。1度にできる金額は10,000米ドル分ですよという言葉を出し、今回はきりのよいところで100万円を振替えることにした。アルファベットで、ONE MILLION JPY (ジャパニーズ円) と書き、数字でも 1,000,000 JPY と書いて、口座開設のときに書いたものと同じサインをする。このサインが日本での印鑑の役割を果たすのだ。

もう絶対に、間違えることのないようにきちんとチェックして郵便局のEMS便で送った。

HSBCからの手紙、6月27日付け。

アクセスできなくなったインターネットバンキングの件だった。

「最近インターネットバンキング及び、テレフォンバンキングに於いて、パスワードの入力回数が異常に多いのでセキュリティーの都合上、インターネットバンキングを停止しています。もし再開を希望される場合は、この書類にサインして送り返してください」

との連絡だった。不便だと思ったが、それだけセキュリティーがしっかりしているということの表れだろう。もちろん書類にサインしてすぐに送り返した。

HSBCからの報告書、7月4日付け。

「日本円1,000,000円を0.0736292の交換レートにて、人民元の口座

に振替えました。人民元普通預金口座残高、 **73629.27 元**」

との報告だった。やった、ついに成功した。人民元が手に入った瞬間だった。長かったー、今まで。香港からシンセンに行ったのが、4月18日、これまで約3ヶ月弱。構想からは、1年以上。やっと手に入れた人民元。

100万円 = **73629.27 元**、ということは 1元 = 13.58円、のレートだった。

どうやら人民元の切り上げには間に合ったようだ。考えてみれば、これまで自分で自分の首を絞めるようなことばかりやってきた。現住所を証明する書類を持って行かなかった、これが最初の失敗。自宅の住所の読み方を正確に知らなかった、これも大きな失敗。インターネットバンキングを使えなくした、こんなのかawaiiものだろう。

すべてがすんなりといっていれば、5月には完了していたはずなのに。しかし、いくつもの失敗を克服してきただけに、この喜びが何倍も大きいものになったことは間違いなかった。まるで、わざとドラマティックに演出したかのよう。

この初めての投資は、きっと思い出深いものになることだろう。

あとはじっくりとワインのように寝かせておいて、美味しくなるのを待つとしよう。2005年物の人民元はヴィンテージ物になりそうな予感がしてならない。

ひとくちメモ

- ネットバンキングとテレフォンバンキングに同時にアクセスしてはならない。
- 日本円から人民元への振替はHSBCの専用の用紙を使う。
- 預金口座のサインはパスポート同じサインを使う。（すべて統一したほうがよい。そうでないと、あとで分からなくなる）
- 口座開設時のパスポートは期限が切れても捨てたり、国に返納してはならない。銀行はそのパスポートナンバーを控えているため、お金をおろす際、身分証明書として必要になるらしい。

ついに動いた大巨人

いつものことだが、子供を寝かせるつもりが一緒に寝てしまっていたようだ。気持ち良く眠っていると夜中に妻にたたき起こされた。夜中にたたき起こされたのは 9.11、アメリカ同時多発テロの臨時ニュースを見た時以来だった。

「なに？ どうした、今ごろ、 今何時？」

「人民元が切り上げされたって、さっきニュースで言ってたよ」

「ウソ？ なに？ 動いた？ ほんとうに？ で、いくらになった？」

「なんかよく分からないけど、2 パーセントとか言ってたよ」

飛び起きて、急いでテレビの前に座った。チャンネルを回し、やっとニュース番組を見つけた。

米ドルに対して、1 ドル＝8.28元に固定されていた人民元が、1 ドル＝8.11元に切り上げになった。2.1 パーセントの切り上げだった。

「すごいすごい。ついに動いたか人民元。待ってました。いやー、この日をずっと待っていたのよ」

ずっとと言っても、人民元に振替ができたのがほんの2週間前だから、実はそんなに余裕はなかったのだが。というか、もう少しで間に合わないところだった。ぎりぎりセーフだ。

「ホレ見たことか、今までやってきたことは間違いじゃなかった。苦労してやっただけのことはある。うれしいなあ、ウルウル、でもやっほー」

と訳の分からないことを言って、ひとりで喜んでいた。

「でもたったの2パーセントだよ。旅費いくらかかったの？ 2パーセントくらいじゃ経費倒れじゃないの？ 自分は香港とか行けて楽しかっただろうけど」

と妻がちょっとひがんでいた。

「アホか、2パーセントでもすごいことだよ、何年もずっと動いてなかったのが、動いたんだから。それにこれは、ふふふ、ただの始まりに過ぎない。今からぐんぐん上がるための最初の一步なんだよ。どうだ、すごいだろう」

「ふーん、たったの2パーセントがね。そんなもんかな」

と妻はそっけなかったが、興奮してこの夜は寝付けなかった。

2005年7月21日、日本時間午後8時。中国の中央銀行が人民元の為替レートを今までの、1ドル＝8.28元から、1ドル＝8.11元に2.1パーセントの切り上げを行った。さらに米ドルとの固定相場制から、通貨バスケット制に移行するということだった。

調べてみると、通貨バスケット制というのは、自国通貨を固定相場

制のように、ひとつの通貨と為替レートを固定するものではなく、複数の主要通貨で構成するバスケット（かご）に連動させる制度だ。バスケットの中味は、その国との貿易などで関係の深い国の通貨をいくつか決めて、その関係の深さによって各国通貨の割合を決める。

例えば、米ドル 50 %、日本円 30 %、ユーロ 20 %、と割合を決め、それらをひとつのバスケットに盛り付けて、そのバスケットに対しての為替レートを決めるということだ。これによって急激な変動が起きにくい。しかしバスケットの中の通貨（この例では、米ドル、日本円、ユーロ）の為替レートは、それぞれが市場で変動しているので、完全に固定されている訳ではない。つまり、通貨バスケット制とは、固定相場制と変動相場制の中間的な制度といえる。

私も興味があって、その後も少し調べてみたのだが、通貨バスケット制に対する解釈は統一されていないようだった。

まず、そのバスケットに対して為替レートが固定される固定相場制の分類に入るという資料と、もうひとつは、その国の通貨当局が急激な変動をしないように管理している管理変動相場制であるという資料の2つがあった。それぞれが違う意見だった。金融の専門家の間でも意見が統一されていないのではないだろうか。私には詳しいことは分からないが自分なりに解釈して、やはり固定相場制と変動相場制の中

間であると考え納得した。どちらにしろ、そんな細かいことは私たち一般人にはあまり関係ない。とにかく人民元は、完全な固定相場制から抜け出して、今後は変動していくということだけは間違いない。

ちなみにこの通貨バスケット制は  ロシア、シンガポールなども採用しているらしい。

今回、中国が採用した通貨バスケットの中味は、米ドル、日本円、ユーロ、韓国ウォンなどが予想されるが、実際どうなっているのかは分からない。そして、その割合も明らかにされていない。

7月21日の切り上げ以降、中国は人民元の為替レートが前日比0.3パーセント以内の変動は認めるようになった。たった0.3パーセントといっても侮れない。毎日、0.3パーセントずつ上がったとすれば、3ヶ月で20パーセントの切り上げになる計算らしい。まさに、ちりも積もれば山となるだ。

何よりも今回すばらしいのは、1999年以来6年間固定され、今までほとんど動かなかった人民元が、わずか2.1パーセントではあるが動いた。しかも、ただ切り上げられ、そのレートでまた固定されたのではなく、固定相場制を抜け出したということだ。将来的には先進諸国と同じく、為替レートを市場に完全に任せる自由変動相場制に移行し、人民元の価値がさらに上がってくれると私は信じている。

とにかく、今まで長い間眠っていて、まったく動かなかった大巨人が、やっと深い眠りから覚め、ついに静かに動き出した瞬間を目撃することができたのだ。

ひとくちメモ

- 人民元が固定相場制から通貨バスケット制へ。
- 人民元が毎日 0.3 パーセントの変動幅を持つようになった。

それから現在、そして未来は？

時は流れて、現在 2007 年 6 月。私が苦労して手に入れた人民元が、どうなっているのかを報告しておかなくてはならないだろう。ここまで読ませておいて、尻切れトンボじゃ読んで頂いた皆さんに申し訳ないから。

では、まず人民元の為替レートを対米ドルで見よう。

2005 年 7 月 21 日、1 ドル＝8.28 元から、1 ドル＝8.11 元へ切り上げが行われた。そして固定相場制から通貨バスケット制へ移行し、前日比の 0.3 パーセントの変動幅を持つようになった。当初は 3 ヶ月で 20 パーセントの切り上げも期待されたが、実際はどうかというとそんなにうまくいっていないのが現状である。

2006 年 5 月 15 日、1 ドル＝7.99 元。初めて 8 元を切り、7 元台に突入した。これで固定相場制のころから比べると、3.5 パーセントの切り上げになる。その後も上下を繰り返しながらではあるが、じわりじわりと上がっている。

キリのよいところで、切り上げからちょうど 1 年後、2006 年 7 月 21 日の交換レートはというと、1 ドル＝7.98 元。1 年で 3.6 パーセントの切り上げになる。しかし期待したほどは上がっていない。

2007 年 5 月 18 日、中国の中央銀行は人民元の対米ドルの為替レ

ートの1日の変動幅を0.3パーセントから0.5パーセントに拡大すると発表した。2005年7月21日の切り上げ以降、初めてのことだ。

2007年6月21日の対米ドルのレートは、1ドル=7.62元。これで切り上げ前からすると約8パーセントの切り上げになる。約2年で8パーセント。日本の定期預金よりはずっとましだが、それでも当初期待されたほどは上がっていない。

では、対米ドルではなく、実際気になる、対日本円ではどうだろうか？ 私の120万円はどうなっているのだろうか？

まず、2005年7月4日、日本円普通預金口座に日本円で預けてあった120万円のうち、100万円を人民元口座に振替えた。この時の為替レートは1元=13.58円。

その後、残りの20万円（正確には手数料を引き199,283円）も振替えた。この時の為替レートは、1元=13.55円。この2回目の振替は、人民元切り上げ後の、2005年9月12日に行ったのだが、皮肉にも人民元の日本円に対する為替レートは1回目の時より下がっていた。人民元の切り上げが行なわれたあとなので、本当なら1回目より上がっていると考えるのが普通なのだが、結果的には切り上げ前より2回目のほうが日本円からの振替は有利になってしまった。

とはいえ、為替レートは毎日、いや毎秒ごとに変わるので、これば

かりはどうしようもないのだ。

この時点で私が、どのくらいの人民元を手にすることができたのか、
ちょっと計算してみよう。

1回目、100万円 ÷ 13.58 元 = 73637.70 元。

2回目、20万円 ÷ 13.55 元 = 14760.14 元。

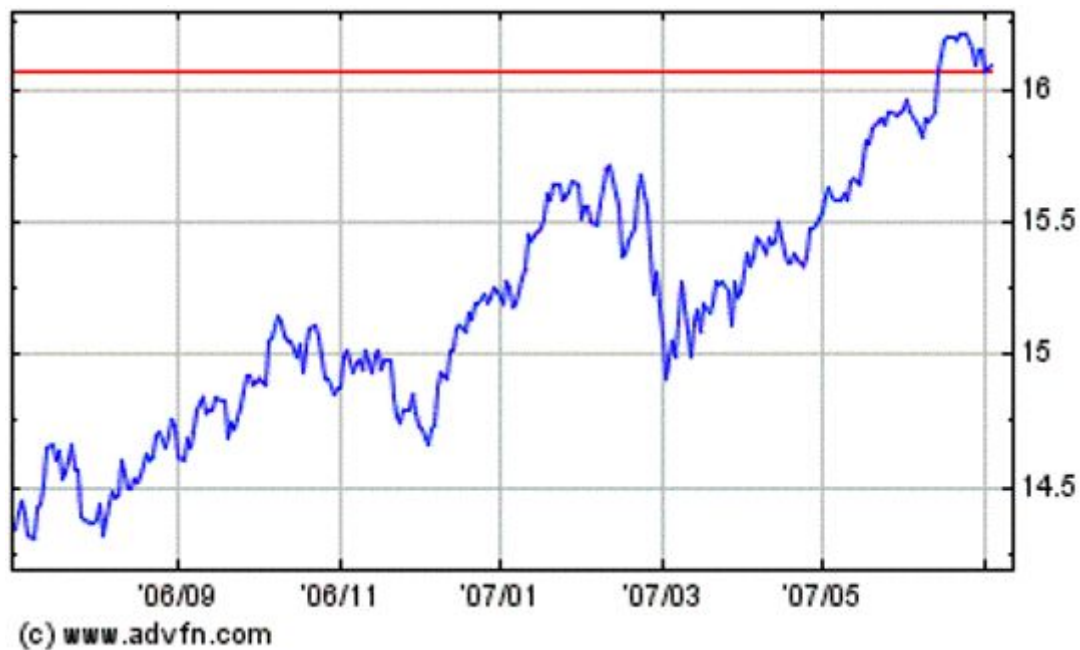
この2つを足すと、73637.70 元 + 14760.14 元 = 88397.84 元。

88397.84 元、これが私の手に入れた人民元のトータル金額。

(振替時の日本円から人民元への為替レート及び金額)

	日 付	レート	日本円	人民元
1 回目	05 年 7 月 4 日	13.58	1,000,000	73637.70
2 回目	05 年 9 月 12 日	13.55	200,000	14760.14
合計・平均		13.57	1,200,000	88397.84

では、ここで人民元と円の為替レートの推移を見てみよう。



(切上げ後、最近の人民元と円の為替レートの推移)

このグラフのように上下を繰り返してはいるが、人民元のレートは順調に右肩上がりで上がっている。

人民元の対円のレートは、2007年6月21日現在、朝日新聞掲載分では、1元＝16.20円 だった。最近の円安もこのレートに貢献していると思われる。このレートを元に、手に入れた人民元を日本円に換算すると、

$$88397.84 \text{ 元} \times 16.20 \text{ 円} = 1,432,045 \text{ 円。}$$

120万円が何もせずに 1,432,045 円に増えている。これで、日本円に対しては、19.3パーセントの切り上げになる計算だ。さらに復活したインターネットバンキングで全額を（正確には全額ではないが）定期預金に振替えて運用したため、年利2.25パーセントの利息のおまけがついてきた。利息はこうだ。

$$1,432,045 \text{ 円} \times 2.25\% = 32,221 \text{ 円。}$$

ここから税金が 20 パーセント源泉徴収される。

$$32,221 \text{ 円} \times 20\% = 6,444 \text{ 円} \quad \text{これが税金。これを引くと}$$

$$32,221 \text{ 円} - 6,444 \text{ 円} = 25,777 \text{ 円。}$$

$$\text{トータルでは、} 1,432,045 \text{ 円} + 25,777 \text{ 円} = 1,457,822 \text{ 円。}$$

もし、今これを換金したとしても、

$$1,457,822 \text{ 円} - 1,200,000 \text{ 円} = 257,822 \text{ 円} \quad \text{のプラスになる。}$$

もちろん香港、シンセンへの旅費、その他の経費は別にかかっているので、それらも書き出してみよう。

自宅から福岡往復のバス代、福岡でのサウナの宿泊代、香港往復の航空券、シンセンまでと香港内の移動費及び観光代、足裏マッサージ代、ゲストハウスの宿泊代、食事代、アルコール代（これは使いすぎ）、お土産代など、すべてで、約 10 万円。

他に銀行の送金手数料、住民票や国際免許証などの経費、郵便代、国際電話代など合わせて約 1 万円。

合計で約 11 万円が経費としてかかっている。これらをすべて差し引いても約 15 万円弱の利益が出ている。あくまでも計算上で、まだ現金を手にした訳ではないけれど。

私の予想では、もっと利益が出る予定だったのだが、これでも悪くはない。香港に 3 泊 4 日で行って、観光して、美味しいものを食べて、美人にも会えて、それが全部ただになって、お小遣いまでもらって帰ってきたようなものだから。

しかもこれは現時点でのこと。もうしばらくすると、1 年の定期預金の 2 回目の満期が来て、1,457,822 円にさらに金利が付いてくる。同じ 2.25 パーセントとして、税金を引いても 26,240 円の利益がさらにプラスになる。

もちろん当分は、この人民元に手をつける予定はないので、今後も元金プラス受取利息が定期預金で、さらに複利（受取った利息も元金にプラスされてさらに利息がつく）で今後も増えていくのだ。

さらに中国の人民元の預金金利は 2006 年 9 月に引き続き 2007 年もさらに上がった。HSBC の場合、6 ヶ月定期でも 2.61 パーセント、1 年定期は、3.05 パーセント、3 年定期なら、4.41 パーセントという、現在の日本では考えられないような高い金利で現在運用され、更なる切り上げを待っているのだ。人民元投資はまだ終わった訳ではなく、現在も進行中なのである。

2008 年の北京オリンピックのころには、もっと切り上げが進んでいるかもしれないし、完全に変動相場制になっているかもしれない。そうなれば人民元の為替レートは、さらに上がっているかもしれない。中国に対する莫大な貿易赤字を抱えるアメリカや、日本をはじめとする先進諸国の更なる人民元切り上げの圧力が、現在も引き続き起こっているのだから。

中国の外貨準備高は 2006 年 2 月には、日本を抜いてダントツの世界一になったとも言われている。2006 年 9 月の資料では中国の外貨準備高は、前年比 24.46 パーセント増の 9879 億ドル。2 位の日本は 8812 億ドルだから、大きな差がついている。前年比 24.46 パーセントといえば中国の経済成長率（2006 年は 10.7 パーセント）を、はるかに上回る数字になる。この外貨準備高の中味を予想すると貿易黒字以外に、中国の通貨当局が人民元の為替レートが上がらないように、人民元売り、ドル買いを引き続き行っているのではないだろうか。

これらのことを総合的に考えると、人民元という通貨は今からさらに価値が上がっていくことが見込まれる。少なくとも下がることはないように思えてしかたがない。

リスクはないの？ いや、あるでしょ！

先ほどのように考えると、人民元投資にはリスクが無いように思えてしまうが、本当にリスクは無いのだろうか。人民元投資のリスクとは一体なんだろうか？

最初に考えなければならないのは、人民元が中国という国のお金であるという最も根本的なことだろう。

中国という国は政策を変えるのが早かったり、周りの言うことを聞かなかったりすることが、よくある気がする。簡単に言えば、中国という国はとてもワガママである。このことが人民元投資の最大のリスクのひとつだと思われる。

極端な例だが、突然外国人の預金口座を閉鎖し、残高を全額没収するというとんでもない政策を打ち出すかもしれない。しかし、一昔前の中国ならあり得る話だが、中国も 2001 年には WTO（世界貿易機構）にも加盟し、国際社会の仲間入りをしているので、そのような非常識なことではできなくなったのではないだろうか。さすがにそんなワガママは国際社会では通用しない。そんなことをすれば今後、世界の国に相手にされなくなるだろう。

次に、原則として人民元は国外への持ち出しができないというリスクも挙げられる。急にお金が必要になった場合でも、日本円の現金に

替えることができないということだ。例えば、株ならどうしても現金が必要な時は、多少損をしてでも株を売って現金を手にすることができるのだから。

ただ、この点も今後は改善されていくと思われる。このままでは北京オリンピックや上海万博に世界中から人が集まっても、帰国時に手持ちのお金を、人民元以外に全額両替しなくてはならないので不便で仕方ない。そうしなければ、出国時に没収になるのだろうか。没収すれば中国政府はさらにお金持ちになるだろう。まあ、これは冗談として……。旅行者もこんな不便な国にわざわざ、もう1度行きたいと思わないだろう。私も行きたいとはあまり思わない。そのように多くの人に敬遠されても仕方ない。

北京オリンピックのころには人民元も使いやすくなっていたほしいと思うし、そうになっていくべきなのではないのだろうか。

実際私が口座開設をしたころは、このような投資の場合、人民元は一方通行で、日本円から人民元に振替えることはできるが、その逆はできないと言われていた。だから当時はそれもリスクのひとつだと思っていたのだが、最近は中国からの送金もできるようになったと聞く。ただし日本円から人民元への振替の時のように限度額があり、その範囲内でできるらしい。つまり人民元から日本円に両替して日本への送金も可能になったということだ。

それに最近では、実際に中国に行かなくても口座開設を代行してくれる日本の代理店も現れた。ちなみに調べたらHSBCの口座は作れないとのことだった。もちろん入会金や年会費などの手数料がかかるようだが、旅費を使って自分で中国に行くよりはずっと安い。そこの代理店に頼めば、中国の銀行でクレジットカードを作り、人民元口座での決済もできるとのことだった。

とはいえ、私は根っからのバックパッカーなので、わざわざ中国へ行き、自分で口座を開設することに挑戦したかったのだ。そのプロセスが私には楽しいのだ。やはり私は投資家というよりもバックパッカーだということなのだろう。もっとも、そのころには、口座開設の代行サービスはなかったのだが。

このように、いろんなところで、ずいぶん規制が緩和され、便利になってきた。今からはもっと使いやすくなっていくことだろう。つまりこの2番目で述べた人民元を持ち出せないというリスクは、もう無くなったと考えてもよいのではないだろうか。

その他にも人民元の為替レートが暴落するというリスクも、もちろんあるが、これは今のところは考えなくてもよさそうだ。他の国の外貨預金よりはずっとリスクは少ないだろう。

また、まったく別のリスクとして中国と台湾との戦争、これも怖いものだ。台湾を奪還するために、中国が武力行使に出るなんてことも、

なきにしもあらずだが、戦争や紛争は悲しいことだけれど、世界の何処かで常に起こっているものだ。

とにかく人民元投資にも、何らかのリスクはあると思われる。リスクの無い投資なんてこの世には存在しないのだから。

私が旅した中でも中国は、貧乏旅行をするにはハードな国だと感じた。とにかく人は多いし、みんな自分勝手にずうずうしいし、マナーが悪く、ごみは散らかすし、つばは吐くし、人前でも手鼻はかむし。このような人たちと列に並んで汽車のチケットを買う時なんて、本当に大変な思いをした。その反面、食堂などで飲んでいる時など、隣の席からでもタバコを勧めてくれて、言葉が通じなくても話しかけてくるようなこともあった。タバコは中国人のコミュニケーションに欠かせないアイテムらしい。そんなやさしくて、人なつっこい面も感じることができた。

さらに彼らには、すごいパワーを感じざるをえなかった。それぞれが自分勝手だが、結束力はとても強いように感じた。その証拠に彼らは世界中のあらゆる国や地域でチャイナタウンを作り、商売も上手で世界中何処でも暮していけるようなパワーを持っている。世界で最も強い民族のひとつに違いない。そのパワーで今後は世界の経済を引っ張っていくのではないだろうか。

ここで私が考えるリスクへの対処法も、いくつか挙げておこう。

もし預金しているお金がどうしても必要になり、インターネットバンキングなどでもHSBCから日本へ送金ができない場合どうするか。

これはあくまでも私の個人的なアイデアだが・・・

まず、この前のように、香港経由でシンセンに行き、HSBCで預金口座から人民元を全額おろす。人民元を現金で持ち出すと国境で没収されたり、盗難に遭う可能性があるので、人民元以外のトラベラーズチェック（米ドルがよいと思う）に替える。トラベラーズチェックの手数料は何処でも1パーセントのはずだから、保険と思えば決して高くはない。このトラベラーズチェックの発行番号をすべて控えて香港へと国境を越える。この時持っているお金は、もはや人民元ではないので没収の心配も無い。万が一没収や盗まれたとしても発行番号を控えておけば、トラベラーズチェックは再発行ができるのだから。そして香港もしくは日本に帰国後に現金に替える。これなら大丈夫だろう。もちろん現地に行かなくてはならないけれど。

ちなみに私は、前の貧乏旅行中はトラベラーズチェックの発行番号はもちろん控えてあったが、それとは別に、もし荷物が全部盗られてしまっても大丈夫なように、インターネット上のメール（ヤフーやホットメールなど）に発行番号を控えておいた。これならインターネッ

トが使える場所なら何処でも、紛失したトラベラーズチェックの発行番号を調べて、再発行してもらうことができるから。マニラではこのおかげで再発行ができたのだった。

そしてもうひとつ、別のリスクの回避方法を挙げると・・・

中国旅行を企画して、たくさん友達を連れて中国に行く。オリンピックや万博もいいけれど、チベットツアーなんていうのはどうだろう。チベットはすばらしいところだから。なんてたって私のルーツなのだから。

そこで私の人民元の預金をおろして、それをみんなで使って楽しく旅をする。

日本に帰国後、友達からその分の料金を日本円で返してもらう。結局両替したことになる。飲みすぎて太っ腹になり、おごってしまった分は両替手数料ということにしよう。

最後に、最大のリスクについても考えない訳にはいかないだろう。数あるリスクの中で一番起こってほしくないことだが、中国が外国人の預金を没収するというケースや、中国という国が破綻するという最悪のケース。つまり投資した全額を失うような、超非常事態が起こってしまった場合。これは本当に最悪のシナリオだろうな。考えただけで、ゾーっと寒気がしてしまう。さあ、どうしよう。その時はやっぱ

り、もうこれしかないだろう・・・

口座を開設しに行った時の香港を思い出して、もう1度バーチャルで旅を楽しむ。私には似合わないが、そのバーチャルの中では、超一流ホテルに泊まり、超豪華な食事、運転手付きのリムジンも頼もう。ブランド物のショッピングなんかも楽しんでしまおう。最高級のクラブでハーレム状態。そのように香港で豪遊して派手にお金を使い、残り全額をマカオのカジノで負けたのだと自分に言い聞かせる。

そして今回は貴重な人生勉強をさせてもらったと神様に感謝する。これしかないだろう。

そしてみんなに笑われる。どうだろうか？ これはグッドアイデアに違いない。というより、こうするしかない。このことは今後、話のよいネタにもなることだろう。飲み屋に行ってもモテモテかもしれない。こんな笑い話はめったに聞けないだろう。別の意味で、一種の自己投資になるかもしれないな。

そうなった時はこの本を読まれたあなたも一緒に笑ってください。本当にアホな元バックパッカーがいたぞって。貧乏旅行者が旅行から帰ってきたら、本当の貧乏になったぞって。

もう、笑うしかない。それでいいんじゃないかな。

しかし今回の経験で得たものも、たくさんあった。この投資はすご

く勉強になったし、そして何より楽しかった。さらに失敗を克服する力を身に付けられたような気がする。また男として一回り大きく成長できたのではないだろうか。

でも、そんな強がり进行いくら言っても、やっぱりあとでひとり、こっそりと泣くんだろうな。人目を忍んで。

そして涙も枯れ、泣き疲れたころ、
「つぎはインドあたりかなー、インドルピーも怪しいなあ。あれも化けるかもしれない。いや、ベトナムドンも怪しいぞ」
なんて、きっとまた考える。

結局、まったく懲りていない。これもいつものこと。
そこで、さらに考える。

旅ってやっぱり、いいもんだなあ。

そしてまた、旅に出たくなる。

完

あとがき

最初にも書きましたが、私は過去にバックパッカーとして、たくさんの国を旅していました。世界中にはいろんな通貨があり、国境を越えるたびに持っているお金を両替しなくてはなりませんでした。手元には米ドル、日本円、そして滞在中の国のお金があり、為替レートと両替手数料を見ながら、少しでも条件のよいところで両替をする癖が付いていました。旅行中、両替はまさに生活の一部になっていました。人民元投資はそういった経験をもとに行なったものです。まさにバックパッカーにぴったりの投資といえるでしょう。

最も身近な米ドルでは、日本にいながら同じような投資ができます。例えば、ある銀行では日本円の預金口座と米ドルの預金口座が開けます。インターネットやその銀行の ATM を使い、日本円で預けたお金を米ドル口座に振替えたり、日本円口座に戻したりすることで利益を出すことも可能です。今流行の FX（外国為替証拠金取引）よりもずっと簡単な理屈です。FX よりずっとローリスク・ローリターンになります。

人民元投資も、手続きはやや複雑ですが、（私の場合、自分で自分の首を絞めたので・・・）結局これと同じことを人民元で行なったと

いうだけの実はとてもシンプルな投資だったのです。

外国投資を始めれば、次は国際情勢なども気になってきます。そのように投資は視野をぐんぐん広げてくれます。

この話を読んで、投資の経験がまったくない方も、少しは投資に興味を持って頂けたのではないのでしょうか？

人民元の為替レートは、ドルやユーロと違い、あまり身近ではありませんが、インターネットはもちろん、朝日新聞の経済欄にも毎日載っています。私が120万円で手に入れた88397.84元が今後どうなるのか皆さんにも電卓を片手に、見守って頂きたいと思います。それだけでも人民元投資の楽しみを少しは感じて頂けると思います。

(手持ちの88397.84元が日本円でいくらになるかのレート比較表)

	振替時	07/6/21	?	?	?
人民元	13,57	16.20	20.0	30,0	40,0
円	1,200,000	1,432,045	1,767,956	2,651,935	3,535,913

(預金金利は含まず)

私の目標としては元手の120万円が、2～3倍、つまり240万円～360万円に育ってほしいと願っています。ですから、1元＝30円～40円くらいになればタイミングを見て、日本円に両替をしたいと考えています。さて、そんなに上手くいくのかどうか。しかし、投資をしている以上は最大限の利益が出るように、今後もレートのチェックや、中国の中央銀行や政府の動向に注目していきたいと思います。

次回は「ずっこけバックパッカー、人民元で大もうけ」サブタイトル「もう、ずっこけとは言わせない！」という本でも出して皆さんによい結果報告ができればよいのですが・・・

それでは、最後までお付き合い頂きまして、ありがとうございました。

謝謝、再見

ZBP たっちゃん